した。
出発時には後庄だと指示された部落に帰り着いたものの、中隊は居ない。此処に入って居るのは第二中隊だ。
「第一中隊は居りませんか。」
「第一中隊か、第一中隊は此処が後庄だと思っとったが、後庄はこの北の部落だから、そちらに入っている。」
俺達が尋ねた第二中隊の将校は親切に教えてくれた。
これでは中隊は居ない筈だ。北の部落に行っても、ここは猫の子一匹いない無人部落だった。しまった。中隊は南京城に入ったのか。残念だ。突嗟にそう判断した。やるせない気持で、二人は城壁に通じる道を探した。
周囲はまだ暗い。幾条もの道はあったが、池のようなもので遮られていて、城壁の下に出る事は出来ない。漸く探し求めた一本の道が、城壁直下の道に出る事が出来た。間近かに見る城壁は、更に巨大で小山を切り立ったような威圧感を覚えた。
此処から左手僅かな距離に、連日友軍重砲弾を射ち込んだ破壊口が見えた。不思議に今日に限って、敵からの射撃はなかった。
此の時北方から、城壁直下の道を此方へ接近して来る一団が見受けられた。敵か味方か、三十名程の一団だ。身を隠すにも場所がない。素早く城壁の中程から駆け下りて反対側の道端の葦の繁みに身を秘めた。
接近したその一団は紛れもない敵だった。俺達二人の目前を通過して、城壁の破壊口を登り。音もなく城内に消えて行った。若しこの背後から手榴弾を投げ込んで先制攻撃をしていたら、恐らく相当の戦果を上げたことだったろうに、俺達は中隊に帰ることのみ念頭にあって、これに気がつかなかったのは迂闊千万であり、返す返すも残念だった。
敵が音もなく城内に入ったのは、城内に未だ中隊が入っていない証拠だ。再び引返して中隊を探す。猫の子一匹居なかった無人部落の、その北の部落に中隊はいた。中隊が後庄に到着を、大隊本部に報告した旨を復命
「今、敵三十程、あの破壊口から城内に入りました。あそこに道があります」
と報告した。これを聞いた附近の兵隊が、ざわめき発進の動きを見せた。他の奴等に先を越されて堪るか。多々見と俺はその場からまっしぐらに、城壁に向って駈けた。
右手の中山門は既に陥ちた。敵が居ようが居まいが、問題ではない。全精力を傾注して破壊口を登った。一番多々見一等兵、何としても抜くことが出来なかった。二番水谷、三番常光衛生上等兵。後は数珠つなぎに登って来た。
時七時二十分
城壁上に立って、銃をかざし、東の空に向い、喉も裂けようと、有らん限りの声で万才を叫び続けた。俺は兄から贈られた日章旗を思い出し、銃に結びつけて万才を繰返した。
皆、感激の涙で、顔はくしゃくしゃだ。嗚呼、待望の南京城頭、全軍この感激に浸ることの叶えられた者は、我々を含めて、極めて少数でしかないのだ。武人の本懐、万感胸を埋め、幸福感は全身に益れ漲った。よくぞ日本男児にうまれけりだ。
中山門外北方丘陵が、雄大な姿で暁の明るみに浮び上がって来た景観は、殊の外強く印象つけられた。城壁の背面は、切り断った前

面とは対照的に、なだらかな傾斜になっていて、降りきった所に一軒家があった。人影もないこの一軒家の中央に三杯の大鍋がかけられてあり、蓋を取って見ると、パッと湯気が上って煮えたばかりの真白な飯が顔をのぞかせた。
俺達は敵の残して行ったこの思わぬ贈物に、我も我もと、手近な木片や木の枝で、掻き込みにかかった。
「襲撃されたら何うするか。皆警戒線につけ!」
小村小隊長が叱り飛ばした。だが皆ありついた飯から離れそうにない。
「言う事を聞かん奴はブッタきるぞ!」
小隊長は抜身の軍刀を構えている。敵前抗命で、本当にブッタ切られないとも限らない。未練を残しつつ家外に出て警戒線についた。この場の小村小隊長の、威厳のある凛たる命令は、指揮官の頼母しさを感じさせられた。
直に馳けつけた大隊長の記念撮影があるというので、再び城壁上で万才をして撮影を受ける。
続いて前進、迫撃砲弾二百発、銃弾数千発を鹵獲する。前に見える飛行場に三機が残されている。一斉に発進殺到した。飛行場中央附近に侵入した時、前方五〇米に爆弾十数発が炸裂した。上空高々度に爆撃機三機の編隊を見る。この編隊より投下されたものだ。機体の標識は丸く、日の丸とも青天白日とも判別出来ない。友軍機が南京入城を知らず、俺達を敵と誤認しているのだと、日章旗を水平に振り続けて占領を知らせる。
旋回した編隊は又数発を投下した。これは一〇〇米前方に爆発した。大隊の無線連絡で、上空飛行中の爆撃機は敵である事が知らされ、早々日の丸をまいて遮蔽した。敵機は他の城門らしい箇所の附近を二、三爆撃して引き上げて行った。程なく上海方面より、友軍戦闘機隊が猛速で飛来し、敵機を追跡して西の空に姿を消して行った。
左前方一〇〇米、破壊された建物の影に敵を発見、曽野と二人だけで攻撃したが、捕殺したのは一人だけ、俺が発砲、曽野が刺した。
引続いて市内の掃蕩に移る。市内と言っても大都市南京、ほんの一部分の取りついた附近の小範囲に過ぎないが、夥しい若者を狩り出して来る。色々の角度から調べて、敵の軍人らしい者二十一名を残し、後は全部放免する。

十二月十四日

朝、第一公園近くに、我軍の空襲で屋根をおとされている家屋が、宿舎に充てられた。
昨日に続き、今日も市内の残敵掃蕩に当り、若い男子の殆んどの、大勢の人員が狩り出されて来る。靴づれのある者、面タコのある者、きわめて姿勢の良い者、目付きの鋭い者、等よく検討して残した。昨日の二十一名と共に射殺する。
敵の鹵獲小銃で鳥を射ったら見事一発で命中した。敵の小銃モーゼルは性能が良いのだろうか。公園にでて鳥を射って見たが、全々駄目だった。先刻の命中は紛れだったかも知れない。
夕方になってから、近くの少し程度の良い宿舎に移る。この宿舎に入ってから、多々見と二人で自転車で菓子や砂糖の徴発に行く。夜遅くなったものの、収穫多々で帰る。

後方の湯水鎮に於て、南京攻撃司令官朝香中将の宮殿下軍司令部が、敵の包囲下に在り急遽出動を命ぜられ、発進したが、再度の命令で取り消された。

十二月十五日

今日も又移動。昼食携行で日本領事館の方向、難民区に行く。経路は中山路だろうか、広い道路はぎっしり路面を覆いつくして、逃走の際脱ぎ捨てられたものの如く、支那軍の軍装で埋め尽されていた。弾薬等も多数放置され散乱してはいたが、兵器の類はその割合に少なく感じられた。

行けども行けども、何処迄歩いても衣服は道路を埋め尽し、これを踏みつけては歩き通した。よくもこんなに大量の軍服を脱ぎ捨てたものだ。その膨大な数量にも驚いたが、この軍服を脱ぎ捨てた敵将兵が悉く市内に潜伏しているとしたら、城内には夥しい残敵が、便衣をまとって好機を狙っているのかも知れない。この点は特に充分な警戒が必要であろう。

今日も夕方になって漸く宿舎が決定、難民区の中に、各中隊分散して宿舎に入った。

十二月十六日

午前、中隊長と二人だけで、宿舎北方の山寺へ行く。由緒ある古寺らしく、その規模の壮大さに先づ圧倒させられた。

此処は敵の憲兵第二団が置かれた跡である事が、遺留された書類や物品で判明した。憲兵隊らしからぬ、戦闘部隊用の兵器、弾薬等が夥しく集積されていて、水冷式重機関銃一挺を発見する。其の他被服類の梱包等数えきれない物資が、年輪を経た巨木の繁みの陰に積み上げられていた。

午後、中隊は難民区の掃蕩に出た。難民区の街路交差点に、着剣した歩哨を配置して交通遮断の上、各中隊分担の地域内を掃蕩する。

目につく殆どの若者は狩り出される。子供の電車遊びの要領で、縄の輪の中に収容し、四周を着剣した兵隊が取り巻いて連行して来る。各中隊とも何百名も狩り出して来るが、第一中隊は目立って少ない方だった。それでも百数十名を引立てて来る。その直ぐ後に続いて、家族であろう母や妻らしい者が大勢泣いて放免を頼みに来る。

市民と認められる者は直ぐ帰して、三六名を銃殺する。皆必死に泣いて助命を乞うが致し方もない。真実は判らないが、哀れな犠牲者が多少含まれているとしても、致し方のないことだいう。多少の犠牲者は止むを得ない。抗日分子と敗残兵は徹底的に掃蕩せよとの、軍司令官松井大将の命令が出ているから、掃蕩は厳しいものである。

酒井曹長が中隊に到着

十二月十七日

昨夜十二時頃、非常呼集があって、第一機関銃中隊は揚子江岸に一二〇〇名の銃殺に行っていたが、夜に入り、それ迄死体を装っていた多数の相手に包囲され苦戦中との事。急遽出動したが、途中で大隊本部よりの命令で、概ね鎮圧した由、長以下一〇名が応援に行き、他は帰る。

今日は五時起床。歴史に残る南京入城式だ。指揮班からH伍長、I、G（注・橋本伍長、稲垣上等兵、常光上等兵(?)）が参加する。宿舎の直ぐ裏にドイツ人の住宅があり、何となく親近感をもって遊びに行く。此の家の主人シハイリン氏は居ないが、中国人の給仕が居て葉巻を出してくれた。たどたどしい日本語を話せるのも居たので、正午迄遊んで帰る。

午後は近くの池に、支那軍の手榴弾を投げ込んで魚をとった。六〇糎以上もある大きなのが五匹も取れ、その以下のものも十数匹取れたので、早速天ぷらや塩焼にして食う。

夜昨日の裏の山寺へ行って、魚をとる為の手榴弾二箱を取って来る。

十二月十八日

この頃時々、中隊が鹵獲した小柄の馬に乗る。よく落馬する者があるが、何かの本で両膝に力を入れて馬を挟むようにして乗馬する。と読んだように思うので、そのように努めた為か、俺はまだ一度も落ちた事がない。

戦友達の間で、近々蘇州に帰るとか、漢口へ進むとか、上海に退って警備につく等、いろいろの噂が流れている。蘇州の警備なら頂好（テンハオ）だがなあ。

十月二十四日付の、家からの手紙を受取り直に返事を書く。

十二月十九日

全員集合が掛り、小村小隊長からの訓話がある。

「諸士は本当に良くやってくれた。戦史に残る南京攻撃に成功した光栄をよく嚙みしめて、この名誉を傷つける事のないよう、慎重な上にも慎重な行動をとるように心掛けて欲しい。

家郷に残る家族にも思いを馳せて、いやしくも法に触れるような事のないよう、例え一人の行為と雖も、全軍の威信を傷つける事になると言う事を、忘れないように。

特に放火、強姦等破廉恥行為は、厳に慎んでもらいたい。これ等の行為は住民の最も大きな反感を買うもので、今後の宣撫工作にも悪影響を及ぼし、占領政策上に大きな支障を来すものである。

結婚していた者は別として、独身者は自制出来ない筈はない。若し辛抱出来ない者は何時でも良い、遠慮なく俺の所に相談に来て欲しい。必ず処理してやるから。」

若しそんな場合、何んな処置をしてくれるかはしらないが、この厳しい注意と要望には、暖か味をかんじて聞き入っていた。

中隊に僅かではあるが、新品の編上靴が廻って来た。服部が取り扱ったが、度々の靴傷で苦労した俺の事を気にかけて、最初に

「水谷、お前に合うのを一足とれ。」

と言ってくれたので、有難く十文半の靴をもらった。

十二月二十日

第二中隊の渡辺がひょっこり訪ねてくれた。嬉しい限りだ。此奴の人なつこい笑顔は、全く魅力がある。南京城内で、二人笑顔で再会出来る等、夢にも思った事がなかったのに、共に留守家族に戦死の通知を出す事なく、今日を迎えたのは、二人にとっても大いに恵まれた再会だった。彼の消息を気にかけながらも、今日に至ってし

まった。俺の肩の荷も下りた。

十二月二十一日

戦闘ももなく、弾雨下瞬時の命等と、緊迫した空気の中での生活でもないので、つい日記も書かなくなってしまった。

どうせ俺がやらねばならない仕事だから、戦死者の現認証明書の資料を集め始める。だが、まだ本格的に事務を執る訳ではないから、気の向くままにやっている。

十二月二十二日

俺は勤務につく事もなく、近くを遊び歩いたり、時には裏のシバイリン氏の家へ寄ったり、全く気ままな日々だ。

単身人気のない民家に入り、二階に上がる。半開きの扉から落花生がなだれ出している。占めた。大好物の落花生、南京に於ての南京豆か、大分永らく口に入った事がない。持って帰ろうと思って扉を開いた。農家でもないのに此処は穀物屋か、部屋の中は大量の落花生の山だ。だがその真中には、仰向けに大の字になった支那兵の屍体がある。全く意外でもあり、一瞬ぎょっとした。物音一つ聞えない小部屋の薄暗さは無気味にも感じられた。入口を塞がれでもしたら、単身それこそ万事休すだ。

大量の落花生も見捨てて早々に退散した。それにしても、何うして正服の支那兵がこんな所で死んでいるのだろうか。此処迄逃込んで死んだ者か、それ共此処で発見されて殺されたものか。

恒一からと、田中清一郎君からの手紙を受取る。

十二月二十三日

朝、馬鞍山砲台の衛兵交替があるというので、これについて行く。相当の距離ではあったが、中隊鹵獲の自動車に乗せてもらっての行軍だから、楽なものだった。

岩山をくり抜いて、幾門もの榴弾砲が据えつけられている。前面は何れも頑丈な防壁で保護され、砲口は前方眼下の揚子江(だろう)に向けられている。内部は弾薬庫、兵員室等能率的に配置された、完全武装の砲台だ。面白半分に砲を操作して見る。一点の曇りもない程に手入れも行届き、塗装部以外は鋭く光っていて、上下左右自由自在に滑かな操作が出来た。敗戦の支那軍と雖も矢張り軍人、兵器の手入れの良く出来ているのには、いたく感じ入った。

午後、城壁上に、伊佐部隊木越隊一番乗の、記念標柱をたてて置くべきだと思い立つ。附近に適当な用材も見当らないまま、長さ一、五米、幅二〇糎の角材を充てる事にして、表に

南京城壁一番乗　伊佐部隊木越隊

裏面に

昭和十二年十二月十三日午前七時二十分

と墨書した。

予備役の下士官や先輩達始め、皆の戦友が快く協力を買って出てくれ、ガソリンの補給の見込みもないのに、自動車を使って、城壁突入口の下迄乗せてくれた。

城壁上に、小円匙で穴を掘って建てた。付近の景観が余りにも雄大過ぎて、この標柱は如何にも見すぼらしく、マッチ棒位の感じよりしない。残念だと思った。もっと大きな材料を探す努力をすべきだった。

「小さ過ぎた。残念だなあ。」

と俺が口惜しがると、

「良いよ、良いよ。これで良くわかるよ」

と皆が慰めてくれた。

十二月二十四日

愈々後方移動が決定された。午後、数名で縄や紙、ドンゴロス等梱包材料を徴発に行き、とある民家で、珍らしい饅頭の、格別美味いものを御馳走になった。

十二月二十五日

午前は専ら明日の出発に備えて、携行品以外の梱包等の移動準備。

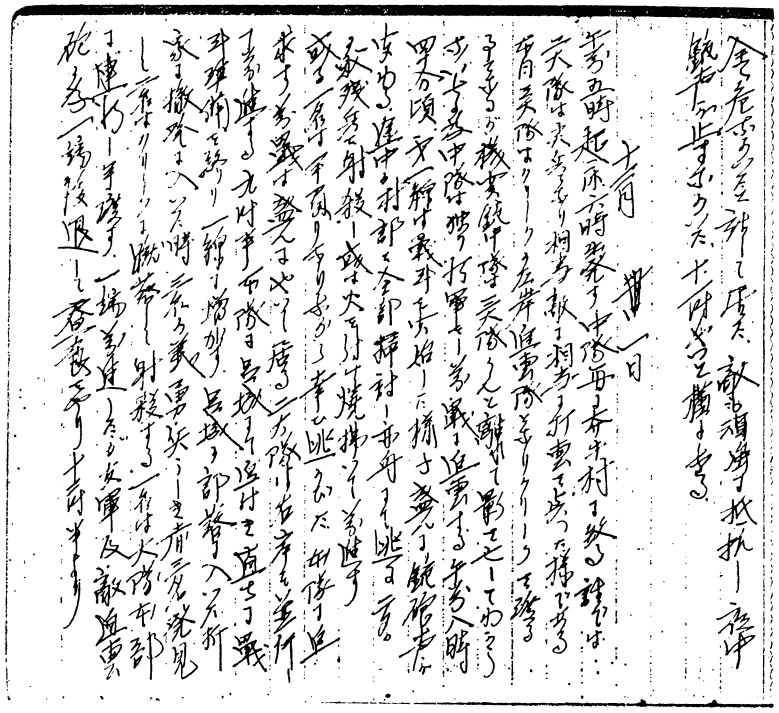
午後中隊の軍装検査がある。

明日の出発予定は午前六時の為、日夕点呼は一時間早く、七時に終る。

一時間早い点呼だったが、班に帰ってからは、南京最後の一夜を惜しんで、次から次へと上海上陸以来の、思い出話に花が咲いて止る処もなく、夜も更けてから、いつとはなく寝入る。

牧原信夫日記

歩兵第二十聯隊第三機関銃中隊・上等兵



牧原日記原文

◇十二月十日

午前四時起床朝食を終て二食分を準備して四時五十分当部落出発南京街路上に二大隊を尖兵に整列完了す。三大隊は本隊、一大隊は連日の第一線に引続き西、鉄道に沿ふ地域にて陣地構築し昨夜は夜を徹して居る。二ヶ小隊は小銃中隊に配属となる〔三、四小隊は九、十中隊に夫々配属〕。主力は一、二小隊、自分も三小隊に連絡に行く所だったがやめて中隊と大隊の連絡に行く。

先ず一大隊の線に出て交代す。昼食は或る藁の影〔積んである陰〕でふるえながら凍った飯を食う。八時頃から野砲聯隊も到着し九時頃から一ヶ聯隊が放列を敷いて九時過から猛烈なる射撃を開始したが敵もさるもの盛んに野砲（重砲）重迫撃砲をもって我に答える。

敵は全地形地状がお手の内だから全く油断は大禁物である。ヒュヒュと盛にやって来る。

九時半頃より大隊は散開し攻撃前進を始めた。そこを見て敵は何所かの砲台から猛烈に射撃して来る。吾が重砲でたたけないかと思うと全くはがゆい。

北に約一里前進し二時前には広陵営〔孝陵衛?〕北方高地を占領す。此地は文化住宅及び農業試験場等立派な建物が軒を並て立っては居るが、友軍の朝よりの砲撃の為原形を認めないまでにやられて居る。大隊砲は此の試験場内から敵の陣地を見付けては射撃し始めた。聯隊砲も西山高地のトーチカを一斉射撃、野砲、重砲の此の西山一つを目標にやって居るのであった。自分が連絡に大隊本部の試験場に来た時、豚小屋があってそこには子供十二、三匹連れた親豚が食う食物はなく子にはせぶられ可愛相に横になったきりで動こうともしなかった。嗚呼、可愛想に動物まで戦争の災難を受けて居るのだ、早く静まれば動物まで喜ぶものをと一人感極った。

又右の方紫金山も砲弾或は歩兵の為所々に火の手が上り美しい程燃えて居る。薄暮になると敵もさるもの我方の夜襲を恐れてか小銃、砲弾を盛に射って居る。時たま自分達の近辺にも落下して全く危険である。右第一線及紫金山を攻撃する九聯隊も仲々戦闘が進展しない様子、今朝来盛んに射って居る。戦車隊もすぐ前の凹地に前進し此地の掃討をやって居る。軽、中戦車が居る。ようやく附近は夜のとばりに包まる。話によれば軽戦車は地雷にやられ又野砲も敵砲弾が砲に命中して一ヶ分隊全滅したそうだ。それで重砲が気球の観測に依り立派に敵を一倒した話である。

夕食準備に或る建物に入って炊事をやって居るとまもなく此の火が敵に漏れた為に一斉射撃を受け二、三発はものの五間もない所に落下し、ひやっとしたのですぐ火を小さくして炊事を続ける。今夜は此の土堤にて一夜を明し、明早朝総攻撃である。自分も支那軍の襦絆袴下を拾いて身につける。毛布を拾う。敗残兵はすぐ下の部落に相当居るそうだ。何時逆襲を受けるかわからない。且又小銃中隊との連絡が全くとれて居ないので淋しくて且寒くて眠れないが、而し何時か毛布一枚布き岡山〔親年〕と二人抱合って何時とはなくねむって居た。戦銃隊は一番〔晩〕中交代で三人銃につききりで気の毒だ。

◇十二月十一日

午前一時半、迫田曹長殿〔弾薬小隊長〕が来られ弾薬の補充をなした。

全く薄気味悪い一夜を堤防の陣地で明かした。此地の建物は友軍

の野砲の集中射撃に依り殆ど原型を認められないまでになり未だ焼跡はあつい灰が重りくすくすくすぶって居る様な状態である。

午前九時半攻撃命令が下りMGは大隊の中間第一線に出る。前方の敵陣地には一昨日来野砲が千発近くの弾を西山一ヶ所に射ち込んだのではあるが、未だ何所からか敵弾が飛んで来る。敵前をほふく屈身前進して敵前六百米に迫り、いよいよ最後の攻撃開始し八銃〔中隊の全火力〕、一時に西山の敵重火器を求めて火をはく。到る所に掩蓋銃坐を作って居る。速射砲は盛んにこれに射込み或る時は掩蓋銃坐がぶちこわされて空高く舞上がる材料など見た時は愉快である。最早現在射つ敵は逃るに逃られず捨身の射撃である。此□にて各銃は二千発から発射す。敵も左或は右からとチェッコを以て吾に向う。大槻六一は耳の上から貫通銃弾を受け即死した。可愛想に最早帰らぬ永眠だ。少しして橋本長一上等兵は伝令に帰る道、後方から腹に一弾を受けすぐ後に下る。何でも重態の様子、後の話ではあるが、腸を七所もぬったそうである。

二時半突撃命令は花火信号があがった。左の部落には聯隊予備隊の七中隊、次山麓には十二中隊、左高地に十中隊、右には九、十一中隊が突撃したが、敵も頑強に抵抗して中腹で一端〔旦〕突撃隊は停止の止むなきに到ったが、運良く戦車隊の掩護射撃を受け、三時二十分には完全に占領す。而し敵ながらあれだけの砲撃を受けながら現在見る様に終まで頑張ったのは感心した。

十中隊は此等の敗残兵の為或は逆襲され相当占領後損害を受けた様子、敵ながら天晴だ。中隊長殿〔古北光太郎大尉〕も口に負傷された。何でも手榴弾の為だそうだ。機関銃も直に突撃して爾後の掩護射撃を準備す。自分は大隊本部の位置左の斜面に位置す。丁度四時半やれやれ一ぷくした時敵砲弾の集中射撃を受け不幸波多野、才本、田中義太の三〔人〕戦死、及び広田、真下以下十名余りの負傷を出す。特に田中は重い弾薬を補充し中隊の位置に帰った所だった。而も彼は天皇陛下万歳の三唱して憤死した。中隊としては大打撃である。直に戦死傷者の整理をして収容所に運ぶ。約二時間の後兵力の集結を終る。

二大隊方面の敵が頑強な為応援に機関銃中隊はすぐ行けとのさい促を受けたが結局は行かず仕舞だった。又、伊達少尉は不思議にも山の脚にて背に貫通銃創を受け一時下られたので前田班長が三小隊の指揮をとられた。八時〔午後〕には後方部落にて炊事を終ったが敵はまだまだ吾等の火を見ては盛んに砲撃を加える。気持が悪くて困った。紫金山も半分程は占領し至る所に火が燃えて居る。第一線は敵陣地を利用し二MGの一分隊は中隊長と共に一夜を〔我等の陣地で〕あかす。時々此方にも敵弾がやって来るし、小銃弾は盛んにやって来た。

◇十一月十二日

昨夜来第一線にて二MGの一ヶ分隊と共に一夜を明す。自分は支那の毛布を下に敷き上に一枚〔官給〕毛布をかぶって寝た。午前七時目が覚めた。夜は寒くて寒くて何時も目がさめ、或は敵の射撃に応戦する友軍の射撃の音に何度もおこされた。殆ど今夜も寝れなかった。三・四回砲弾もやって来た。何しろ夜間になると友軍は砲撃が不可能な為敵は此の機を見ては射撃する。敵の方は地理に明るいから火さえ見れば何時でも射撃が出来る。今朝は食事がない為カン〔乾〕パンを食う。下の部落も地雷が多く埋って居て危険至極である。九時頃には此位置を下り中隊本部の位置に帰る。

九時半から友軍の攻城砲は南京の城壁砲撃を開始した。眼鏡で見て居ると仲々命中率は良いが容易に破れない。一大隊前面の敵は頑強に抵抗して前進不可能の様子、敵弾は盛に我方に見舞、九中隊の一名は下の部落に炊事に行く途中やられたそうだ。昨晩夜遅くほまれ〔煙草〕各自三十本貰いて全く救われた様な気がした。

夕方下の部落に炊事に下りたが未だ敵は此の部落に砲弾を射って来る。昨日午後六時頃からずっと壕内にかぶりついて居た。七時頃響〔煙草〕一ヶと三人に一ヶ割にパイかんが来た。又、田中武一君が握飯と肉をたいて持って来て呉れ、棚から下るぼたもちだった。

十時半から不寝番兼歩哨に立哨する。敵は退却したと見え、僅に城門の際にパッパッと火の見える程度である。多分最早抗し尽ての退却だろうと思われる。命令に依れば敵はソビエート製優秀機が千五百台入り何時空襲を受けるかも知れないから、又毒瓦斯弾を使う様子一層注意する様達しがあった。今日の記事は終り。

◇十二月十三日

十三日の夜は明ける。今日で西山高地に於ける陣地を撤退し午前五時此の高地を出発、南京街道上に出る。途中敵の遺棄死体や手榴弾及小銃弾が無数に捨てられて居る。午前一時十一中隊将校斥候が出発す。十二中隊の将校斥候は西山下の三叉路に於て敵の地雷にひっかかり三名即死、六名負傷したと言う話も有った。

道々には地雷の掘りおこした穴が幾つものぞいて居る。又敵が敵の地雷にひっかかって無惨にも手足はとびて真黒になり四名死んで居た。大隊は一端〔旦〕城門に進む手前四百位の所にある遺族学校にて朝食をとり、八時過ぎ出発し城門手前百米位の土堤に依り休憩する。話によると攻城砲の破片が三百米も後方までとんで来たと言う事だ。新聞記者も続々嬉しそうに自動車或は徒歩にて入城す。午前十一時昼食を遺族学校にて終り中山門に向う。大隊は師団の予備隊となり一時兵力を西山々麓に集結（大きな建物が有ったが名は忘れる）、今晩は此地で一泊に決す。九中隊は紫金山の残敵掃討、十二中隊は当部落並に附近の警戒に当る〔MG一ヶ分隊協力〕。MG、大隊砲は大隊主力に離れてまづしい家に泊まる。此家の中には馬が死んで居た。支那人苦力は熱心について来る。隊長訓示。連日に渡る悪戦苦闘諸子は御苦労であった。功〔光〕輝ある軍旗に一層の光輝を添えた。終り。

戦車隊も九時頃掃討に協力出動した。昼頃より大小行李も盛んに入城す。

◇十二月十四日

午前七時起床す。午前八時半、一分隊は十二中隊に協力、馬群の掃討に行く。残敵が食うに食が無い為ふらふらと出て来たそうで直ちに自動車にて出発す。而し到着した時には小銃中隊にて三百十名位の敵の武装解除をやり待って居たとの事、早速行って全部銃殺して帰って来た。昨夜は此地の小行李を夜襲し、小行李も六名戦死して居た。

午後二時大隊は□〔岔……以下この字を使用〕路口に残敵掃討に行く。何でも五、六百現れた為師団命令に依り二時半屯営地出発す。行程約七里ある鉄道線路に沿ひて揚子江の方に向う。海軍部隊もトラックで看護兵が若干来て居た。その兵隊が言う、今度は陸軍はやすんで居て呉れ、海軍が英国をやってしまうから、と力んで居た。岔路口手前約一里半の所で九中隊は一ヶ分隊の兵力で約一千八百名からの支那軍を連れて帰るのに出会った。敵は食うに食なくふ

らふらして居たのも可愛想であった。亦鉄道線路の沿道にはあちこちに敵遺棄死体が転って居た。又鉄道線路すぐ岐れ目の所には百余りもの支那軍が友軍の騎兵の夜襲を受け全滅していた。

此地で約三十分休憩す。手榴弾、小銃弾、拳銃弾、風変りな鍋、書類、衣服、ちゃわん等が所せまきまでうっちゃられて居た。午後六時同村に到着、死骸の有る地から此所迄は全て地雷が多く埋られ危険千万だ。或る時は友軍の自動車がひっかかり、亦敵が敵の地雷にひっかかって、三名位ちりぢりばらばらになり彼等の着物の一部が電線にひっかかって居るのもあわれだった。亦六名の敗残兵を捕えて銃殺す。直に部落の掃討をやったが、唯の一名も居なかった。食事を準備し約二時間休憩して帰途に就く。途中到る所に地雷が埋められ工兵隊が掘ったと言う。もしか一発でものこって居ては一大事だ。幸い無事だった。今一つ異風景は或る部落の車庫に敵が百五、六十名油をかけられて焼かれて死んで居た。而し今僕達はいくら死体を見ても少しも何とも思わなくなった。

午後十一時五十分無事到着す。

戦場真〔心〕理なり。

◇十二月十五日

午前八時起床す。午後二時整列し師団の入城式に参列する為三大隊のみ師団長閣下を迎て入城式に参列す。閣下は後の話だが負傷して居られた。亦ニイ〔中国人〕のコップを徴発し肩より下げて居られた。二時から四時迄門は一切通行禁止され堂々入城す。さすがは帝都、立派な建物が軒を並べて居る。布川〔一馬・同郷〕君に出会う。二大隊は飛行場附近に整列して居た。亦友軍の寛大なる処置により爆撃は城外に限られて居た。城門及附近は相当に砕かれて居た。

先ず交通兵団の所にて一服やり自分は石川軍曹と共に設営に行く。国民政府、参謀本部、国都劇場と言い蔣政権のそれが思われる。新しいのは一昨年から建築し本年九月に竣工した程度のものもある。入門以来約一里前進して宿舎に着く。相不変部隊の誘導に行く。詳細は地図に依る。四時半に全員揃い夫々徴発をして各宿舎を整理する。指揮班も手早くやって居った。

夕食を終り全員は床に入る。敵首都にて安らかに故郷の夢を結ぶ。あちこち三、四ヶ所は火事がおこって居た。

◇十二月十六日

午前十時中山門前に整列完了、本日各大隊は掃討に出る。十二中隊井上〔昌次〕中尉殿の指揮に入る。左縦隊となり掃討に出る。中山門を出て攻撃して来た道を逆に取り、昼食後は概ね大城山から南京に攻入った各部落を国旗を立てて前進す。十二中隊、MG〔機関銃〕、BiA〔大隊砲〕、通信の順にて鉄匠衛、趙家村、蒼波鎮、城頭庙、定林、王家街道を王家衛に向け前進す。午後三時三十分王家衛に到着。

道中は国旗を高々と掲げ逃げる者は逃げよと言う討伐振であった。亦多くの敵の焼死体が転って居た。体は到る所真黄くなり、或は破れて居る。こう戦が終って見ると可愛想である。何所に行っても若い男が居ないのは蔣介石も血迷って全部徴発して行ったらしい。豚一頭殺して早速料理して食う。鍋の徴発には如何様苦労した。一端〔旦〕取って居た宿舎は七中隊にとられて残念だった。八時半命令受領に行き十時寝む。

◇十二月十七日

聯隊は軍の南京入城の為に南京に帰還す。右縦隊は昨夜南京に帰還した。左縦隊は午前八時半謝塘を出発、部落通過毎に火をつけて帰る。行軍序列は十二1／3、十二小銃、MG、BiA、通信、1／3十二の序なり。

十時半、三十分間の野菜徴発が許され、各中隊は徴発に出る。自分も勿論行く。歩兵学校にて昼食を取り、一時間半の後出発す。中山門のすぐ手前の所にて宮殿下が入れられる為一時通行禁止となり、その後各中隊毎に南京市に帰る。宿舎に着くと同時家からの手紙を受取りて大変に嬉しかった。今夜も二、三ヶ所火事があった。〔便衣隊の放火によるもので、夜は外出禁止〕

◇十二月十八日

午前六時半起床、自分は岡山と炊事当番であった。八時に食事を終る。皆は食事が終ると何時とはなしに徴発に出る。自分は事務室に居残る。午後一時から陸海合同の慰霊が飛行場に於て実施され、三大隊は聯隊代表として参列す。炊事当番は居残る。この間に巻脚絆の修理及洗濯をやる。支那苦力一人は一生懸命やっているので大助である。五時食事を終る。あめ、もち米、唯米、石油等色々徴発品が有ったので大助であった。食事終りし後は故郷への便を書く。

朝から小雪が降って大変に寒い。

◇十二月十九日

午前七時半起床す。八時半食事を終え自分と大槻上等兵は岡本少尉〔第三小隊長〕の指揮で中隊の副食物の徴発に行く。先づ南門を通過して城外に出る。而し城外には十三師及各隊が居る為駄目だった。約一時間休憩しその家をやいて帰る。話に依れば下関の山の砲台は殆どうたずに弾薬共に占領したと言って居た。二時同所出発城内に入る。此地方にも相変らず多くの遺棄死体が転って居た。城内に於てナッパ及ニンジン、豆炭を〔一輪車〕三車両積載して〔支那人にひかせて〕帰る。途中雑貨商に入り手帳、鉛筆、インクを多く徴発して帰る。午後五時半だった。支那苦力を今日は一人帰してやった。何しろ妻子供が有るのだから止むを得ん。

◇十二月二十日

午前七時半起床、八時半食事終了す。本日は各中隊毎に慰霊祭実施する。中隊は午前十一時より中隊長近藤少佐、大江伍長、橋本伍長、才本伍長、大槻伍長、波多野伍長、田中一等兵合計七名の合同慰霊祭が。自分は上等兵以下全員を代表して香を捧ぐ。十一時には終了。

午後は一時より中隊の徴発並に明日聯隊の合同慰霊祭準備の為使役に行き、指揮班も人は殆ど居ない。

昨日徴発した部品を全部分配して一日終了。今日の徴発は大したものはなかった。

◇十二月二十一日

午前中は舎内外の清潔整頓を実施する。午後は中隊長殿の巡視があるらしい。午後一時より聯隊の合同慰霊祭に参列す。英霊は近藤少佐、飯田少佐以下百十七勇士である。先聯隊長殿の弔意の□に始まり、読経、旅団長、次各大隊長、中隊長の焼香ありて午後二時半終り、三時に宿舎に帰り、三時半より中隊長殿の舎内巡視あり、夕食も終る。本日聯隊本部に行き黒田君に会う。毎晩火事が起るが何故かと思ったら、果せるかな支那人の一部が日本軍の居る附近に石油をまいて付火するのである。今日は一名捕えて殺す。

◇十二月二十二日

今日も大した事は無い。唯食って眠る程度である。朝食後眠ってしまい午前十一時中隊長におこされ、中隊長の部品徴発に関本と二人で昼食を終えて出発す。先日行った雑貨店に行くが何もなかった。唯封筒だけもって出る。約一時間の後帰る道にて毎日新聞の南京通信員志村記者に会う。此の人の住宅は立派なる家具あり、十八日迄は何ともなかったが、二、三日留守中すっかり荒され置風呂から夜具一切が無くなったから今夜夜具を探して居るのだと言って、民家に徴発に行ってこれ位兵隊はしなければ戦争も出来ないわ、と笑って居た。又十二中隊の看護兵が狙撃された話があった。全くぶっそうである。今日は大隊砲〔宿舎〕のすぐ裏で付火された。

〔十二月十三日至同月二十三日南京城内外の掃討戦に参加〕

◇十二月二十四日

明日は湯水鎮に移転する為本日は準備。

午前六時起床す。自分は昨日から日直で本日昼にて終る。

午前八時、上田、西田敬、二人は先発として車輛十車輛と共に先発す。湯水鎮は湖北唯一の温泉地で良い町らしい。午後三時半西田敬だけ先帰って来た。話では余りよさそうでない。薪木のないのがへいこうらしい。

自分達も明日出発する事となった。三十旅団のみ此地に居残るらしい。点呼後入浴する。入浴場は十九日に出来た。大槻は指揮班で先発す。

◇十二月二十五日

午前七時半起床す。出発準備。指揮班は馬車二輛準備し且大行李から三車輛借りた。

午前十時二十分舎前出発す。馬群を過ぎ湯水鎮に前進す。他部隊の車輛部隊が多く居る上長足を伸して居た。現在の行軍は中々辛い事が多い難儀だった。又自動車隊も多く居た。各中隊共家財道具一切準備し、内地に見る屋根の様で珍形であった。自分達が踏破した山が遥か右の方にうすく見えた。各小隊共に寝具が一番多い〔内地では到底寝られもしない様な汚れたものばかり〕。それに机及薪物まで持って居る。午後五時半頃湯水鎮着、建物〔学校のような〕は大きかったが何しろ大きな部隊が入るので大変に狭くて困った。八時三十分就寝す。

◇十二月二十六日

午前七時半点呼、自分は〔各小隊の使役兵を連れて〕南京に帰るべく準備す。九時二十分自分も一車輛〔中隊で二輛〕準備し田中と共に各小隊と出発す。昨日昼食をした位置にて昼食を終る。昨日よりは部隊も少く行軍が楽だった。午後三時半頃南京到着す。南京に来て見れば部隊はうんとへり淋しいものだった。

〔午後〕八時頃、部隊が少くなったと支那人が知り、厩のすぐ後に火を付けたので厩当番が火事だとわめき或ははだしで飛出して一時大さわぎをやる。馬もすぐ以前の厩に移し待機す。而し大事に至らずやむ。此地方の家は木造が多くて甚危険である。マージャンを少しやって十時半、自分、中島、中西、田中、四名元指揮班の位置〔部屋〕でやすむ。さすがは人数が少いと大変に淋しい、寧ろ心細い限りである。

◇十二月二十七日

午前六時起床、直に食事準備をなして食事を終え、午前八時野菜徴発に出る。四方伍長引率なり。漢中門を通過し揚子江方面に向

う。

漢中門を出た所には五、六百の死体が真黒に焼かれて折重って居た。或は黄い皮が到る所むけ見苦しい状態で散乱して居た。大きな橋を通過し更に進む。道の到る所には遺棄死体が転って居た。約一里半の所迄前進する。当部落は避難民が多く集って居た〔大多数は老人や子供である〕。或る家に行き連れて来た支那苦力に実演さした。次昼食を準備した所〔家〕には丁度日本に四年程行商して居た支那人が居て何かと思出話をやる。大変面白かった。午後一時出発する途中、友軍の射撃を受け四、五発は大変危険な弾がやって来た。此地で白菜の徴発をやり三車輛に満載して四時二十分宿舎に到着す。

◇十二月二十八日

午前六時起床、直に食事準備をなし、荷作準備を終える。昨夜石川班長がやって来た。彼氏は大隊本部の自動車で来て、自動車にて帰る。今度は布団や椅子も準備し午前十時僅前南京を出発す。朝からどんよりと曇り何時雨になるやも知れない危い天候である。大行李も共に出発す。城外に出れば飛行機は盛んに演習をやって居た。昼食事より小雨が降り始め、やがては雪となる。大変に冷たくて困る。一時二十分下白場にて大槻武一郎が自動車にて南京に入るのに出会った。候家塘の部落を通る頃から雪は本降りになって来た。上から下までずぶ濡れになった。四時半湯水鎮に帰った。手足は冷気の為に全く感覚をしない。指揮班の位置は前の大隊本部の位置に変更して居て大変にらくになった。

◇十二月二十九日

午前七時半起床す。こうしておさまってしまうと全くなにもする事がなくなる。従って書く事も全然なしである。

午前十一時から聖旨令旨伝達並に進級式があった。四方〔宏〕は矢張期待通一番だった。内地ならば立派なる伍勤〔伍長勤務〕である。(十二月一日附)。午後は指揮班の餅二斗をついた〔杵や臼は味噌樽や丸太棒〕。始めは〔呼吸が合わず樽の底が抜けそうで〕たいした事はなかったがだんだんよくなった。夜はミソ汁で餅を食う。大変にうまかった。

◇十二月三十日

午後中はなにもない。自分は厩の移転使役に中西、上田と三名と共に使役に行く。厩をトーチカの裏の道路上に移転する。松の木を切り頑丈なる杭を作り、上はトタンを敷いて立派な物を作る。十時頃からいて〔地面の凍〕が溶けて大変に道が悪くなった。午後も同様使役に行く。午後四時完全に終る。唯遠くなったので当番の交代が気の毒だ。

本日朝からは中隊の餅付を実施した。約二石の餅をつく。防寒襦絆、袴下分配された。及防寒地下たび。

◇十二月三十一日

午前中は三大隊本部が湯水鎮の部落に移転した為に、中隊も移動して指揮班の自分達の部屋だけが移転し、九中隊事務室及大隊長小隊長又自分達の前の部屋は新郷〔良夫・速射砲中隊長〕大尉殿の寝室になる。日影の部屋に入る。午後は日直に服務。石川軍曹のつまらぬ誤から手紙の住所書に夜十二時迄かかった。

昭和十二年終

林（旧姓・吉田）正明 日記

歩兵第二十聯隊第三中隊第一小隊第四分隊・伍長

《日　程》

十一月十一日　大連港出帆シ南支ニ
十一月十七日　福山鎮ニ上陸シ南支ヘ
十一月十八、十九、二十日　行軍敵中突破隊
十一月二十一日　午前拾時ヨリ午後五時迄激戦
安鎮ニ於テ
十一月二十二日　午前四時ヨリ孔口山激戦ス
十一月二十三日　同ジク戦闘ス
十一月二十四日　東亭鎮ニ突撃ス
十一月二十五日　同ジク戦闘シ
十一月二十六日　無錫ニ入城到着シ
十一月二十八日　〃　出発南京ヘ
十一月三十日　武進ニ到着露営ス
十二月一日　
十二月二日　丹陽ニ入城突撃ス
十二月三日　白兎鎮ニ到着ス
十二月四日　夜行軍露営山本戦死
十二月五日　〃　夜ノ餅ツキ
十二月六日　夜行軍露営ス
十二月七日　大成山ノ戦闘ス
十二月八日　神四村ノ戦闘
奥山清一戦死ス
十二月九日　南京手前ニ来リ戦闘ス
片岡戦死ス
十二月十一日　北浦尾上入江負傷ス
十二月十二日　大槻伍長吉田上田戦死
十二月十三日　南京城ニ入城ス
十二月十四日　城街ノ掃蕩ス
十二月十五日　捕虜ノ援護ス
十二月十六日　中山門出発ス
十二月十七日　南京城外二里ノ地点

十二月十八日　捕虜ノ番
十二月十九日　南京城外一里地点掃蕩ス
十二月二十日二十一日二十二日　城外デ警備ス
十二月二十四日　南京城内ニテ警備ス
十二月二十五日　〃
十二月二十六日　軍司令部ノ衛兵
十二月二十七日　軍政府ニ転家ス
十二月二十八日　戦場整理ス
十二月二十九日　軍司令部ノ衛兵
十二月三十日　城内ノ警備
十三年一月二十四日　南京城ヲ後ニ午後一時出帆

《本　文》

（十二月）十日午后三時又攻撃前進して五百米、此処にて敵は百米前方の路上より我を射つ。我が分隊はこれを射撃した。私の射撃した場所前へ出過ぎ擲弾筒手草木松太郎君は勇敢にもリョセン〔稜線〕に乗り出した。我も同じく高くて体がかくれぬ。それで横になって畑のみぞうねに入ったがまる出だ。此の所で拾弐発、この時敵は我を狙撃した折良く命中せず、次へと前進又道路、ここから少し頭を上げれば敵は重機関銃で射つ。又その前七〇米、凹地には七、八〇名の敗残兵が逃場を失ってゐる。その中に一〇余りが道を違て我方へと来た。我は幸にこれを狙撃した。見る中に一〇名は其場にたほれた。ああ嬉しい。ここでこの七十余名の逃場を失っているやつを片端から狙撃し又よく命中した。

午后六時、又前進して花園家の所に取りついた。すると又前の陣地より射撃を受け、右左にある家へ入る。準備し掃蕩した。この家こそ立派な家だ。地下室もある。その時中島上等兵は「衛生兵は何処か、大槻隊長負傷した。頭をやられた、早く」と。担架の準備した。衛生兵は駆け行く。大槻分隊長はけが無く只鉄兜に一弾命中して其の音に驚き、たをれたのである。中島君はたしかにやられたと思って右の様な準備をしたのだ。

大槻さんは翌一日中耳が聞えぬと言った。鉄帽には耳上に命中していた。こうして一命は助かる。此の夜は敵は百米前方に居る。下士哨が分隊毎に出るのだ。我々も出た。すると交代するので我軍の行動している音に敵のやろう〔野郎〕射撃する。弾は身の近くを通る。この哨は二時間だ。そうして前方にある刈草の積んであるのを利用しているのだから心細いものだ。下士哨を終る。夜明けて敵軍は我等出口めがけて集中火するのだ。夜はどの家に入っても火はたけぬ。なに故なれば敵は後方より砲兵・迫撃砲の目標となるからだ。火をたけばきっと、迫撃砲弾が落ちてくる。此の日も随分落ちたのだ。こうして朝食をたき昼と夕と朝食まで準備して、又敵の頑強に抵抗する陣地へ前進する。時、十一日午後二時だ。一・二・三分隊と言う様に出た。又道を横きりて出た。

ここは西に面したのりがある。こののりこそ内地の雑木林だった。ここえ各個に前進した。竹之内分隊長を先頭に出ればかいかつ地である。この林を出ると前方二百米の所にトーチカの鉄キンコンクリートで造りし銃眼が我々の目の前に見ゆ。何のシャヘイ物も無いのだが、かや〔萱〕が二、三本あるのみ。敵は我々を狙撃する。頭の前に集中弾。土は我首に入る事数分間、又足の少し後に又同じだ。よくも此の真中へ敵弾は落ちなかった。我は動けば狙撃せらる

るのだから又じっとしているのみ。すると少したって敵は我に弾命中して死んだ者として射撃をやめたのだろう。

隣に井上方次郎君が居た。井上君は工事をやらうと、はいのう（背嚢）をおろして工事を始める。工事にも少しも姿は大きく出来ない。土にへばりついてやうやく前盗だけ入る穴の掘れた時タータタ―と又集中火。思はず土にへばりつく。こうした事三、四回やうやくまにあいの壕が掘れ安心となる。此の戦闘に於て我分隊にも尾上君重傷、北浦、入江君の負傷者を出し、五分間も間なく半分も負傷した事は、如何に難所激戦は言う迄もない。こうして居る中に一時長く停止する事は不利で、又前進する。北浦、尾上、入江君は「吉田さん気をつけて行って下さい」と、「よし仇は討つ」、と前進するに草木は前進すると敵兵は草木を狙撃している。

次に我前進する。また狙撃を受け乍ら凹地に入った。又前には家、これが陣地だ。日は暮れんとする。この家の端によりつけば敵兵は屋上より手榴弾を投げる。我等そら―敵は投げた、逃げろと下がる。又前進して十一日には右一軒家と左一軒家を占領して入る事が出来たが、敵は五十米前方で射ったのだから歩哨は今敵が夜襲すると思われるのだ。一夜明けて十二日になると嬉しや飯が炊けると一軒家後方にて火をたく。一回は九聯隊の中尉に怒られる。そうして右家へ行って朝食と昼食の準備して又前進する。此の時一軒家より次の一軒家攻撃前進する時、吉田（茂夫）、上田久吉は戦死す。これ実に陣内戦の陣内戦、敵は僅かに二、三十米の銃眼にがんばって居たのである。次に第六分隊が続いて突撃の時には我軍を味方と思って居た位であった。敵のやろうは頭を上げて日本軍で驚いたのである。この上田、吉田両勇士の戦死した近くの一軒家に第三分隊長は大槻伍長の言に「我々は多くの部下を戦死させた。今度の前進にあたっては小隊長命令なくば前進はせぬ」とがんばっていたのだが、日本軍の威力を発揮、前進。

この家こそわするる事出来ない大槻分隊長戦死の家である。この家を占領し我は敵に面した西側の一室に入りた時、前のガラスがパンパンパンとわれ、敵弾は我の顔近く裏へ、我は思はずたほれる。顔に手をあてて血の出るのを見る、幸に傷は無く、又東側の室に入ろうとして伏せ歩く。すると向ふに見てゐた草木、竹之内二人が「吉田、なんだそんな顔して」と笑ふ。笑ふどころか我の命は一寸のことで無くなる所だった、と青くなった顔をして両君の元へ来た。「おい、このろうかは危ない西側にかべのある所に居れ」と、戦友に伝へる間も無く、大槻伍長は西に出て小隊長より三分隊は前面の敵を狙撃せよと命じられ、この家の内に入ったのである。西の入口より二室目に来た時、タタタと敵弾は大槻伍長の胸にあたりパタとたほれる即死であった。我等草木と共に「大槻さん」と叫べども、ついにもの言うことなく、目を大きく開いてついに戦死された。

我々は弾薬はない。補充を受けた我と井上は屋上に上り、敵のトーチカ陣地散兵壕より頭を出す支那兵を射つ事二百発。銃身は熱せられる。井上の如きは支那兵の銃と剣と弾を取りこれで狙撃したのだ。敵の捨てた手榴弾等は全部我等が使ったのである。

この十二日午后三時、又次の大なる家陣地へ攻撃前進。敵弾は激しく来る。この家へ弐百米前進して壕を利用して飛込む。この壕に飛込む苦心は一通りでなかった。もう前進せよにも兵が来ぬ。小隊長は一、二、三と号令でいきをいつけて前進した。一人が前進すると敵は数拾発も射つ。よく命中せぬものだ。こうして壕内に入った。すると敵は屋上より我が利用する壕内に射かけた。

この壕もだめだと思ったが行く場は無い。ここで我は日の暮れるのをまつより仕方はないと思ふのだ。我が友軍の砲弾は多数射つが、その時には我等の二、三米上をシャシャと通る気持の悪さ。何時友軍の弾が我がこの壕に落るかもわからないものだと思うと、心細くなる。日は暮れても敵の射撃は一通りでないから、とても今日はこの家は占領出来ぬと後方の家に下る。すると間もなく第三小隊がこの家を占領したとの報がある。

中隊長は喜び、大隊長に報告。我々は又此の大なる家を占領し、十二日夜は宿営する。この時、家に入るや敵は逃げおくれて我々が前進中手榴弾を投げる。こうして午後九時ついに占領された。

この家は地下室あり前には頑強なるトーチカ三階建にてよい陣地です。我が砲弾もこの家には数発も命中している。我々は地下室で炊事して十三日午前四時起床して喜び喜び南京城入城する事になった。これが敵の最も後の陣地である。この家を占領する前には敵はむやみやたらに射ちまくったのである。この家占領後は銃声と言うものは聞かずこうして入城の準備、前進中敗残兵が逃げる。我々は立射の姿でこれを射ちつつ前進する。

我々三中隊は大隊を代表して中山門に入城した。時に十三日①午前六時日の出前である。

中山門は閉されていて、上六分程の処に一人づつ入る位の穴あり、これより入城したのである。こうして午前一〇時工兵の力に依りこの門を車両が通る様にして、午后一時あらゆる部隊は入城する。この時午前九時過ぎ、第十一中隊は中山門より三百米前進し休憩していた所へ、我友軍飛②行機三機やって来て、十一中隊に爆弾を五発投落、第十一中隊は負傷兵、戦死が出たのだ。そら逃げろ友軍、これは飛行機と歩兵部隊の連絡出来ぬ中に十一中隊は入城したからである。

我々は城壁に、四方正治君は分隊負傷者後送の為のこる。こうして十三日午前九時この十一中隊の休憩中の所へ行かうとした時、友軍砲弾落ち四方君は先づ休憩して前進しようとの事だ。城壁には多くの陣地を構築していて、又近くの兵器庫には弾薬兵器がたくさんあり、これを占領す。十三日午後八時迄この壁にて一日を暮らす。他中隊は掃蕩を命ぜられ、我々は午後一〇時宿営する。

明けて十四日、街③の掃蕩する。敗残兵を殺す。又避難所へと逃げ行くニーイコを捕える。町道路上には支那兵服を脱ぎ、避民所へ逃げ入っているのが明らかである。でも避民所以外の所を掃蕩した。これを捕へて殺す。最高法院前にて逃げ行く敗残兵を捕へる事何十名、敵弾は西方より来る中を。

二十四日に再び南京城内の警備に任ず。城内の避民所へ逃げ込みている支那人を二種に分ち、お気の毒な支那兵は揚子江の魚のえさになる。其のトラック④の数は人員〇〇名〇〇台で、残す支那人には安居証を渡し、それには其の人の人相書あり、ここにて取調べる事二週間。城内は幸城壁で囲まれ支那人お化けの支那兵も逃げられず、よくよく調べられて前の揚子江へ。また前記の⑤ホリョの七千名も魚のえさとなる。我々の護衛に行った時には三日三夜食物なしで腹を空にして、水と煙草とお金の交かんが始まる。

寺井閣下（注・同郷の寺井敬二上等兵の仇名）も一生懸命でした。我々は何の欲望もなく、只見るのみ、この支那兵ホリョのなさけなさ、とても日本人であれば死したる共この様な事はして居るま

い。

二十四日、城内に帰りて軍司令部の衛兵とやら大隊の衛兵とやら勤務、勤務の中でお正月を迎へ、さぶけな所で正月元旦見るものは同じ兵隊ばかり。正月二日午后二時敵機五機は南京上空に現はれ城外飛行場に投げ落した爆弾二発、我が高射砲はこれを射撃する間もおそく。西へと我が戦斗機は二、三分の間もなくこれを追撃す。西上空には機関銃の音、じつに日本空軍の早さ、早い事、強い事には誰も驚くのみである。

我が隊は正月前支那軍政府に入り、其の中には支那兵の患者が二百余名も居るのだ。日に日に全快を見る。此のやつ等は如何に処置するか、全快すればもちろん聯隊復帰であるが、友軍はどこへやら、国際上患者を殺すわけには行かぬ。全快すれば揚子江の岸にて我が銃先に立ち、長く眠の旅に行く、もしも全快せざる時には自ら死す、なさけない支那軍戦傷患者はかわいそうでもある。やっぱり支那軍にも娘かんごふさんがやっている。世話しているのだ。この患者は全部後方にて我が砲弾にやられた者が多いと見受ける。他国の人間がこの支那の負傷者を運んだ車はある。又東赤十字病院にも支那軍負傷者は何千居る。此の中には負傷に見せ入っている者もあり、我々は袋の中のねずみにしたのだ。

こうして一月二十四日、思出多き南京城を後に〇〇地に出帆した。

《編集委員・記》

この日記は戦場の実感がよく表われている。南京占領以降は、まとめて書いた故か日時の疑問、伝聞との混同など解読に際し留意すべき点も多い。以下に十三日以降の記述の注意点を補足する。

① 中山門到着時刻が二～三時間早すぎる。

② 第十一中隊を爆撃したのは中国軍機であった。

③ 十四日、城内掃蕩の記述は正しい。逃げ遅れた中国軍は北部で午前中散発的な抵抗を続けており、寧波同郷会（最高法院北西八〇〇メートル）には敗残兵がいた。流弾が来ることは有り得る。

④ トラックは二トン積みで一台二十名程度、台数は不明。

⑤ 「ホリョの七千名も魚のえさとなる」……その当時噂さである。捕虜は（後に記述の傷病捕虜も全快すれば）江岸で処分するものと思われていたらしい。

⑥ 昭和十三年一月下旬、傷病捕虜は軍政部（第三中隊の宿泊所）に二百名、外交部に数百名収容されており、中国人看護婦がついていた。

増田六助手記

歩兵第二十聯隊第四中隊第二小隊第三分隊長・伍長

昭和十二年十二月十三日　此の日こそ我が国史の上に永遠に燦として輝く南京陥落の日である。南京は言ふ迄もなく国民党の本拠、抗日、排日の中心地である。其の南京は一方は大揚子江に臨み三方は山岳、丘陵に囲まれたる天然の要害地。攻めるに難く守るに易き城都である上に数ヶ月に亘り至れり尽せりの防禦工事を施したる陣地に頼り蔣政権興亡浮沈の最後の決戦を試みたのであつた。然れ共破邪顕正の刃を止むる楯なく正義に剣とる我皇軍の前には一たまりもなく僅か三日間の攻撃にて、もろくも破れた各城門には日章旗が翩翻と飜り、洪水に堤の切れたる如く城内になだれ込んだる皇軍勇士の凜とした顔には感激の涙さへ光つてゐた。

中山門を逸早く占領して武名を輝したる大野部隊の花形たる坂隊は午後一時犠牲者の遺骨を抱き血達魔〔磨〕隊長を先頭に堂々と入城したのであつた。中隊は息つく遑もなく田中小〔少〕尉指揮の下に城内の敗残兵掃蕩を開始した。中山門を入って五、六百米の南京大衆病院に這入つた。鉄筋コンクリート四階建の立派な建物が幾棟もある実に広荘なる病院だ。之は上海常熟無錫方面より後送された

る戦傷患者を収容して居た所である。

各分隊毎に一団となり、一兵たりとも許さじと意気込んで踏込んだが其処には血まみれの軍服や破れた帽子や毛布等があるばかりであつたが憎き支那軍の収容所であつた丈でも腹がたつ。戸棚と云はず机と言はず手当り次第に打ち壊した。薬棚器具亟時計等の硝子戸も破壊した。色々の写真標本の類も、ことゞく銃剣で突き出した。

其処を引揚げて中山北路へ出る道中一帯には敗残兵の捨てた兵器、弾薬、被服の類から馬や車等が街路一杯に散らかつて居る。建並ぶ商家は支那軍の為にすつかり持去られて何一つなく人影どころか犬ころ一匹居ない死の街であつた。

其の夜は久し振りに家に泊る事になつた、掠奪はもとより本意ではないが、此処数日間殆ど飲まず食はず不眠不休で戦闘をしたのも全く今日をあらしめんが為では無いか、又今日あらしむる為に幾多の戦友が尊き犠牲となつて居るではないか。祝南京陥落、祝南京入城だ。

方々から徴発して来た洋酒、ビール、支那酒、色々の缶詰類を集

めて呑んだ〳〵そして祝戦捷の歌を朗に唄つた。二日間「グーグー」と泣いた腹へも米の飯をどんどん詰め込んだのであつた。

明れば十四日今日は国際委員会の設置して居る難民区へ掃蕩に行くのである。

昨日まで必死で抵抗して居た数万の敗残兵は八方より包囲されて唯の一人も逃げて居ない。結局此の難民区へ逃込んで居るのだ今日こそ虱潰しに、草の根を分けても捜し出し、亡き戦友の恨を晴らしてやろうと意気込んで配置に付いた。各小隊分れて、それ〴〵複雑な支那家屋を一々捜して男は全部取調べた。

其の中に或大きな建物の中に数百名の敗残兵が軍服を脱いで便服と着換へつゝある所を第二小隊の連絡係前原伍長等が見付たそれと言ふので飛込んで見ると何の其の壮々たる敗残兵だ、傍には小銃、拳銃、青竜刀等兵器が山程積んであるではないか。軍服の儘の者もあれば、早くも支那服に着替へて居る者もあり、又下に軍服を着て上に支那服を纏つて居る者もあるが何れも時候はずれのものや不釣合の物を着て居るので俄拵である事が一目で解つた。

片つ端から引張り出して裸にして持物の検査をし道路へ垂下ってゐる電線で引くくり珠々つなぎにした。大西伍長、井本伍長を始め気の立って居る者共は木の枝や電線で力任せにしばき付け乍ら「きさま達の為に俺達は此んな苦労をしているんだエイ」ピシヤン「貴様等の為にどんなに多くの戦友が犠牲になつているか知れんのじやエイ」ピシリ

「貴様等のためにどんなに多くの国民が泣いてるか知れんのだぞ」エイ。

ピシリピシリ、エイ、此の餓鬼奴ボン「こら此の餓鬼もだ」ボン素裸の頭と言はず背中と言はず蹴る、しばく、たゝく思ひ思ひの気晴をやつた。少くも三百人位は居る一寸多すぎて始末に困った。暫くして委員会の腕章を付けた支那人に「你支那兵有没有」と聞くと向の大きな建物を指差して「多々的有」と答へる、其の家に這入って見ると一杯の避難民だ其の中から怪しそうな者千名ばかり選び出して一室に入れ、又其の中より兵隊に違ない者ばかりを選り出して最後に三百人位の奴等を縛つた。金を出して命乞する者もあったが、金に欲の無い我々は十円札、三枚五枚と重ねた儘ピリツ、ピリツと引裂きポイツと投げる、又時計等出すのがおれば平気で大地に投付け、靴のかかとで踏付けて知らん顔して居る。

夕暗迫る頃六百人近くの敗残兵の大群を引立てゝ玄武門に至り其の近くで一度に銃殺したのであつた。

海軍軍醫大佐泰山弘道著

上海戰從軍日誌

巻ノ九

◇十二月十三日　晴暖かなり

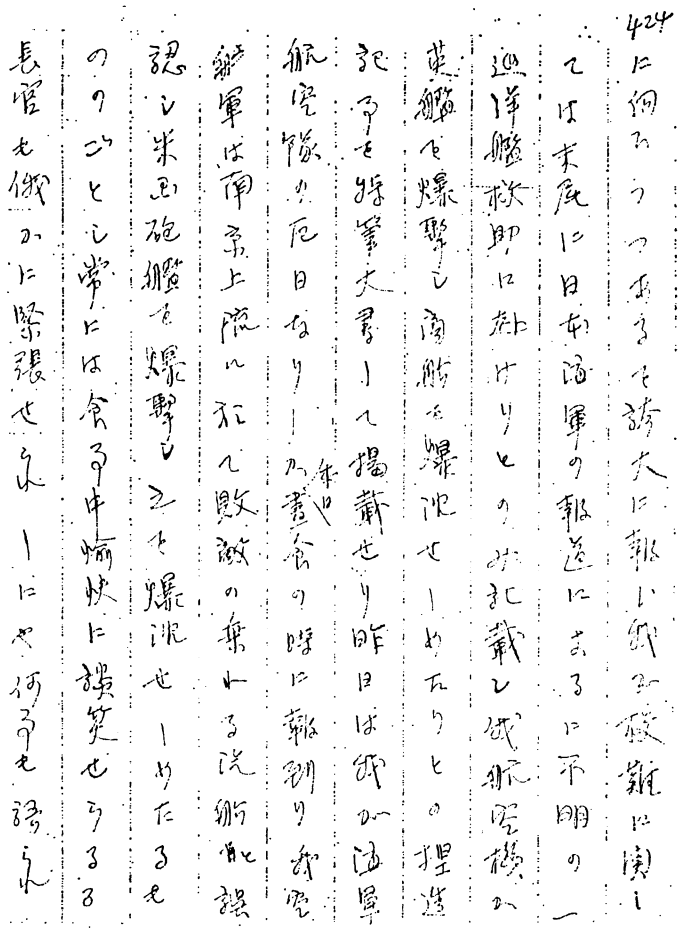
一昨日米国ダラーライン会社の汽船プレジデントフーバー号は濃霧の為め針路を失い火焼島に擱坐し危険に頻せしかば、我軍艦足柄及駆逐艦は直に現場に急航して救難したるに英字新聞は米国軍艦の急航と香港より救難船の現場に向いつつあるを誇大に報じ、我が救難に関しては末尾に、日本海軍の報道によるに、不明の一巡洋艦救助に赴けりとのみ記載し、我航空機が英艦を爆撃し商船を爆沈せしめたりとの捏造記事を特筆大書して掲載せり。昨日は我が海軍航空隊の厄日なりしが、本日昼食の時に報到り、我空軍は南京上流に於て敗敵の乗れる汽船と誤認し、米国砲艦を爆撃し之を爆沈せしめたるもののごとし。常には食事中愉快に談笑せらるる長官(長谷川清)も俄かに緊張せられしにや、何事も語られず、未だ嘗てなき沈鬱なる空気は将官室を埋めたり。長官の心中察するに余りあり。一昨日の朝礼の時なりき、頭脳明晰、注意周到なる長官は、南京上流外国軍艦の行動地域に於ける船舶の爆撃は不慮の禍を醸すの虞ありとて参謀長(杉山六蔵)に之を禁止せしむるよう命ぜられたるを聞きいたることなれば、此の事件の発生が、援蔣政策に汲々として我に不利なる機を待ちつつありし第三国に口実を与え、延いては作戦に影響することとなるを思うとき、只我災厄として悲むの他なし。午後五時参謀より一時間の後、飛行機を米艦の遭難現場に派遣するにつき、之に携行せしむる衛生材料を準備せられたしとのことなるを以て、余はこの際彼等を救護するは、人道上よりみるも当然にして且つ感情を緩和するにも効少しとせずと感じ、軍医官及看護科員を派遣することを申言するに、司令部に於て余の意見採用せられしかば、余は直に自動車を上海陸戦隊病舎に馳せて、島崎軍医長と協議し、少壮にして優秀なる軍医官たる樫村軍医中尉と、装創に堪能にして而も中学卒業の学歴を有し、英語を解する山下一等看護兵曹を選抜して派遣することとし、携行の衛生材料は、飛行機の搭載量にも制限あるを以て、余は四十瓩以内の重量と定め、繃帯百巻、装創ガーゼ二梱、ブランデー一本、マーキュロクローム一ポンド、過酸化水素一ポンド、アルコール三ポンド、カンフル二百アムプル、パントポン百アムプル、一粍注射器三具、止血鉗子五本、縫合糸若干、把針器一具、縫合針五本、鑷子三本、シムメルブッシュ氏煮沸消毒器一具等を包装せしむるに、四十分間にして包装を終り、其の重量三十二瓩に過ぎず、此処に於て何時にても救護員は出発し得ることとなれり。時に午後三時五十分なり。然るに第十一戦隊の艦船、南京近くにあるを以て先づ現場に急航し救助することとなりたれば、飛行機の出発は明朝午前八時に延期せられたり。

本日、南京に於ては尚お市街戦継続中なりしが、第一警戒部隊は夕刻、南京の江上港なる下関に達し、市内の敵を掃蕩して江岸に進出せる我陸軍との握手なり、南京は完全に我有に帰し、敵の首都陥落せり。

◇十二月十四日　快晴にして暖かなり

午前七時、米艦パナイ号乗組員救護の為め水上飛行艇にて樫村軍医中尉及山下一等看護兵曹は、南京の上流和県に向って出発す。

特別情報によれば、支那商船と誤認せられ我が爆撃を受けて沈没せるパナイに於ける人員の損害は、同艦長が脚部に負傷し、先任将



泰山日誌原文

校が軽傷を負い、水兵一名死亡したるのみにて、其他の乗員に異状なしと。之れ我国の為に賀すべきなり。而して米国新聞の論調は公平にして、南京攻略戦の行われつつある時に至るまで、危険区域に止り、米国軍艦をしてその保護を必要ならしめたる米国スタンダード石油会社の油槽船の行動を非難しつつありと。

然るに、上海に於ける英国系新聞は、我に対して、実に侮蔑的記事を掲げて我を脅威しつつあり。

ともあれ角もあれ、天は正義を照鑑し、敵の首都南京は、昨日を以て陥落し、虹口に於ける居留民は戸毎に国旗を掲げ、旗行列を行いて戦勝を祝す。

午後三時病院船朝日丸入港したれば、同船に赴き更に上海陸戦隊病舎に到る。

島崎軍医中佐より西部地方航空隊進駐個所の衛生状況視察を促す。よりて同官と自動車にて先づ中山路より豊田紡績の焼跡に、支那軍の狼藉極まる破壊を憤り、敗敵の退ける道を辿りて、モニュメント路の追撃戦の跡を走るに、道には支那軍の捨てたる防毒マスクの山積するあり、今尚お処々に支那兵の死体横わり、飢えたる犬の之を啄むあり。沿道の畑の中には、多数の敵死体の遺棄せられたるありて、新戦場の跡も歴然たり。

虹橋に近づけば、路傍の外国人住宅は、昔ながらの華麗を競うあり、英国人も之が破壊せられざりしは、皇軍の恩なりとて家族の復帰する迄之を提供せるを以て、我航空隊の兵員は之に分宿営するあり。虹橋飛行場に着けば、草叢となれる飛行場には、敵が地雷を埋没せることとて我工兵の之を発掘除去しつつあるあり。格納庫は我爆撃に大破し、中には爆破せられたる敵機の残骸あり。飛行場の外廓を廻るに、路傍に新しく木標を樹てて、大山大尉、斎藤兵曹戦死の地たるを示すあり。

陽は早や西山に没するを以て、車を急がせて帰艦す、夕食の席に着くに、折しも本日の南昌空襲の戦果を報じ来り、我航空隊は敵機三十五機を撃墜すとのことに、長官も満足せられ、嬉びの色溢れ、昨日に引きかへて司令部の空気は朗かとなれり。

午後八時副官に電話あり。長官に陣中慰問の為め態々来滬し、カセーホテルに投宿したる山下亀三郎氏急病に罹りたれど、租界内に邦人医師の居住者なきを以て、余の診察を求め来りたりとのことなり。余は長官よりの見舞としてカセーホテルに赴くに、ホテルの支那人ボーイ、余に愛嬌を湛えること甚しく、エレベーターの中にて南京陥落を大書せる英字新聞を示して笑顔を呈するなど我国民には思もよらぬことなり。

山下亀三郎氏は石橋造船中将及令息三郎氏其他の随員と共にあり。余は同県人なるを語るに嬉ばる。病は胃痙攣なりしかば、注射を施すに直に疼痛緩和して郷里のことなど語る。辞して暗夜の虹口に車を馳せ旗艦に帰る。時に午後九時なり。

◇十二月十五日　晴暖かなり

我航空隊は今日も蚌蜌に於て敵機二機を撃墜したり。午前中病院船朝日丸の行動に関し協議し、陸軍第二兵站病院に於ける戦傷兵後送の任に従事せしめらるることとなりたるを以て、高木朝日丸病院長を第一兵站病院たる伊佐部隊、及第二兵站病院たる鵜沢部隊に案内し、午後再び上陸して福民病院に到り頼宮博士以下、今事変に於て虹口の救護防疫に尽力せる邦人医師の功績証明書に添付すべき履歴

書等の調査を行う。

明後十七日、南京入城式行わるることとなり、余も亦幕僚として長官に扈従し之に参列することとなりたるが、飛行機の坐席に制限あることとて、艦隊の三長及参謀の一部は、明朝、水艇にて先発することとなり、之が準備を行う。

当地英国系新聞は、パナイ号事件に対して、レディバード号事件と等しく、我に対して不同情極まる記事を掲ぐ。

◇十二月十六日　晴暖かなり

午前六時起床、同七時半朝食を取り洗面器具其他の日用品を小型スーツケースに塡め、貸与品の防寒外套を纏い旅装整いたれば、岩本艦隊機関長、加藤艦隊主計長、日高参謀、上海特別陸戦隊副官等と共に午前八時十分、「出雲」の高速艇汐崎号に乗り出発し、黄浦口を下りて公大沖に向う。霧深くして時々航進を停止せざるべからず。為に三哩たらずの近距離なるにも拘わらず漸くにして午前九時三十分、公大沖碇泊中の駆逐艦「栗」に着き、之に移り、同艦の端艇にて付近に繋留中の水上飛行艇佐第三号に到り之に乗るや艇長斎藤少佐は自ら之を操縦す。午前九時五十分、機械は発動し、驚くべき速度を以て黄浦江の水面を滑走す。霧深かりしが、同十時五分離水し、余は此処に初めて空中の人となる。

羽化登仙の心地して実に愉快なり。蓋し乗物中之に勝るものなきを感ず。但惜むらくはエンジンの音喧然として、同乗者と談を交え難きを。

水艇は四百米の高度を保ち、時速百哩にて空路を揚子江の流に沿いて飛ぶに、見下せば江南の平野一眸の下にあり。井然たる田圃はよく耕されて、此処には戦禍の及べるを見ず。かしこ此処の部落には数戸の農家集りて、城廓に囲まれ、或は周囲に清流の溝渠を繞らすありて、支那農村の平和なる風景を展開して恰も一幅の絵巻物なり。田圃の畔には楊樹茂りて江水の濁流と相映ずるも趣あり。畑には麦の萠え出づるあり。

やがて江陰砲台あり。江陰県の鎮よりは炎々として燃ゆる煙の揚るあり。機上より見れば全景は一枚の紙上にあり。忽にして揚子江岸大都会の一なる鎮江台の上を飛ぶに、山上の巨砲は其儘我有に帰す。全市到る処より黒煙を発して今しも炎上中なり。

甘露寺、金山寺の塔も玩具の如くに見ゆ。機首は下に向うと見るや、浦口停車場の上を滑るが如く飛ぶ。走馬灯の如く眼前に過ぎ行くは停車場の建築にして、羅馬の古城跡の如く柱を留むるのみなるもの多し。鉄道線路が飴細工の如く曲れるも見ゆ。

やがて機は下関の江上中流を滑走して、砲艦安宅の付近にエンジンを停止す。迎に来れる端艇にて「安宅」に着く。時に午後零時半なり。

直に近藤第十一戦隊司令官に伺候し、我等一行は司令官室に於て休憩し、宿室は各々、戦隊幕僚の室を借りることとなる。

午後二時十分より、岩本艦隊機関長、加藤艦隊主計長と共に自動車にて、南京市内の事情に通ぜる運転手を付せられ、新戦場を見学す。

先づ、安宅の横付けせる下関の桟橋に出づるや、揚子江の汀には、敵の退却に際し捨てたる褐色にして打出の小槌の形を為せる手榴弾及鉄兜の無数に散乱せるあり。

下関碼頭より一直線なる広き舗装道路を走るに、路面には小銃の

弾丸散乱して、恰も真鍮の砂を敷きたるが如し。路傍の草原には、生々しき支那兵の死体の散在するあり。

やがて下関より南京に通ずる挹江門に到るや、高く聳ゆる石門のアーチ形なる通路は其の高さの約三分の一は土に埋れて、之を潜るには下関側より坂路を成すに至る。徐に進む自動車は、空気を充満せるゴム袋の上に乗れる如き緩かなる衝動を感ぜしめつつ軋るあり。之れ車が無数の敵屍体の埋れる上に乗れるなりと。さもあるべし、土の層の薄き所を進むに、忽ち土の中より肉片の泌み出づるあり。凄惨の状筆紙につくしがたし。

漸く門を潜り抜けて南京側に出づれば、敵の屍々累々たるが黒焦となり、鉄兜も銃剣も黒く燻りて、鉄条網に用いたりし針金と絡まり、門柱の焼け落ちたる木片と相重なり、堆く積める土嚢も黒く焼けて、その混乱と酸鼻の景は譬へん方なし。

門の右手なる小丘には、「中国与日本誓不両立」の文字を刻みありて、蔣介石の抗日宣伝の跡を示し、市内に近づくに従い、敵の遺棄せる藍色木綿桶襖の便衣は、恰も襤褸の如く道路を埋め、処々にカーキー軍服いかめしく革の脚絆を穿ち、手足の関節強直して仰臥せる敵将校の屍骸をも見るあり。

市内に入れば、鉄路院、交通院の嘗ては、日光陽明門を欺く華麗に近代支那建築の粋を誇りたる官衙は、或は黒焦となり、或は崩れて見る影もなく、道には人力車、自動車の黒く燻りたる残骸数知れず捨てられ、市内目抜の場所も防空壕を築く為めに路面を掘り返えし、昔栄華の面影見るべくもあらず。

今日の見学を之に止め、午後四時四十五分安宅に帰艦す。夜に入れば満月に近き冬の月は江上を照し、浦口及市内各所より起れる火災による紅蓮焔は天を焦すばかりにて、陰惨の気鬼哭愁々たり。時々静寂を破る機銃の音は、抗日の執念抜くべからざる幾千の敵兵が魂消えゆく音なり。凄絶愴絶の光景之れ新戦場の夜半なり。

巻ノ十

◇十二月十七日　快晴暖かなり

朝まだきに起きて、加藤主計大佐と共に下関の碼頭に立つに、やがて真紅の朝暾は静かに南京の東天に昇る。

加藤主計大佐に促され朝露置きたる新戦場を揚子江の汀に沿いて舗装道路を下るに、下関一帯二、三町の間には、折れ壊れたる小銃、機銃が枯木の枝の落ちたる如くに散り敷き、小銃弾、機銃弾、拳銃弾は砂利の如く路面を埋め、迫撃砲弾、手榴弾も数限りなく捨てられ、飯盒、水筒、胴籃、銃剣、鉄兜等の随身兵器も撒き散らされ、狼藉言わん方なく、剣帯、脚絆等の革具類、軍衣、毛布より棉襖の便衣までも塵芥の如くに堆く積まれ、其の間に、或は天を仰ぎ、或は地に臥して、魂消えし敵兵の累々たる屍が、四肢を空中に伸せる敵軍馬の屍骸と入り乱れ、犬の屍すら混りて、吹き来る風も腥く、塞息せんばかりなり。満目之れ死の静寂を呈し、鬼哭愁々、敗敵殲滅の凄惨なる光景を展開す。

揚子江の波打際に進めば、岸辺に築ける石垣の陰より、便衣を着けたる二人の敗残支那兵現われ、我等に向い手巾を振り何事をか合図するものの如し。少しく隔りし我陸軍兵士のカーキ色軍服の肩動くも見ゆ。余と加藤主計長は過ぎ行かんとするに、彼等の一人は、我等を追い来りて、地に伏してチナチナと叫びながら救を乞う如きも、既に頭部には傷を負い、流れし血潮は顔面に凝着して、褐色の漆を塗りたるが如し。我等は今尚お抗日思想抜くべからざる敵兵を処罰する場所えと急ぎつつあれば、彼に碼頭の方へ行き、関係官に救を乞うよう手真似にて示したるも、彼は尚お紙片を拾い来りて、木炭を以て何事か書き筆談せんとするものの如く、執拗に憐を乞う。折しも騎銃を肩にせる後備兵と見ゆる我陸軍の兵が帰り来れるを以て、彼の隊長に此の支那兵を引渡すべく告げて、余と加藤主計大佐は歩を進めながら後を顧るに、我兵は詮方なしとや思いけん、敵兵を後に向かしめたりと見るや、其場に銃口を支那兵の背部に当てて引金を引く。彼は悲しき一声を発して銃声と共に斃れたり。肩の辺より血潮は迸り、寒き朝風に吹かれ、湯気となりて立上るあり。余等は敵ながら憐愍の情に堪えざりしが、彼亦何れ来るべき運命に従いたるまでにて詮なかりき。此の光景を目撃せる我等は引返して彼の上に安らけく眠れと冥福を祈りて艦に帰る。

朝食の後、午前九時より岩本機関大佐、加藤主計大佐と共に自動車にて戦跡を見学す。挹江門に再び敵屍の山を越えて城内に入り、中山北路の沿道に人馬の屍々累々たると、黄包車、自動車の残骸雑然たるは、幾度見るだに敗戦の惨めさを示す。

敵八十師司令部、交通部、鉄路部の大厦高楼の焼け崩れたる墟址にありし日の美観を偲びつつ中華門を潜る。此の門は花崗岩を以て造りたる堅牢無比な城門なるに、忠勇無双の我陸軍は門に連って城廓をなせる石垣の一角が我砲弾により破壊するや肉弾を以て突撃し、之を足場として城塞によじ登り、之を乗り越え城門を開き、全軍潮の如く押し寄せ、敵をして防戦に暇あらしめず、戦史未曽有の敵殲滅戦に成功したるものなり。

やがて大校飛行場に着く。此処は我が海の荒鷲が幾度か死を決して爆撃を行いし処にして、幾多勇士の花と散りしを思えば感慨無量なり。草原なせる飛行場には、我が爆撃により噴火口の如き大孔を穿たれ、格納庫は天井を貫かれ、庫内には、ソ聯機、米国機等精鋭なる飛行機の残骸あり。基地部隊の兵営も多くは破壊せられたるが、我海軍航空隊は既に之を占拠し基地の設営を行いつつあり。

午前十一時帰艦す。直に昼食を取り、同十一時四十五分、「安宅」発の自動車にて本日の入城式に参列すべく、式場たる国民政府に至る。車を降りて歩を進むるに石造楼閣の正門には、国民政府と大書せる門標を掲ぐるあり。之を入りて更に支那式の二大楼門を潜りて、国民政府の庁舎たる会議室に達す。この殿堂は鉄筋混凝土五層楼にして、洋華折衷以て近代支那建築の粋を集め、宏荘華麗の無比を誇る。堂内第三階までは政府の事務室にして、第四階、五階は政府要人の室に充つ。中にも国民政府主席林森の室は、装飾典雅にして調度は善美を尽し、骨董品を陳列し、中古に於ける支那文明の盛を偲ばしむるあり。室の壁には孫文の遺筆たる「革命未成功同志仍須努力」の軸幅を懸く。

屋上の展望台に出づれば、南京市街を一眸の下に瞰下すべし。堂を一巡して外庭に出づ。折しも占部軍医中尉馳せ来りて、本日の記念に余の影像を撮り遺はさんとて、余を会議堂前なる磨出した花崗岩の広き石段中央に立たしめてカメラに納め呉れたり。

段を下りて第二門に出づるに、翼室には我が中島部隊の分捕りたる敵の高射機銃を陳列するあり。独乙製にして、使用法も独乙語にて記しあり。口径三、七糎を有する新鋭兵器なり。砲車に乗せられ迷彩を施したる砲身は高く空中に突出す。

入城式の時間が迫ったので、我等支那方面艦隊幕僚は多数の陸軍軍司令部幕僚と共に正門内の広場に設けられたる式壇の両側に整列して此の記念すべき式典の始まるを待つ。

午後一時五十分、長谷川司令長官は自動車にて正門前に来着せられしにより、徒歩にて門を入り壇に上らる。

午後二時松井軍団司令官は馬上の英姿颯爽として正門前に来られ、馬を下りて門に入らる。朝香宮派遣軍司令官、柳川第十軍司令官亦馬を正門前に乗り捨てられ門を入り式壇に上らる。続いて第三師団長、第九、第十三、第十六、第六、第十八、第百十四の各師団長は何れも馬を下りて式壇の両側所定の位置に着かる。

門前には、二、三日前迄砲煙弾雨を潜り屍山を越え血河を渡り、獅子奮尽の戦を続けたる幾万の皇師が列を正し遠く街路を埋むるあり。門に近く整列せる兵士は、何れも陣歿せる戦友英霊の箱を白布にて包みたるを、首より胸に吊して恭々しく捧げるありて、英霊亦式に列す。

午後二時三十分、忽ち皖々たる君ケ代の喇叭は響き渡り、一同は正門に向い挙手注目の礼を行えば、丈幅の旭日大国旗は正門楼上の旗桿を徐に登り行く。その壮厳云わん方なく、旗の登るに従ひ眼に映じ来る日の丸の赤き色こそ、我が幾多将士の血潮を以て染め出されたるを感ぜしむ。門前なる兵士の捧ぐる英霊と照し、此の歓嬉の中にも思わず熱涙は流れ感慨無量なり。

国旗が高く城門に翻えるや、一同は東の方式壇の中央に向って列を正し、脱帽最敬礼を行いたる後、松井軍団司令官の音頭にて、大元帥陛下万歳を三唱す。此の声こそ故国にも響けよかし。

此の式場の有様を更に記せば、正門内の広場なる地面は磚にて敷き詰めありて、第一楼門、その門には両側に瓦葺なる長き廻廊の連るあり。此の廻廊の中央に潜り門ありて各殿堂に通ず。尚お左右両側共に、廻廊の前に、枝垂梅と橘を交えたる並木の植込あり。中央の楼門に向って右側は東の方角に当るを以て、此処に式壇を設け、壇の中央には大なる国旗を壁に展張せるの外、何物をも飾らず、簡素にして而も壮厳なり。

かくて西側潜門の中なる大殿堂内に設けられたる祝宴場に入るや急設せられたる食卓には、白布の覆を敷き、恩賜の御酒、勝栗、鯣、昆布を配列す。一同席に着くや、長谷川司令長官の音頭にて大元帥陛下の万歳を三唱して乾盃を挙ぐ。それより各自恩賜の酒肴を頂く。余の近くなる主卓に列せらるる指揮官連の顔も朗かなり。此処に式は全く終りて、下関碼頭の「安宅」に帰る。時に午後三時半なり。

少憩の後、大川内上海特別陸戦隊司令官と共に、余が今朝中途より引返したる下関下流の江汀を視察するに、波打際には、無数の敵屍が黒焦となり、或は水に浮び、或は石垣に倚りて相重れるもあり、修羅の巷の惨状名状すべからず。道を返して上流なる堤防の内側を窺うに、我が日本刀の切味を喫したる敵の死体六、七十あり。南京市街戦は如何に激しかりしかを思わしむ。

夕食の後、加藤主計大佐と共に、支那税関たりし臨時港務部の応接室に宿泊することとなる。寝台はなけれど、安楽椅子に毛布を敷きて、今夜は昔思出のランプの灯にて語る。

窓の外には月の光青し。時々静寂を破りて機銃の音聞ゆ。

◇十二月十八日

朝の程微雨蕭々として至り寒さも加わりたり。暫くして雨は霽れたれども、寒風吹き荒び、南京攻略の陣歿英霊を祀るに相応わしき日和となる。

今朝、下関に来る筈なりし上海よりの、第三艦隊司令部職員迎ひの水上飛行艇も天候に阻まれ来らざりき。

朝食の後、大川内上海陸戦隊司令官、岩本艦隊機関長、加藤艦隊主計長と共に自動車にて南京付近新戦場の見学に赴く。

先づ獅子林の麓に車を下りて、砲台に差しかかるに、此処彼処に敵の遺棄屍体あり。冬枯の枝を交うる老樹の茂る山道を縫いて丘の頂に達せば、遠くは南京市街、近くは下関の揚子江を瞰下し、何れの方より攻め寄する敵に対しても射撃し得る絶好の防禦地点たり。丘の上なる砲台には、或は隠見式なる巨砲を据ゑ、或は新鋭なる高射砲の空を高く指すあり。各砲何れも破壊せらるることなく我軍の手に帰し、掩蔽壕の中には無数の弾丸排列せられたる儘にて我に鹵獲せられたるあり。砲台の防備堅固にして、巧なる迷彩を施し、築城の妙驚歎に値するものあり。

山を下り麓なる兵営を巡るに、屋外には敵の遺棄死体散在す。室内には、支那兵の兵舎としては珍らしくも清潔に片付けあるを見る。

それより市街区域に入れば、中山北路の廃墟となれるに反し、右手なる住宅街は破壊を免れ、⊕の印を有する旗を掲ぐるあり、之れ避難民区域にして、我軍が特に之を設置し、無辜の民をして安住せしめ以て皇軍の仁慈に浴せしむる所たり。されど尚お帰り来れる人民は少く、外国人及之れが使用人たる支那人が住むのみにして寂莫たり。

中山門より城外に出で、坦々たる舗装、美しき陵墓道路を走りて中山公園に到る。林の中なる四通八達の自動車道路には、綿服を纏い胴籃を着けたる敵の遺棄死体散在し、此辺に於ても追撃戦の行われたるを思わしむ。

やがて中山陵に着き、車を降りて雲表に聳ゆる石門を入り更に宏壮なる楼門を入るに、両側の翼室には敵兵が最後迄籠城したるものの如く、竹籃に盛れる乾飯、輪切大根の蒸干等の貯蔵食糧より、飲料水用の水桶、褥とせし藁束等散乱して狼藉例へん方なし。此の門を潜りて、鏡の如く磨ぎ出せる幅広き花崗岩の百有余を数うる石段を登るに、砲弾の為に破壊せられたる処もあり。段を登り極むれば、天空を摩する中山陵の大殿堂が、昔ながらに巍然として聳ゆ。

此の殿堂は青き甍の屋根より側壁に到るまで竹矢来をしつらひ、藁縄を経緯とせる縞目に薜苔を織り込みたる毛氈にて被覆し、周囲の山腹も巧なる迷彩遮蔽物にて包みありて、中国人が此の陵を兵燹より守らんとせる心尽しの窺ふべきあり。さもあらばあれ、敵の文化を尊重せらるる松井軍団総司令官が、南京突入に際し全軍に布告を発し、中山陵及明孝陵を凌辱すべからずと之を保護せられたることや、此処に於て我兵は之に近づかざりしならんも、敵は此処に拠りて我に抵抗したれば、砲弾を見舞うも止むを得ざりしならんか。

殿堂の前なる大理石の大香炉は砲弾に砕かれて原形を止めず。室内に入るに、大広間には敵の要人が家族と共に我空爆の難を避けたるものの如く、一面に絨緞を敷き、火鉢、スーツケース、婦人の化粧函等の手廻品さえ散乱す。

孫文の眠れる遺骸安置の室は我軍の手により保護せられ、堅く鍵

を鎖し入るべからず。
広間の両側なる経蔵には一切の蔵経を蔵せるが、今しも火を発したることとて、陸軍の将校来り、扉を開きて消火を命じつつあり。
鶏鳴寺の前を経て、明孝陵の門前を過ぐるに、かの石人、石獣は破壊せられず残れり。
午後慰霊祭に参列することとて、車をいそがせて安宅にかえる。
午後一時十五分「安宅」発の自動車にて南京攻略戦の戦死者慰霊祭式場たる明故宮飛行場に到る。式場の広茫たる、草原の上には、今しも皚々たる白雪に包まるる。紫金山より吹き下す寒風荒びて耳を切るが如し。暗雲低迷、荒寥たる冬枯の原野も、魂祭る悲しき光景を呈す。
飛行場の中央に白木の大霊標を樹て、黄、青、紅、黒、白の旗旒を風に靡かせ、簡素なる祭壇を設け、各指揮官は祭壇に近く着席せられ、参列する数千の各軍代表部隊は粛然として堵列し、陸海軍総指揮官が祭主となり、厳かなる慰霊祭は営まれ、午後二時四十五分式は終る。
上海より来る予定なりし水上飛行艇は天候に阻まれて、中攻一機のみ来れるを以て、長官及参謀長は之に乗り帰らるることとなりたるも、余等は坐席なき為め、明日三号掃海艇便にて揚子江を下江することとなり、式場より再び安宅に帰る。時に午後三時十五分なり。
安宅は長官以下の帰られしこととて、寝室に余裕を生じたれば、今夜は艦内に宿泊することとなる。
折しも艦には、残敵尚お潜む危険なる江南戦跡を巡錫し、英霊追悼の行脚に来られたる西本願寺法主大谷光暢伯が、後藤随行長を従えて宿泊せらるるあり。明日は掃海艇に便乗せらるるを以て、上海迄同乗の光栄に浴することとなる。

◇十二月十九日　快晴寒さ烈し
午前八時四十五分「安宅」発の汽艇にて第三号掃海艇に乗り移る。
大谷法主一行、並に従軍新聞記者十数名、之に入城式に参列せる海軍軍楽隊を加え、数十名の便乗者が此の掃海艇にて江を下ることとなる。
甲板上に出づれば江上を吹く寒風肌を劈くあるを以て、新聞記者団一行は、土に泥れたる従軍服のまま士官室の小さきストーブを囲みて折り重り、或は眠り、或は戦況を語るあり。
大谷伯は艇長室の長椅子に倚られ、加藤主計と余とを相手に、江南の戦跡巡礼を述べらる。
午前九時抜錨、江を下る。南京は江上より眺むるも今は全く死の都と化す。聞くならく、最後迄南京を守りし支那兵は、その数約十万にして、その中約八万人は勦滅せられ、江を渡り浦口より逃げ延びたる者約二万人あり。下関に追い詰められ、武器を捨てて身一つとなり、筏に乗りて逃げんとする敵を、第十一戦隊の砲艦により撃滅したるものも約一万人に達せりと云ふ。
之より敵殲滅の激戦行われし江南戦場に沿うて流るる洋々たる揚子江を下るに、鴨の群は水上に浮び、行き交う風帆は日章旗を掲ぐ。岸辺の方、葭の茂みの中には、黄ばみたる楊柳の森に囲まれたる茅屋の農家が三三五五隠見するありて、平和境の絵巻物を展開す。流石に支那は大陸なりと感歎せざるを得ず。
午後零時半、鎮江に仮泊す。

作戦命令の部

第一、中央（参謀本部・大本営等）

○臨参命第七十三号

命　令

一、上海派遣軍（編組別紙ノ如シ）ヲ上海ニ派遣ス
二、上海派遣軍司令官ハ海軍ト協力シテ上海附近ノ敵ヲ掃滅シ上海並其北方地区ノ要線ヲ占領シ帝国臣民ヲ保護スヘシ
三、動員管理官ハ夫々其動員部隊ヲ内地乗船港ニ到ラシムヘシ
〔以下略〕
昭和十二年八月十五日
別紙
上海派遣軍ノ組織
上海派遣軍司令部
第三師団
第十一師団（天谷支隊欠）
独立機関銃第七大隊
戦車第五大隊
〔以下略〕

○臨参命第百十九号

命　令

一、上海方面ニ第十軍並所要ノ兵力ヲ増派ス
二、第十軍司令官ハ海軍ト協力シテ杭州湾北岸ニ上陸シ上海派遣軍司令官ノ任務達成ヲ容易ナラシムヘシ
三、上海派遣軍司令官ハ現任務ヲ続行スルト共ニ第十軍ノ上陸ヲ援助スヘシ
四、細項ニ関シテハ参謀総長ヲシテ指示セシム
昭和十二年十月二十日

○臨参命第百三十八号

命　令

一、左ノ部隊ヲ中支那方面軍ニ編合シ中支那方面軍司令官松井大将ヲシテ指揮セシム
中支那方面軍司令部
上海派遣軍
第十軍
二、中支那方面軍司令官ノ任務ハ海軍ト協力シテ敵ノ戦争意志ヲ挫折セシメ戦局終結ノ動機ヲ獲得スル目的ヲ以テ上海附近ノ敵ヲ掃滅スルニ在リ
三、細項ニ関シテハ参謀総長ヲシテ指示セシム
昭和十二年十一月七日

（以上『臨参命綴』）

○臨命第五百九十五号

指　示

臨参命第百三十八号ニ基キ左ノ如ク指示ス

一、中支那方面軍ハ支那方面艦隊（第三、第四艦隊ヨリ成ル）ト協同作戦スルモノトス

二、作戦上海軍トノ関係ハ別冊「中支方面作戦ニ関スル陸海軍協定ノ抜粋」ニ準拠スヘシ

又其航空ニ関シテハ上記ノ外別冊「陸海軍航空協定中中支那方面作戦ニ関スル事項（改定）」ニ準拠スヘシ

三、方面軍司令官ノ指揮ノ範囲並管掌スヘキ業務左ノ如シ

イ、全般的作戦指導

ロ、兵站業務ノ統制

ハ、宣伝謀略並一般諜報

四、宣伝謀略及一般諜報ハ方面軍司令部附少将ヲシテ実施セシムヘシ

但報道ハ「報道部発表」ノ形式ニ依ル

謀略ニ関シテハ別ニ指示スル所ニ拠ル

五、瓦斯並催涙筒ノ使用ニ関シテハ追テ示ス

昭和十二年十一月七日

○臨命第六百号

指　示

臨参命第百三十八号ニ基キ左ノ如ク指示ス

中支那方面軍ノ作戦地域ハ概ネ蘇州嘉興ヲ連ヌル線以東トス

昭和十二年十一月七日

（以上『臨命綴』）

○大陸命第七号

命　令

別紙ノ如ク中支那方面軍戦闘序列ヲ令ス

昭和十二年十二月一日

別紙

中支那方面軍戦闘序列

中支那方面軍司令官　陸軍大将　松井石根

中支那方面軍司令部

上海派遣軍

第十軍

○大陸命第八号

命　令

一、中支那方面軍司令官ハ海軍ト協同シテ敵国首都南京ヲ攻略スヘシ

二、細項ニ関シテハ参謀総長ヲシテ指示セシム

昭和十二年十二月一日

（『大陸命綴』）

○大陸電第十八号　十一月二十四日十三時五十六分

大陸指第五号

指　示

臨参命第百三十八号ニ基キ左ノ如ク指示ス

臨命第六百号ヲ以テ指示セル中支那方面軍作戦地域ハ之ヲ廃ス

（『第十軍作戦指導ニ関スル参考資料』其二）

○電　報　十一月二十日　午後六時四十五分発　同十一時十五分着

参謀次長発

松井集団参謀長宛

丁集団ヨリ湖州ヲ経テ南京ニ向ヒ全力ヲ以テスル追撃ヲ部署セル旨報告シ来レル処右ハ臨命第六〇〇号（作戦地区ノ件）指示ノ範囲ヲ脱逸スルモノト認メラルルニ付為念

（『第十軍作戦指導ニ関スル参考資料』其二）

第二、中支那方面軍

○中方作命第一号

中支那方面軍命令　十一月七日午前十時二十分　於　上海方面軍司令部

一、中支那方面軍ハ支那方面軍艦隊ト協同シ上海西北方ノ敵主力ヲ崑山附近ノ地区ニ於テ捕捉殲滅セントス

二、上海派遣軍ハ依然蘇州河南方地区ノ攻撃ヲ続行シテ上海市ヲ封鎖スルト共ニ重点ヲ京滬鉄道北側地区ニ保持スル如ク崑山方向ニ対スル攻撃ヲ準備スヘシ

十一月中旬有力ナル兵団ヲ白茆河口附近ニ上陸セシメ神速ナル行動ヲ以テ敵ノ退路ヲ遮断セシムヘシ

三、第十軍ハ主力ヲ以テ松江附近ニ進出シテ上海派遣軍ノ蘇州河南方地区ニ於ケル作戦ニ協力スルト共ニ崑山方面ニ対スル爾後ノ攻撃ヲ準備スヘシ

四、予ハ上海方面軍司令部ニ在リ

中支那方面軍司令官　松井石根

（『第十軍作戦指導ニ関スル参考資料』其二）

○中方参電第一六七号　十一月二十二日

中支那方面今後ノ作戦ニ関スル意見具申

判決

中支那方面軍ハ事変解決ヲ速カナラシムル為現在ノ敵ノ頽勢ニ乗シ南京ヲ攻略スルヲ要ス

理由

一、南京政府ハ湖東会戦ノ大敗ニヨリ既ニ遷都ノ挙ニ出テ僅ニ統帥機関ノミ残置シアル状況ニシテ其ノ第一線部隊ノ戦力ハ著シク喪失シ今ヤ敵ノ抵抗ハ各陣地共極メテ微弱ニシテ飽迄南京ヲ確保セントスル意図ヲ認メ難シ

此ノ際蘇州、嘉興ノ線ニ軍ヲ留ムル時ハ戦機ヲ逸スルノミナラス敵ヲシテ其ノ志気ヲ回復セシメ戦力ノ再整備ヲ促ス結果トナリ戦争意志ヲ徹底的ニ挫折セシムルコト困難トナル懼アリ

従ツテ事変解決ハ益々延引スルニ至ルヘク為ニ内地ニ於テ国民モ亦軍ノ作戦意図ヲ諒得セス国論統一ヲ害スル惧アリ、之カ為ニハ現下ノ情勢ヲ利用シテ南京ヲ攻略シ中支方面ニ明瞭ナル作戦ノ終末ヲ結ブヲ可トス

二、事変ヲ速カニ解決スル為ニハ西南方面若クハ山東方面ノ新作戦固ヨリ考案セラルヽ所ニシテ之等作戦ノ支那政府ニ与フル影響ハ何レモ相当価値アルモ首都南京ヲ攻略シ其ノ心臓ニ迫ルモノニ比スレバ遥カニ第二義的ナリ

我カ軍ハ此際中支那方面ニ於ケル現在ノ戦況進展ニ乗シ一意湖南作戦ヲ継続シ速カニ南京ヲ攻略スルト共ニ一部ヲ以テ揚子江左岸ニ於テ津浦鉄道ヲ遮断スルヲ得ハ山東、湖北地方ハ自然的解決ヲ望ミ得ヘシ

三、南京攻略ノ為ニハ現ニ方面軍ノ有スル兵力（若干部隊ヲ抽出セラルヽモ可ナリ）ヲ以テ十分ニシテ且鉄道、水路ヲ利用セハ後方ノ状態モ何等懸念スル所ナシ　又敵ノ抵抗ハ無錫及湖州ヲ失

ヒタル後ニ於テハ地形ノ関係ト平時施設ノ状態ヨリ観察シ大ナル犠牲ヲ払フコトナク遅クモ二ケ月以内ニ目的ヲ達成シ得ル見込ナリ

第十軍ハ新鋭ノ気溢レアルヲ以テ後方成立次第ニ躍進ヲ続ケ得ヘク　又上海派遣軍ハ連戦ノ疲労稍大ナルモノアリト雖モ旬日ノ休養ヲ与フルコトニヨリ戦力ヲ回復シ軍隊ノ整頓ヲ完了シ得ヘク南京ニ向フ追撃ハ可能ナリト判断シアリ但此際専任ノ派遣軍司令官ヲ任命セラルヽコト必至ナリト思惟ス

（『下村定中将回想録』）

○中支那方面軍第二期作戦計画ノ大綱

（十一月二十四日）

第一　作戦方針

中支那方面軍ハ支那方面艦隊ト協同シ速ニ南京ヲ攻略ス

第二　指導要領

一、方面軍ハ概ネ無錫湖州ノ線以東ノ地区ニ於テ十二月上旬迄ニ一挙南京ニ向ヒ躍進スルノ準備ヲナス機ヲ見テ一部ヲ以テ江陰要塞ヲ攻略シ又杭州ヲ占領スルコトアリ

二、方面軍ハ一部ヲ以テ揚子江左岸並蕪湖方面ヨリ南京ノ背後ニ進出セシメ主力ハ丹陽以東京滬鉄道—丹陽—句容道方面及湖州—宜興—溧陽—溧水道方面ヨリ相呼応シテ敵野戦軍ヲ南京要塞外ニ於テ撃滅シ南京ヲ攻略ス

三、本作戦ノ終期ヲ十三年一月中旬ト予定ス

第三　作戦準備

一、方面軍ノ編組ヲ次期会戦ニ応スル如ク改編ス（別紙参照）

二、各兵団ハ兵力ノ整頓ヲ行ヒ戦力ヲ充実ス

第四　兵団部署

一、上海派遣軍

1、無錫占領後一部ヲ以テ江陰要塞ヲ封鎖シ為シ得レハ攻略ス

2、概ネ一師団ノ兵力ヲ以テ揚子江左岸地区ヲ作戦セシメ南京北方地区ニ於テ津浦鉄道ヲ遮断ス

3、主力ハ重点ヲ丹陽—句容道方面ニ保持シ當面ノ敵ヲ撃破シ磨盤山山系西側地区ニ進出ス

二、第十軍

1、概ネ一師団ヲ以テ広徳—甯国—蕪湖道方面ヨリ南京ノ背後ニ進出ス

2、主力ハ重点ヲ宜興—溧陽道方面ニ保持シ当面ノ敵ヲ撃破シ溧水附近ニ進出ス

3、情況ニ依リ一部ヲ以テ杭州ヲ占領ス

三、両軍ノ作戦地境ヲ黄浦江—北新涇下流ノ蘇州河—北新涇—青浦—呉江—邑亭橋鎮（宜興北方約十粁）—黄金山鎮（溧陽西北方約二十五粁）ヲ連ヌル線トス

線上（黄浦江ヲ除ク）ハ派遣軍ニ属ス

四、南京周辺ノ会戦ニ於テハ重点ヲ南方ニ移ス如ク部署ノ変更ヲ行ヒ南京ヲ攻略ス

五、約一師団ヲ方面軍直轄第二線兵団トナシ宜興附近ニ位置セシメ南京周辺ノ会戦ニ際シ要スレハ第一線ニ増加ス

六、上海周辺地区ヲ方面軍直轄警備地区トス

第五　陸海軍ノ協同

一、水路作戦爆撃捜索等ニ遺憾ナキ如ク別ニ海軍ト協定ス

第六　兵站交通通信

一、一挙南京ニ躍進シ得ル如ク両軍特ニ第十軍ノ後方ノ整備ヲ促進ス

二、速ニ鉄道ヲ利用スルコトニ努メ且水路ヲ最大限ニ利用ス

三、補給ハ特ニ弾薬ニ重点ヲ置ク

（『第十軍作戦指導ニ関スル参考資料』其二）

○中方作命第二十五号

中支那方面軍命令

十二月一日午後七時

一、中支方面軍ハ支那方面艦隊ト協力シ南京ヲ攻略セントス

二、上海派遣軍ハ十二月五日頃主力ノ行動ヲ開始シテ重点ヲ丹陽、句容道方面ニ保持シ当面ノ敵ヲ撃破シテ磨盤山山系西方地区ニ進出スヘシ

一部ハ揚子江左岸地区ヨリ敵ノ背後ヲ攻撃スルト共ニ津浦鉄道及江北大運河ヲ遮断セシムヘシ

三、第十軍ハ十二月三日頃主力ノ行動ヲ起シ一部ヲ以テ蕪湖方面ヨリ南京ノ背後ニ進出セシメ主力ヲ以テ当面ノ敵ヲ撃破シ溧水附近ニ進出スヘシ

特ニ杭州方面ニ対シ警戒スヘシ

四、両軍ノ作戦地境ヲ左ノ如ク延進ス

黄金山鎮—天王寺十字路—赤山

五、予ハ上海ニ在リ

方面軍司令部ハ十二月七日蘇州ニ移ル予定ナリ

方面軍司令官

（『第十軍作戦指導ニ関スル参考資料』其三）

○南京攻略作戦ニ関スル陸海軍協定

一、南京攻略作戦ノ為中支那方面軍及支那方面艦隊ハ左ノ如ク協定ス

(1)中支那方面軍ハ上海派遣軍ノ一部ヲ以テ成ルヘク南京ニ近キ地点ニ於テ揚子江左岸地区ニ上陸シ南京ノ背後ヨリ攻撃スルト共ニ浦口鎮及楊州附近ニ於テ津浦鉄道及江北大運河ヲ遮断ス

(2)支那方面艦隊ハ第三艦隊ノ一部ヲ以テ揚子江ノ水路啓開ヲ促進シ且前項ノ上陸作戦ニ協力ス

(3)以上ノ作戦ノ細部ニ関シテハ上海派遣軍ト第三艦隊ト直接協定ス

二、航空作戦

(1)支那方面艦隊ハ陸戦協力ノ外航空兵力ノ大部ヲ以テ常州、蕪湖方面ニ進出セシメ中支方面ノ制空権ヲ獲得ス

(2)中支那方面軍ハ飛行場ノ整備警戒補給ニ関シ協力ス

(3)陸戦協力ノ細目ニ関シテハ中支那方面軍ト支那方面艦隊トノ間ニ別ニ協定ス

右協定ス

昭和十二年十二月二日

中支那方面軍司令官　松井石根

支那方面艦隊司令長官　長谷川清

（『第十軍作戦指導ニ関スル参考資料』其三）

○中方作命第二十七号

中支那方面軍命令

十二月四日午後九時
於上海方面軍司令部

一、中支那方面軍ハ南京郊外既設陣地ヲ奪取シ南京城ノ攻略ヲ準備セントス

二、上海派遣軍及第十軍ハ南京郊外既設陣地ヲ奪取シタル後概ネ上元門（下関東北方約四粁）—小衛（南京・句容道上）—高橋門—雨花台—碪花地ノ線ニ進出シ南京城ノ攻略ヲ準備スヘシ

三、両軍ノ作戦地境ヲ左ノ如ク改ム（十万分ノ一地誌図ニ依ル）

天王寺十字路—蒲塘（秣陵関東方約四粁）—蒲塘ヨリ南京東南端ニ至ル水流ノ線

四、予ハ上海方面軍司令部ニ在リ

中支方面軍司令官　松井石根

（『第十軍作戦指導ニ関スル参考資料』其三）

○南京城攻略要領

十二月七日

一、両軍ハ中方作命第二十七号ニ示ス線ニ進出シテ爾後ノ攻略ヲ準備ス

二、南京守城司令官若クハ市政府当局尚残留シアル場合ニハ開城ヲ勧告シテ平和裡ニ入城スルコトヲ図ル

此際各師団ハ各々選抜セル歩兵一大隊ヲ基幹トスル部隊ヲ先ツ入城セシメ城内ヲ地域ヲ分チテ掃蕩ス

三、敵ノ残兵尚城壁ニ拠リ抵抗ヲ行フ場合ニハ戦場ニ到着シアル全砲兵ヲ展開シテ砲撃シテ城壁ヲ奪取シ各師団ハ歩兵一聯隊ヲ基幹トスル部隊ヲ以テ城内ヲ掃蕩ス

右以外ノ主力ハ城外適宜ノ地点ニ集結ス

四、城内掃蕩戦ニ於テハ作戦地域ヲ指定シ之ヲ厳ニ確守セシメ以テ友軍相撃ヲ防キ且不法行為ニ対スル責任ヲ明カナラシム

五、城内ニ於ケル両軍ノ作戦地境左ノ如シ

（二万五千分の一南京市街近傍図ニ依ル）

共和門—公園路—中正街—中正路—漢中路

六、各軍ニ対スル配当城門

派遣軍　中山門　太平門　和平門

第十軍　共和門　中華門　水西門

○南京入城後ニ於ケル処置

一、各兵団ニ地域ヲ指定シテ警備ニ任セシメ主力ハ城外適宜ノ地点ニ集結ス

二、城内ノ掃蕩完成セハ吉日ヲトシ入城式ヲ挙行ス　其要領ハ別ニ示ス

三、入城式後更ニ日ヲ定メテ適当ノ地点ニ於テ戦死者ノ合同大慰霊祭ヲ行フ
四、速ニ所要ノ防空部隊ヲ推進シテ防空ヲ完備セシム
第二防空司令部ヲシテ統一指揮セシム
五、爾後軍ニ下サルヘキ次ノ任務ニ従ヒ南京警備部隊ヲ指定シ其他ハ新任務ニ応スル如ク移動セシム

○南京城ノ攻略及入城ニ関スル注意事項

一、皇軍カ外国ノ首都ニ入城スルハ有史以来ノ盛事ニシテ永ク竹帛ニ垂ルヘキ事績タリト世界ノ斉シク注目シアル大事件ナルニ鑑ミ正々堂々将来ノ模範タルヘキ心組ヲ以テ各部隊ノ乱入友軍ノ相撃不法行為等絶対ニ無カラシムルヲ要ス
二、部隊ノ軍紀風紀ヲ特ニ厳粛ニシ支那軍民ヲシテ皇軍ノ威風ニ敬仰帰服セシメ苟モ名誉ヲ毀損スルカ如キ行為ノ絶無ヲ期スルヲ要ス
三、別ニ示ス要図ニ基キ外国権益特ニ外交機関ニハ絶対ニ接近セサルハ固ヨリ特ニ外交団カ設定ヲ提議シ我軍ニ拒否セラレタル中立地帯ニハ必要ノ外立入ヲ禁シ所要ノ地点ニ歩哨ヲ配置ス
又城外ニ於ケル中山陵其他革命志士ノ墓及明孝陵ニハ立入ルコトヲ禁ス
四、入城部隊ハ師団長カ特ニ選抜セルモノニシテ予メ注意事項特ニ城内外国権益ノ位置等ヲ徹底セシメ絶対ニ過誤ナキヲ期シ要スレハ歩哨ヲ配置ス
五、掠奪行為ヲナシ又不注意ト雖火ヲ失スルモノハ厳罰ニ処ス
軍隊ト同時ニ多数ノ憲兵補助憲兵ヲ入城セシメ不法行為ヲ摘発セシム

（『第十軍作戦指導ニ関スル参考資料』其三）

○中方作命第三十一号

中支那方面軍命令

十二月九日午前零時三十分発
同　午前四時五十分着

一、中支那方面軍ハ中華民国首都南京城ヲ攻略セントス
二、上海派遣軍及第十軍ハ南京城攻略要領ニ準拠シ南京城ヲ攻略セシムル予定
但シ攻略実施ノ時機ハ別命ス

（『第十軍作戦指導ニ関スル参考資料』其三）

○方面軍参謀長電報

電　報

十二月九日午前二時〇分発
同　午前五時四十八分着
方面軍参謀長発
軍参謀長宛

中方作命第三十一号ニ関シ左ノ件承知相成度
一、方面軍ニ於テ十日正午迄ニ中山門—句容道上ノ敵軍歩哨線ニ軍使ヲ派遣シ和平開城ノ勧告文ヲ散布ス
二、派遣軍ニ於テハ右ノ件ヲ第一線歩哨ニ徹底セシメ置カレ度

三、南京城攻略要領第二項ノ〇〇ニ入城スル場合ニ〇ヨリ出ス掃蕩隊ノ兵力歩兵一大隊トアリシヲ各城門ニ対シ歩兵三大隊ニ改ム
四、〔略〕
五、両軍ハ十日正午敵軍使来ラサル場合ニハ直チニ攻撃開始シ得ル如ク準備ヲ完了サレ度
六、攻撃ヲ開始スルヤ和平入城スルヤハ別命セラレ凡有方法ヲ以テ伝達ヲ図ル

（『第十軍作戦指導ニ関スル参考資料』其三）

○中方作命第三十四号

中支那方面軍命令

十二月十日午後一時
於　蘇州方面軍司令部

一、支那軍ハ我勧告ヲ容レスシテ依然抵抗ヲ続ケツツアリ
二、上海派遣軍並ニ第十軍ハ南京城ノ攻略ヲ続行シ城内ヲ掃蕩スヘシ
三、予ハ蘇州方面軍司令部ニ在リ
中支方面軍司令官　松井石根

（『第十軍作戦指導ニ関スル参考資料』其三）

○南京入城式実施要領

一、十二月十五日方面軍司令官ノ南京入城式ヲ挙行ス
二、軍隊ハ左ノ如ク中山門ヨリ国民政府ニ至ル中山東路及道路両側空地ニ堵列ス
北側　派遣軍
南側　第十軍
之カ為両軍ハ各々代表部隊ヲ出ス
第三飛行団ハ空中分列ス
三、方面軍司令官ハ乗馬ニテ軍隊ヲ閲兵シツヽ中山門ヨリ国民政府ニ至ル
派遣軍司令官及第十軍司令官ハ中山門ニ於テ方面軍司令官ヲ迎ヘ方面軍司令官ノ直後ニ続行ス方面軍及両軍所要幕僚ハ方面軍、上海派遣軍、第十軍ノ順序ニ随行ス
四、右師団長及独立旅団長ハ閲兵ヲ受ケタル後其幕僚ト共ニ国民政府ニ至ル
五、方面軍司令官国民政府到着後左記諸式ヲ行フ
1　国旗掲揚
2　遥拝並万歳ノ三唱
3　乾杯
六、万歳ノ三唱ノ場合ニハ城内堵列軍隊一斉ニ唱和ス之カ為合図トシテ花火ヲ揚ク
七、同時刻頃海軍機ハ成ルヘク多数南京上空ヲ飛行スルコトヲ希望ス

附　記

一、南京飛行場ニ輸送機一台ヲ準備シ映画ヲ直ニ直路東京ニ輸送シ天覧ニ供ス
二、式後方面軍司令官ヨリ参加将兵一同ヲ代表シ天機奉伺ノ電報ヲ侍従武官長宛発ス

三、国民政府ノ破壊甚シキ場合ニハ他ニ適当ナル場所ヲ選定ス
四、入城式実施ノタメ左ノ如ク委員ヲ説ク
委員長　方面軍参謀長
委員　方面軍参謀一、副官一
派遣軍参謀一、副官一
第十軍参謀一、副官一
右委員ハ南京攻略後ナルヘク速ニ会同シテ所要ノ協定ヲ遂クルモノトス
両軍ハ速ニ委員ノ人名ヲ報告スルモノトス
五、方面軍司令官及同幕僚ノ乗馬トシテ派遣軍司令部ヨリ二十五頭ヲ差出スモノトス

（『第十軍作戦指導ニ関スル参考資料』其三）

第三、上海派遣軍

その一　第十六師団

○佐々木支隊命令

右側支隊命令

十二月十二日午後〇時五十分
於　堯化門北方高地

一、微弱ナル敵ハ尚北方ニ残留シ在リ先遣大隊ハ本日午前十一時三十分十字街方向ニ進出シ該地東側高地ニ在ル敵ヲ攻撃中師団主力ハ今朝来攻撃ヲ続行中ナルカ如シ
二、支隊ハ今ヨリ玄武湖北方地区ニ向ヒ転進セントス
三、先遣大隊ハ前任務ヲ続行スヘシ
四、前衛ハ午後一時二十分其ノ歩兵先頭ヲ以テ銀吼山北側ヲ出発シ岡下馬営ヲ経テ十字街ニ向ヒ前進スヘシ
五、左側衛ハ依然現態勢ニ在リテ支隊ノ転進ヲ掩護スヘシ後命ヲ待ツテ夜暗ヲ利用シ離脱シ支隊本隊ニ追及シ得ヘキ準備ニ在ルヘシ
六、後衛ハ支隊ノ転進ヲ掩護シタル後一切ノ後方機関ヲ掩護シテ支隊本隊ニ追及スヘシ
但シ一部ヲ残置シ軍直轄ノ砲兵及衛生機関等掩護ニ任セシムルヲ要ス又敵状ニヨリテハ其ノ大部ヲ以テ現任地附近ニ於テ駐止掩護ノ必要ヲ生スル場合ヲ顧慮スルヲ要ス
七、本隊タル諸隊ハ遂次堯化門附近ニ集合左ノ序列ニ従ヒ前衛ノ後方千米ヲ続行スヘシ
八、余ハ本隊ノ先頭ヲ行進ス

支隊長　佐々木到一

軍隊区分
先遣大隊長
歩兵第三十三聯隊第一大隊（第二中隊欠）
旅団無線一機
前衛
司令官　助川大佐
歩兵第三十八聯隊本部
第一大隊（第三中隊欠）
工兵小隊
軽装甲車第八中隊
左側衛
歩兵第三十八聯隊第二大隊（第五中隊欠）
後衛
歩兵第三十八聯隊第三大隊（第十一中隊欠）
本隊
支隊司令部
歩兵第三中隊
歩兵第五中隊
野砲兵大隊（一中隊欠）
迫撃小隊
歩兵第十一中隊

○佐々木支隊命令

右側支隊命令

十二月十二日午後六時四十分
於　興衛村司令部

一、敵ハ十字街東西ノ高地ヲ南北ニ亘リ二線ニ陣地ヲ設備シ迫撃砲数門並ニ野砲一門在ルモノヽ如シ
而シテ第一線陣地ノ右翼ハ十字街東南方約一粁ノ森林附近又其ノ左翼ハ詳ラカナラサルモ姜比庄附近ニ在ルモノト想像セラル
先遣大隊ハ何家凹ヨリ三角標高五七・四高地ニ亘ル線ニ展開シ正午以来敵ヲ攻撃中ナリ
二、支隊ハ先遣大隊ノ後方ニ兵力ヲ集結シ明十三日ニ於ケル攻撃ヲ準備セントス
三、前衛（工兵小隊ヲ欠キ歩兵第三中隊ヲ復帰セシム）司令官ハ先遣大隊ヲ併セ指揮シ明十三日敵ヲ攻撃スル目的ヲ以テ前面ノ敵情地形特ニ右翼正面敵情地形ヲ捜索スヘシ
敵ノ退却スル場合ニ於テハ機ヲ失セス追撃ニ移ル準備ニ在ルヲ要ス
四、左側衛ハ日没後戦場ヲ離脱シ興衛村東北地区ニ兵力ヲ集結シ予備隊トナルヘシ
但シ第五中隊ハ興衛村東南方三角標高一四七・一ノ高地ヲ占領セシメタル後貴官ノ指揮ニ復帰セシム
五、後衛ハ前任務ヲ続行スヘシ但シ野砲兵大隊（一中隊欠）ハ作命甲第百六十六号ノ如ク明十三日払暁マテニ興衛村支隊司令部ニ追及スヘシ
六、歩兵第十一中隊長ハ約一小隊ノ兵力ヲ正午迠ニ岡下三叉路ニ派遣シ砲兵前進掩護並ニ誘導ニ任スヘシ
七、歩兵第十中隊ハ第二大隊長ノ指揮ヲ受ケ予備隊トナルヘシ
大行李ハ迫撃砲隊ニ続行シ先頭ヲ以テ李家庄附近ニ前進シ待機スヘシ
八、余ハ興衛村ニ在リ

支隊長　佐々木到一

○佐々木支隊命令

右側支隊命令

十二月十三日午前一時三十分
於　興衛村司令部

一、支隊当面ノ敵ハ尚頑強ニ抵抗シツヽアリ昨十二日夕我師団ノ右翼隊ハ紫金山第一峰ヲ攻略シ続イテ天文台ニ向ヒ攻撃中　荻州兵団ノ歩一聯隊ヲ基幹トスル一支隊ハ鎮江方向ヨリ西進シ烏竜山砲台、柳川兵団ニ属スル国崎支隊ハ蕪湖ニ於テ揚子江ヲ渡河シ南京対岸浦口ニ向ヒ近迫シツヽアリ　又吉住兵団ハ南京城東南角ニ、藤田兵団ハ南門角ニ夫々肉迫シ攻撃中ナリ
二、支隊ハ今十三日重点ヲ左方ニ保持シツヽ敵ノ中央ヲ突破シ下関方向ニ進出セントス
岔路口西方約一粁三角標高一四七・一高地ノ我カ歩兵約一中隊ヲ以テ確実ニ之ヲ占領セリ
三、後衛ハ依然トシテ其ノ任務ヲ続行スヘシ
四、歩兵第三十八聯隊長ノ指揮スル部隊（迫撃小隊ヲ配属ス）ハ払暁以後攻撃ヲ開始シ一部ヲ以テ道路以北ニ、主力ヲ以テ十字街東側高地ノ攻略ニ努ムヘシ
五、野砲兵大隊（第三中隊欠）ハ可成速ニ興衛村附近ニ陣地ヲ占領

シ第一線歩兵ノ攻撃ニ協力スヘシ
〔以下略〕

支隊長　佐々木到一

○佐々木支隊命令

右側支隊命令

十二月十三日午後五時三十五分
於　南京和平門外

一、敵ハ全面的ニ敗北セリ　支隊ハ和平門以西ノ各門及ヒ下関ヲ占領シ敵ノ逃出ヲ完全ニ閉鎖セリ
二、支隊ハ本夜現態勢ヲ以テ敵ヲ監視シ又一部ヲ以テ背後交通ヲ遮断シ掃蕩セントス
三、歩兵第三十八聯隊（第二、第三大隊欠）ハ和平門（之ヲ含ム）以西ノ各門及下関ヲ警備シ交通ヲ遮断スヘシ
歩兵第三十八聯隊（第二中隊欠）ヲ指揮スル事旧ノ如シ
四、歩兵第三十八聯隊第三大隊ハ後方警備ニ必要ナル最小限ノ兵力ヲ堯化門、仙鶴門鎮、馬営附近ニ残置シ進路両側ヲ掃蕩シツヽ、明十四日概ネ正午頃迄ニ支隊ニ追及スヘシ
馬営附近ニ残置セル第五中隊ヲ区署シ所要ノ人員ヲ残置セシメタル後（必要ナケレハ全部）之ヲ収容スヘシ
五、爾余ノ諸隊ハ予備隊トナリ中央門外附近ニ集結シ露営スヘシ
〔以下略〕

支隊長　佐々木到一

○歩兵第三十旅団命令

十二月十四日午前四時五十分
於　中央門外

一、敵ハ全面的ニ敗北セルモ尚抵抗ノ意志ヲ有スルモノ散在ス
二、旅団ハ本十四日南京北部城内及城外ヲ徹底的ニ掃蕩セントス
三、歩兵第三十三聯隊ハ金川門（之ヲ含ム）以西ノ城門ヲ守備シ下関及北極角ヲ東西ニ連ヌル線及城内中央ヨリ獅子山ニ通スル道路（含ム）城内三角地帯ヲ掃蕩シ支那兵ヲ撃滅スヘシ
四、歩兵第三十八聯隊（第二大隊欠）ハ金川門（之ヲ含マス）以東ノ城門ヲ守備シ歩兵第三十三聯隊掃蕩地区以東ノ城内及和平門中央大学農林ヲ連ヌル線以西地区ヲ掃蕩シ支那兵ヲ撃滅スヘシ
五、歩兵第三十八聯隊第二大隊ハ玄武湖及紫金山ノ中間ニ在ル山岳地帯（之ヲ含ム以北ノ地区）ヲ掃蕩シ支那兵ヲ撃滅スヘシ
六、各隊ハ師団ノ指示アル迄俘虜ヲ受付クルヲ許サス
七、野砲兵第一大隊ハ和平門北側附近ニ在リテ烏竜山砲台方面ニ於テ駐止セラルヽト思ハレル敵ノ兵団ニ対シ適時射撃シ在ル如ク陣地ヲ選定シ其ノ準備ニ在ルヘシ
八、独立軽装甲車第八中隊ハ其一小隊ヲ速ニ湯水鎮ニ到ラシメ軍司令官ノ直轄タラシメ爾余ハ中央門外附近ニ集結シ後命ヲ待ツヘシ
九、迫撃砲隊ハ現在地ニ在リテ待期スヘシ
十、工兵一小隊ハ予備隊ト成リ中央門外ニ位置スヘシ
十一、余ハ中央門外ニ在リ

支隊長　佐々木少将

（以上『歩兵第三十八聯隊戦闘詳報』）

その二　第九師団

○九師作命甲第百二十五号

第九師団命令

十二月九日午後四時
於　山下方橋

一、敵ハ南京城壁並紫金山ヲ占領シ其砲兵ハ紫金山西南麓附近ニアルモノヽ如シ
第十六師団ハ本夕上麒麟門附近ニ進出セルモノヽ如キモ明カナラス
第十軍方面ノ情況又其後新報ヲ得ス
二、師団ハ本夜暗ヲ利用シ城壁ヲ占領セントス
三、両翼隊ハ本夜暗ヲ利用シ城壁ヲ占領スヘシ　左翼隊長ハ軽装甲車二小隊ヲ右翼隊長ノ指揮下ニ入ラシムヘシ
四、砲兵隊ハ所要ニ応シ両翼隊ノ戦闘ニ協力スヘシ
五、工兵隊ハ主トシテ右翼隊ノ戦闘ニ協力スヘシ
六、爾余ノ諸隊ハ前任務ヲ続行スヘシ
七、各部隊大行李ハ糧秣補給後高橋門東西ヲ連ヌル「クリーク」以南ノ地区ニ後退シ所要ノ掩護ヲ附シ宿営セシムヘシ
八、予ハ山下方橋ニ在リ

第九師団長　吉住良輔

下達法　命令受領者ニ印刷セルモノヲ交付ス

○九師作命甲第百二十六号

軍隊区分

右翼隊長　秋山少将
歩兵第六旅団
独立機関銃第一大隊ノ一中隊
戦車第一大隊ノ一中隊
騎兵一分隊
山砲兵一大隊
工兵一中隊（一小隊欠）
左翼隊長　井出少将
歩兵第十八旅団（一大隊及歩兵第十九聯隊ノ残置部隊欠）
独立機関銃第一大隊（一中隊欠）
独立軽装甲車第七中隊
騎兵二分隊
山砲兵一大隊
工兵一中隊（一小隊欠）
予備隊長　鈴木歩兵少佐
歩兵第十九聯隊ノ一大隊（一中隊欠）
砲兵隊長　芹川砲兵大佐
山砲兵第九聯隊（二大隊欠）

○九師作命甲第百三十号

第九師団命令

十二月十三日午前七時
於　山下方橋

一、敵ハ逐次城内ニ退却中ナリ

第十六師団ノ一部ハ南京城北方ヨリ下関方面ニ前進シ敵ノ退路ヲ遮断スル筈
二、師団ハ当面ノ敵ヲ撃破シ中山門西方約二粁「クリーク」ノ線ニ進出セントス　独立工兵第九聯隊（一中隊欠）か号部隊ヲ属セラル
三、両翼隊ハ城壁ノ線ヲ占領セハ引続キ当面ノ敵ヲ撃破シ中山門西方約二粁南北ニ流ルヽ「クリーク」ノ線ニ進出スヘシ
特ニ一部ヲ以テ機ヲ失セス「クリーク」対岸ヲ占領スヘシ
〔以下略〕
五、城内ノ戦闘ニ当リテハ別紙南京入城ニ関スル軍司令官注意事項ニ依ルヘシ
〔以下略〕

第九師団長　吉住良輔

○九師作命甲第百三十一号

第九師団命令

十二月十三日正午
於　山下方橋

一、軍ハ南京城内ノ掃蕩ヲ実施ス
二、師団ハ担任区域（九師作命甲第百三十号別紙附図）内ノ掃蕩ヲ実施セントス
南京城内ニ於ケル第十軍並第十六師団トノ作戦地境ヲ左ノ如ク定メラル
第十軍第九師団間
共和門（通済門）—公園路—中正街—中正路—漢中路ノ線トシ共和門ハ第十軍ニ其他ノ線上ハ当師団ニ属ス
第九師団第十六師団間
中部橋（中山門南方八〇〇）—外五竜橋間クリーク—古物保存所（中山門西方八〇〇）—中山路（中山碼頭ニ至ル）ノ線トシ線上ハ当師団ニ属ス
但中山門、中山路ハ使用スルコトヲ得
三、右翼隊ハ爾今城内掃蕩隊トナリ別紙掃蕩要領ニ基キ師団担任地域内ノ掃蕩ニ任スヘシ
但掃蕩開始ノ時機ハ別命ス
歩兵第三十五聯隊（一大隊欠）ヲ其ノ指揮ニ復帰シ新ニ軽装甲車中隊ノ主力、か号部隊ノ主力、工兵一小隊ヲ増加配属ス
四、左翼隊ハ随時追撃ニ移リ得ルノ態勢ヲ以テ概ネ現在地附近ニ其ノ兵力ヲ集結スヘシ
五、第三項関係部隊ハ掃蕩隊ニ配属スヘキ兵力ヲ即時城内飛行場ニ出シ掃蕩隊長ノ指揮下ニ入ラシムヘシ
六、砲兵隊ハ一部ヲ以テ光華門東南方地区ニ主力ヲ以テ中山門南側附近ニ陣地ヲ占領シ随時掃蕩隊ニ協力シ得ルノ準備ニ在ルヘシ
七、師団通信隊ハ師団司令部ヲ基点トシ掃蕩隊、旧左翼隊、砲兵隊間ニ通信網ヲ構成シ其連絡ニ任スヘシ
八、城内部隊ハ先ニ配布セル南京入城ニ関スル注意事項ヲ厳守スルト共ニ別紙南京城内掃蕩要領ヲ準用スヘシ
九、野戦高射砲隊、衛生隊並野戦病院ハ前任務ヲ続行スヘシ
〔以下略〕

第九師団長　吉住良輔

（以上『輜重兵第九聯隊行動詳報』）

○六旅作命甲第一三四号

右翼隊命令

十二月十一日午前七時
於　張家巷旅団司令部

一、歩兵第三十五聯隊第三大隊ノ奮戦ニヨリ紫金山頂ヲ占領セリ
支隊当面ノ敵情別紙態勢要図竝敵陣地配備要図ノ如シ
第十六師団ハ中央運動場附近ニ進出左翼隊ハ昨十日光華門ヲ占領セリ
師団ハ依然前企図ヲ遂行ス
二、右翼隊ハ依然重点ヲ中山門南半部ニ指向シ城壁ヲ占領セントス
砲兵隊ハ主トシテ右翼隊ノ戦闘ニ協力ス
軍砲兵ノ十加及二十四榴ハ陸軍兵営東側附近ニ陣地ヲ占領シ中山門竝城壁破壊ニ協力ス
三、右第一線聯隊（独立機関銃第三中隊、工兵一小隊ノ配属故ノ如ク山砲兵第一大隊（一中隊欠）ヲ増加配属ス）ハ速ニ当面ノ敵陣地ヲ一挙ニ奪取シ中山門南半部ノ占領ヲ準備スヘシ
特ニ一部ヲ以テ中山門南側ニ接近シ城壁ノ破壊占領ヲ準備スヘシ又敵ノ中山門ニ退却ニ尾シテ果敢突入ノ機ヲ捕捉シ占領ヲ期スヘシ
四、歩兵第七聯隊（第十二中隊ヲ欠キ配属部隊故ノ如シ）ハ城外ノ敵陣地ヲ一挙ニ突破シ城壁占領ヲ準備スヘシ
五、戦車第一大隊ノ一中隊ハ先ツ左第一線聯隊ノ城外ノ敵陣地奪取ニ協力シタル後右第一線聯隊ノ中山門占領ニ協力スヘシ
六、工兵第一中隊（三小隊欠）ハ主トシテ城壁破壊ニ任スヘシ
第一線配属両小隊ヲ指導シテ軽渡河材料ノ蒐集並ニ城壁破壊ヲ準備セシムヘシ
七、予備隊ハ依然前任務ヲ続行スヘシ
八、予ハ現在地ニ在リ

右翼隊長　秋山義兌

下達法
要旨ヲ各別ニ伝ヘ後印刷交付ス

○六旅作命甲第一三五号

右翼隊命令

十二月十一日午後六時
於　張家巷旅団司令部

一、第一線両聯隊ノ奮闘ニ依リ敵ノ第一、第二線陣地ヲ奮取シ右聯隊ハ水西園及楊家庄東方高地ノ線ニ左聯隊ハ庄東方高地及工兵学校西方高地ノ線ニ進出セリ師団砲兵隊及軍砲兵隊ハ依然右翼隊ノ戦闘ニ協力ス
二、右翼隊ハ本十一日夜中山門南半部以南ノ城壁ヲ占領セントス
三、右第一線聯隊（配属部隊故ノ如シ）ハ本十一日夜一部ヲ以テ中山門南方約三百米ノ破壊口ヲ利用シ城壁ヲ主力ヲ以テ中山門半部ヲ占領スヘシ
四、左第一線聯隊（配属部隊故ノ如シ）ハ本十一日夜庄及工兵学校西方附近ノ破壊口ヲ利用シ城壁ヲ占領スヘシ
五、戦車第一大隊ノ一中隊ハ右第一線聯隊ノ中山門占領ニ協力スヘシ
六、工兵第一中隊主力ハ第一線両聯隊ノ城壁占領ニ協力スヘシ
七、予備隊ハ一小隊ヲ残置シ主力ハ原所属ニ復帰スヘシ
八、予ハ依然現在地ニ在リ

右翼隊長　秋山義兌

下達法　命令受領者ヲ集メロ達筆記セシム

○六旅作命甲第一三七号

右翼隊命令

十二月十三日午前十時十分
於　張家巷旅団司令部

一、第一線両聯隊ハ本十三日早朝中山門以南ノ城壁ヲ占領セリ
師団ハ当面ノ敵ヲ撃破シ中山門西方約二粁「クリーク」ノ線ニ進出ヲ企図ス
二、右翼隊ハ当面ノ敵ヲ撃破シ中山門西方約二粁南北ヲ流ルヽ「クリーク」ノ線ニ進出セントス
か号部隊ノ一部ヲ配属セラル
第十六師団トノ戦闘地境ハ中山路トシ中山路ハ第十六師団ニ属ス左翼隊トノ戦闘地境ヲ外五竜橋（白虎橋）中山門西方約一粁）及其西方「クリーク」ノ線ニ延伸セラル
線上ハ左翼隊ニ含ム
三、歩兵第三十五聯隊（第一大隊欠）ハ中山門西南方地区ニ集結シ師団長ノ直轄タルヘシ
四、歩兵第三十五聯隊第一大隊（独立機関銃第三中隊及工兵一小隊ヲ属ス）ハ右第一線トナリ中山路ニ沿フ地区ヲ「クリーク」ノ線ニ向ヒ追撃スヘシ
特ニ一部ヲ以テ機ヲ失セス「クリーク」対岸ヲ占領スヘシ
五、歩兵第七聯隊（第三大隊ヲ欠キ配属部隊故ノ如シ）ハ依然左第一線トナリ成ル可ク速ニ外五竜橋以北ノ地区ニ転移シ「クリーク」ノ線ニ向ヒ敵ヲ追撃スヘシ
特ニ一部ヲ以テ機ヲ失セス「クリーク」対岸ヲ占領スヘシ
六、両第一線ノ戦闘地境ヲ飛行場中央ヲ連ヌル線ニ延伸ス
七、両第一線ハ特ニ有力ナル一部ヲ以テ前進地域ヲ掃蕩スヘシ
八、城内ノ戦闘ニ当リテハ別紙南京入城ニ関スル軍司令官注意事項ニ依ルヘシ
特ニ古物保存場ニ立入ヲ禁シ其保存ニ関シ注意スヘシ
九、戦車第一大隊第一中隊ハ中山道西南側ニ集結待機スヘシ
十、山砲兵第一大隊（第一中隊欠）ハ先ツ城壁附近ニ陣地ヲ占領シ両第一線ノ追撃ヲ支援スヘシ
第一線ノ「クリーク」占領後速ニ飛行場ニ陣地ヲ推進スヘシ
十一、か部隊ハ第一線ノ推進ニ伴ヒ逐次飛行場附近ニ前進シ両第一線ノ戦闘ニ協力スヘシ
十二、歩兵第七聯隊三大隊ハ予備隊トナリ古物博物館南側地区ヲ経テ飛行場東側ニ向ヒ前進スヘシ
十三、工兵第一中隊主力ハ司令部ト共ニ前進スヘシ
十四、第九師団第一架橋材料中隊ハ現在地ニアリテ待機スヘシ
十五、予ハ中山門ヲ経テ西長安門附近ニ至ル
歩兵第七聯隊第十二中隊ノ一小隊ハ司令部ト共ニ前進スヘシ

右翼隊長　秋山義兌

下達法
要旨ヲ各別ニ伝ヘ後印刷交付ス

○六旅作命甲第一三八号

右翼隊命令

十二月十三日午後四時三十分
於　導准委員会旅団司令部

一、右翼隊ハ師団掃蕩隊トナリ師団担任区域内ヲ掃蕩セントス
　軽装甲車一中隊、か号部隊主力、工兵一小隊ヲ増加配属セラル
　歩兵第三十五聯隊（一大隊欠）ハ復帰セシメラル
二、歩兵第七聯隊（戦車一中隊（一小隊欠）工兵中隊（一小隊欠）
　ヲ配属ス）ハ北部掃蕩隊トナリ別紙区域内ノ掃蕩ニ任スヘシ
三、歩兵第三十五聯隊（一中隊ヲ欠キ軽装甲車一中隊、独立機関銃
　第三中隊、工兵一小隊ヲ配属ス）ハ南部掃蕩隊トナリ別紙区域
　内ノ掃蕩ニ任スヘシ
四、山砲兵第一大隊ハ飛行場西側附近ニ集結シ待機スヘシ
五、か号部隊主力ハ第一公園附近ニ集結スヘシ
六、歩兵第三十五聯隊ノ一中隊ハ司令部ト共ニ位置スヘシ
七、掃蕩実施ニ関シテハ南京城内掃蕩要領ニ依ルヘシ
八、予ハ導准委員会建物内ニ在リ

右翼隊長　秋山義兌

○南京城内掃蕩要領

一、城内ノ残敵ヲ掃蕩ス
二、掃蕩ニ関シテハ入城ニ関スル注意事項ヲ厳守ス
　但シ敵ノ抵抗スル地帯ハ此ノ限ニ非ス
三、敵ノ抵抗セル場合ニ於ケル家屋ノ焼却ニハ特別ノ注意ヲ払ヒ却テ部隊ノ交通ヲ遮断スルカ如キ事無キ様注意ス
　又発電所、電気局、郵便電信局、水源池、瓦斯会社、諸倉庫、
　工場等軍ノ利用スヘキ箇所ハ速ニ之ヲ占領シ敵ノ破壊、焼却ヲ
　予防ス
　遁走セル敵ハ大部分便衣ニ化セルモノト判断セラルヽヲ以テ其
　ノ疑アル者ハ悉ク之ヲ検挙シ適宜ノ位置ニ監禁ス
四、隣接兵団ト連係シテ掃蕩ヲ実施スルモ連係不能ナル場合ニ於テ
　ハ作戦地境通路ハ所要ノ守備兵ヲ配置シ敗残兵並住民ノ交通ヲ
　遮断ス
五、特ニ友軍相撃ニ陥ラサル如ク最善ノ方法ヲ講ス　之カ為努メテ
　他部隊ト連係スルハ勿論国旗等ヲ以テ先頭、側方等ヲ標示ス
六、掃蕩実施ニ関シテハ特ニ敵ノ敷設セル地雷、爆破装置、毒瓦
　斯、毒物投入等ニ注意スヘシ
七、掃蕩ト共ニ金庫、兵器、糧秣、倉庫其他軍用資源ヲ調査シ必要
　ニ応シ之ニ監視兵ヲ附スルト共ニ速ニ報告ス
八、注意事項第五項ノ補助憲兵困難ナル場合ニ於テハ掃蕩隊長直轄
　ノ下ニ多数ノ巡察ヲ派遣シ其目的ヲ達成セシム

○掃蕩実施ニ関スル注意

一、軍司令官注意事項ヲ一兵ニ至ル迄徹底セシメタル上掃蕩ヲ実施
　スヘシ
二、外国権益ノ建物ヲ敵カ之ヲ利用シアル場合ノ外立入ヲ厳禁ス
　重要ナル箇所ニハ歩哨ヲ配置スヘシ

三、掃蕩隊ハ残敵掃蕩ヲ任トシ必ス将校（准尉ヲ含ム）ノ指揮スル
　部隊ヲ以テ実施シ下士官以下各個ノ行動ヲ絶対ニ禁ス
四、青壮年ハ凡テ敗惨兵又ハ便衣隊ト見做シ凡テ之ヲ逮捕監禁スヘ
　シ
　青壮年以外ノ敵意ナキ支那人民特ニ老幼婦女ニ対シテハ寛容之
　ニ接シ彼等ヲシテ皇軍ノ威風ニ敬仰セシムヘシ
五、銀行、銭荘等ハ侵入ヲ禁止シ歩哨ヲ配置スヘシ
六、家屋内ニ侵入シ掠奪ニ類スル行動ヲ厳ニ戒ムヘシ
七、放火ハ勿論失火ト雖モ軍司令官注意ノ如ク厳罰ニ処ス
八、友軍相撃ニ就テ厳ニ注意スヘシ
　合言葉ヲ「金沢」「富山」ト定ム
九、掃蕩実施部隊ハ師団長ノ特ニ選抜セル部隊ナルニ鑑ミ軍紀ヲ厳
　ニシ其行動ヲ慎重ナラシムヘシ
十、火災ヲ発見セハ附近部隊ハ勿論掃蕩隊ハ速ニ消火ニ努ムヘシ

昭和十二年十二月十三日

歩兵第六旅団長　秋山義兌

○六旅作命甲第一三九号

第九師団掃蕩隊命令

十二月十四日午後七時〇分
於　導准委員会旅団司令部

一、九師作命号外ニヨリ師団掃蕩隊及城内集結部隊ノ外城内ニ入ル
　ヲ禁シ且掃蕩以外ノ城内集結部隊ハ宿営地附近ヨリ以外ノ地域
　ニ行動ヲ禁止セラル
二、掃蕩隊ハ速ニ残敵ヲ掃蕩セントス
三、両地区掃蕩隊ハ明十五日中ニ残敵ヲ掃蕩シ以テ南京城占領ヲ確
　実ナラシムルヘシ
四、歩兵第三十五聯隊長ハ配属中ノ軽装甲車一中隊ヲ歩兵第七聯隊
　ニ転属スヘシ
五、予ハ依然導准委員会建物内ニ在リ

掃蕩隊長　秋山義兌

○六旅作命甲第一四四号

第九師団掃蕩隊命令

十二月十六日午後六時〇分
於　導准委員会旅団司令部

一、北舎営区内ノ各部隊ハ別紙ノ如ク舎営スヘシ
二、各部隊ハ其舎営地区内ノ掃蕩ニ任スルト共ニ地区内ノ直接警戒
　ニ任スヘシ
　掃蕩ニ関シテハ軍司令官注意事項並師団掃蕩実施要領及掃蕩ニ
　関スル掃蕩隊長注意ヲ厳守セシムヘシ
三、歩兵第三十五聯隊及歩兵第七聯隊ハ区域内城門橋梁中央十字路
　其他交通ノ要所ニ歩哨ヲ配置シ警戒スヘシ
四、各部隊舎営地区内ノ舎営勤務ニ関シテハ各部隊毎ニ陣中要務令
　ノ規定ニ準拠スヘシ
五、予ハ十七日午後陸軍大学西側附近ニ移ル

掃蕩隊長　秋山義兌

下達法
印刷交付ス

（以上『歩兵第七聯隊戦闘詳報』）

第四、第十軍

○丁集作命甲第三十一号

丁集団命令

十一月十九日午前七時
於金山

一、敵ハ其指揮組織混乱シ総軍既ニ敗戦ノ色濃厚ニシテ其主力ヲ江陰無錫ノ線以西ノ地区ニ集結再建セント狂奔シアルモノヽ如キモ軍隊ノ志気既ニ全ク阻喪シアリ
敵情ノ細部ハ別紙情報記録第十四号ノ如シ
二、集団ハ機ヲ失セス一挙南京ニ敵ヲ追撃セントス
三、国崎支隊ハ一小部隊ヲ以テ平望鎮ヲ確保セシメ主力ハ嘉善、湖州、広徳ヲ経テ蕪湖ニ向ヒ挺進シ敵ノ退路ヲ遮断スヘシ
爾後状況ニ依リ主力又ハ一部ヲ以テ揚子江西岸南京ノ背後ニ進出スルノ準備ニ在ルヘシ
四、第十八師団ハ速ニ湖州、広徳、漂水ヲ経テ南京ニ向ヒ追撃スヘシ
嘉興占領迄其砲兵ノ主力ヲ以テ第百十四師団ノ戦闘ニ協力セシムヘシ
五、第百十四師団ハ嘉興ヲ奪取シタル後一部ヲ以テ同地ヲ確保シ主力ハ速ニ湖州、長興、漂陽ヲ経テ南京ニ向ヒ追撃スヘシ
又一小部隊ヲ以テ石門湾附近ヲ占領シ軍ノ左側ヲ警戒スヘシ
六、第六師団ハ松江ヲ経テ速ニ湖州ニ前進シ南京ニ向フ追撃ヲ準備スヘシ
七、河村部隊ハ主力ヲ以テ国崎支隊及第十八師団ニ協力シ湖州、南京間ノ敵情ヲ捜索シ一部ヲ以テ指揮任務ニ任スヘシ
八、第一後備歩兵団ハ北橋鎮、松江、嘉興、湖州ニ沿フ市街及交通路ノ掩護ニ任スヘシ
其要領ニ関シテハ別命ス
九、第二後備歩兵団ハ速ニ湖州ニ前進シ後命ヲ待ツヘシ
十、独立工兵第三聯隊ハ速ニ嘉興ニ向ヒ前進シ先ツ嘉興—湖州道ヲ補修スヘシ
十一、集図通信隊ハ別紙通信計画ニ基キ行動スヘシ
十二、爾余ノ軍直轄部隊ハ嘉興ニ前進シ後命ヲ待ツヘシ
十三、予ハ先ツ嘉興ニ次テ湖州ニ到ル

丁集団司令官　柳川平助

下達法
印刷命令ヲ交付ス

○軍司令官訓令

訓令

十一月二十日
於金山

一、皇軍ノ神速勇猛ナル作戦ニ心胆ヲ奪ハレタル国民政府ハ遂ニ南京ヲ脱出シ今ヤ同地ニ軍事機関ノミヲ残置スルニ過キサルニ至レリ
二、南京城頭高ク日章旗ヲ掲クルノ日今ヤ近キニ在リ
将兵努メヨ

丁集団司令官　柳川平助

○丁集作命甲第四十七号

丁集団命令

十一月三十日午前八時
於湖州

一、集団ハ南京ニ向フ追撃準備ヲ促進セントス
二、国崎支隊ハ広徳—建平—水陽鎮道ヲ水陽鎮ニ前進シ太平府附近ニ向フ前進ヲ準備スヘシ
三、第百十四師団ハ有力ナル一部ヲ以テ漂陽ヲ占領シ主力ハ宜興附近ニ於テ南京ニ向フ前進ヲ準備スヘシ
歩兵一中隊ヲ残置シ長興飛行場ヲ警備セシムヘシ
歩兵第百五十聯隊一大隊（第二、第三、第四中隊及機関銃一小隊欠）ヲ其隷下ニ復帰セシム
四、第十八師団ハ有力ナル一部ヲ以テ東灞ヲ占領シ主力ハ広徳、下泗安ノ地域ニ於テ南京ニ向フ前進ヲ準備スヘシ
大隊長ノ指揮スル歩兵二中隊ヲ以テ湖州附近ノ警備ニ任セシムヘシ
五、第六師団ハ有力ナル一部ヲ以テ定埠ヲ占領シ主力ハ長興、湖州ノ地域ニ於テ南京ニ向フ前進ヲ準備スヘシ
歩兵一大隊ヲ湖州ニ於テ軍直轄タラシムヘシ
六、予ハ現在地ニ在リ

丁集団司令官　柳川平助

（以上『第十軍作戦指導ニ関スル参考資料』其二）

○丁集作命甲第五〇号

丁集団命令

十二月二日午前十一時
於湖州

一、中支方面軍ハ南京ヲ攻略ス
之カ為上海派遣軍ハ十二月五日頃主力ノ行動ヲ開始シ重点ヲ丹陽—句容道方面ニ保持シ磨盤山山系西方地区ニ進出ス
又一部ヲ以テ揚子江左岸地区ヨリ敵ノ背後ヲ攻撃スルト共ニ津浦鉄道及江北大運河ヲ遮断ス
二、集団ハ南京ニ向ヒ追撃ヲ続行セントス
上海派遣軍トノ作戦地境ハ巴山亭橋鎮（宜興北方約十粁）—黄金山鎮（漂陽西北方約二十五粁）—天王寺十字路—赤山ノ線トス
三、第百十四師団ハ宜興—漂陽—漂水道ヲ先ツ漂水北方地区ニ進出シ爾後漂水—南京道方面ヨリ南京ニ向フ追撃ヲ準備スヘシ〔略〕
四、第六師団ハ長興—広徳—定埠—洪藍埠（漂水西南方八粁）道ヲ先ツ漂水西方地区ニ進出シ爾後横渓橋鎮（漂水西北方約二十四粁）—南京道方面ヨリ南京ニ向フ追撃ヲ準備スヘシ〔中略〕
五、第十八師団ハ広徳—十字輔—建平—洪藍埠道ヲ先ツ小丹陽鎮附近ニ進出シ爾後大平府—南京道方面ヨリ南京ニ向フ追撃ヲ準備スヘシ〔略〕
六、国崎支隊ハ広徳—建平—水陽鎮—大平府道方面ヨリ揚子江左岸ニ渡河シ爾後浦口附近ニ進出シ敵ノ退路ヲ遮断スヘシ
〔以下略〕

丁集団司令官　柳川平助

○丁集作命甲第五十六号

丁集団命令

十二月六日正午
於　湖州

一、中支那方面軍ハ南京要塞ヲ攻略ス
〔略〕
二、集団ハ南京ニ向ヒ追撃ヲ続行セントス
三、第百十四師団ハ漂水—秣陵関—南京道方面ヨリ南京ニ向ヒ追撃スヘシ
〔略〕
四、第六師団ハ洪藍埠—横渓橋鎮—南京道方面ヨリ南京ニ向ヒ追撃スヘシ
〔略〕
五、第十八師団ハ寧国—蕪湖—南京道方面ヨリ南京ニ向ヒ追撃スヘシ
〔中略〕
九、各部隊主力ノ雨花台—棉花地ノ線ヲ越ヘ南京市街ヘノ進入ニ関シテハ別命ス
〔以下略〕

丁集団司令官　柳川平助

○丁集作命甲第六十六号

丁集団命令

十二月十二日午後六時
於　秣陵関

一、第六、第百十四師団ハ本十二日正午南京城壁ヲ占領シ引続キ城内ヲ掃蕩中ナリ
国崎支隊ハ十二日午後四時石仏寺ヲ占領シ浦口ニ向ヒ追撃中
二、集団ハ一部ヲ南京、蕪湖附近ニ残置シ主力ヲ以テ速ニ杭州攻略ヲ準備セントス
三、国崎支隊ハ主力ヲ以テ浦口附近ヲ占領シ残敵ヲ捕捉撃滅スヘシ
四、第六師団ハ南京占領後旅団長ノ指揮スル歩兵一聯隊野砲兵一大隊ヲ基幹トスル部隊ヲ以テ蕪湖ヲ主力ヲ以テ南京ノ警備ニ任スヘシ
南京ノ警備区域ハ共和門—公園路—中正門—中正路—漢中路ノ線（含ム）以南トシ以北ハ上海派遣軍ノ担任トス
〔略〕
五、第百十四師団ハ南京占領後師団司令部及歩兵約一聯隊ヲ南京ニ残置シ主力ハ成ルヘク速ニ行動ヲ起シ宜興及長興ニ前進スヘシ
南京残置部隊ハ十七日南京ヲ出発主力ニ合セシムル予定ナリ
〔以下略〕

集団司令官　柳川平助

○丁集作命甲号外

丁集団命令

十二月十三日午前八時三十分
於　秣陵関

一、敵ハ南京城内ニ於テ頑強ニ抵抗ヲ続ケツヽアリ
二、集団ハ南京城内ノ敵ヲ殲滅セントス
三、丁集団作命甲第五十六号第九項ノ制限ヲ解ク
四、各兵団ハ城内ニ対シ砲撃ハ固ヨリ有ラユル手段ヲ尽シ敵ヲ殲滅スヘシ
之カ為要スレハ城内ヲ焼却シ特ニ敗敵ノ欺瞞行為ニ乗セラレサルヲ要ス
五、集団ノ掃蕩区域ハ共和門—公園路—中正門—中正路—漢中路ノ線（含ム）以南トシ以北ハ上海派遣軍ノ担任トス

丁集団司令官　柳川平助

（以上『第十軍作戦指導ニ関スル参考資料』其三）

その一　第百十四師団

○一一四師作命甲第五十九号

第百十四師団命令

十二月十日午前八時
於　蔴田橋北方高地

一、当面ノ敵ハ逐次退却シツヽアリ
二、師団ハ其重点ヲ雨花台ニ指向スル如ク敵ヲ攻撃シテ周家凹—雨花台ノ線ニ進出セントス
三、秋山旅団ハ当面ノ敵ヲ攻撃シテ雨花台附近ニ進出スヘシ
工兵第一中隊（二小隊欠）ヲ配属ス
四、奥旅団ハ当面ノ敵ヲ攻撃シテ周家凹附近ニ進出スヘシ
工兵第二中隊（二小隊欠）ヲ配属ス
五、両旅団ノ戦闘地域ノ境界ハ国家凹西端及其南方面両点線路ノ線（線上ハ奥旅団ニ属ス）トス
六、砲兵聯隊ハ花神庙附近ニ陣地ヲ占領シ主力ヲ以テ秋山旅団一部ヲ以テ奥旅団ノ戦闘ニ協力スヘシ
七、工兵聯隊ハ第一中隊（二小隊欠）ヲ秋山旅団、第二中隊（二小隊欠）ヲ奥旅団ニ配属シ爾余ハ現在地附近ニ位置スヘシ
八、軽装甲車隊ハ主力ヲ以テ秋山旅団ノ一部ヲ以テ奥旅団ノ戦闘ニ協力スヘシ
九、師団通信隊ハ師団司令部ト両旅団間ノ通信連絡ニ任スヘシ
十、爾余ハ現在地附近ニ位置スヘシ
歩兵第六十六聯隊第二大隊ハ予備隊トナリ現在地ニ位置スヘシ
十一、騎兵大隊ハ到着スルニ従ヒ現在地附近ニ集結シ奥旅団ノ右翼方面ニ対スル進出ヲ準備スヘシ
十二、予ハ現在地ニ在リ後秋山旅団ノ後方ヲ雨花台ニ向ヒ前進ス

師団長　末松中将

下達法　部隊ノ到着ニ従ヒ直接部隊長ニ口達筆記セシム

軍隊区分

右翼隊
長　歩兵第百二十八旅団長　奥　少将
歩兵第百二十八旅団（未到着部隊欠）
野砲一中隊
工兵第百十四聯隊（第二中隊欠）

左翼隊
長　歩兵第百二十七旅団長　秋山少将
歩兵第百二十七旅団（未到着部隊及歩兵第六十六聯隊第二大隊欠）
野砲一中隊
工兵第二中隊（二小隊欠）

砲兵隊
長　野戦重砲兵第十四聯隊長　井手大佐
野砲兵第百二十聯隊（二中隊及未到着部隊欠）
野戦重砲兵第十四聯隊
（第一大隊聯隊段列半部及未到着部隊欠）
騎兵隊
騎兵第百十八大隊（一小隊欠）
予備隊
歩兵第六十六聯隊第二大隊（第五中隊欠）
工兵第二中隊ノ一小隊

〔以下略〕

師団長　末松中将

○一一四師作命甲第六十号

第百十四師団命令

十二月十日午後六時
於　朱家楼子北方高地

一、敵ハ我勧降ヲ容レス南京城外一連ノ陣地ニ於テ最後ノ抵抗ヲ辛フシテ保持シアリ
二、師団ハ主力ヲ曾家門―南京城東南角方向ニ保持シテ夜ニ入ルモ攻撃ヲ続行シ速ニ待望ノ南京攻略ヲ決行セントス
三、右翼隊ハ主力ヲ右翼ニ保持シテ当面ノ敵ヲ攻撃シ周家凹東方地区ニ進出シ其一部ヲ以テ南京城東南角及共和門（通済門）ニ突入スヘシ
四、左翼隊ハ依然攻撃ヲ続行シテ雨花台ニ進出シ其一部ヲ以テ南門及其東側城壁ニ突入スヘシ
五、両翼隊戦闘地域ノ境界ハ周家凹―鮮魚寧―周家楼子ノ線（線上ハ左翼隊ニ属ス）トス

（以上「第百十四師団戦闘詳報」〈『第百十四師団作戦資料綴所収』〉）

○歩一二八旅命

右翼隊命令

十二月十二日午後八時三十分
於　南京東南角東南七〇〇米道路側無名部落

一、師団ハ南京城高ク日章旗ヲ飜セリ
師団ハ主力ヲ周家凹―両下台ノ線以南ノ地区ニ集結シ一部ヲ以テ城内ヲ掃蕩ス
二、右翼隊ハ主力ヲ以テ所命ノ線以南ノ地区ニ集結シ一部ヲ以テ城内ヲ掃蕩セントス
三、歩兵両聯隊ハ既ニ示シアル兵力ヲ以テ城壁附近ニ軍旗ヲ奉シ其ノ主力ヲ以テ城壁近ク堅固ニ地歩ヲ占メ敵ノ逆襲ニ備ヘ逐次城内ノ掃蕩ニ任スヘシ
掃蕩及警戒区域ノ境界左ノ如シ
観音庵―白鷺洲―国貨界上西端道路集合点ヲ連ヌル線（線上ハ右聯隊ニ属ス）
四、戦闘地境左ノ如シ
師団ト上海派遣軍トノ境界ハ共和門ヨリ西方ニ通スル道路トス
両翼隊間ハ周家凹東端、養虎巷、琵琶巷、市政府社会局、大陸銀行ヲ通スル大街ノ線（線上ハ左翼隊ニ属ス）
五、爾余ノ諸隊ハ予備隊トシ南京東南角ヨリ東南方約七〇〇米道路ニ添フ無名部落ニ（野砲兵中隊ハ現在地）至厳ナル警戒裡ニ夜ヲ徹スヘシ　警戒ニ関シテハ先任中隊長之ヲ区処スヘシ
六、予ハ南京南角ヨリ東南方約七〇〇米道路ニ添フ無名部落ニ在リ

右翼隊長　奥少将

（『歩兵第百五十聯隊戦闘詳報』）

○歩第一二八旅命第六十二号

第百十四師団命令

十二月十三日午前九時半
於　朱家楼子北方高地

一、城内ノ敵ハ頑強ニ抵抗シツヽアリ
国崎支隊ハ既ニ浦口ニ達シ敵ノ退路ヲ遮断シアリ　集団ノ掃蕩地区ハ共和門―公園道―中正道―漢中路（含ム）以南ノ地区トス
二、師団ハ攻撃ヲ続行シ城内ノ敵ヲ殲滅セントス
三、両翼隊ハ城内ニ進入シ砲撃ハ固ヨリ凡ユル手段ヲ尽シテ敵ヲ殲滅スヘシ
之カ為要スレハ城内ヲ焼却シ特ニ敗敵ノ欺騙行為ニ乗セラレサルヲ要ス
両翼隊砲兵ノ配属ヲ解ク
四、砲兵隊ハ逐次陣地ヲ曾家門、李家凹附近ノ線ニ推進シ城内ノ破壊ニ任シ且両翼隊ノ城内掃討ニ協力スヘシ
五、騎兵隊ハ前任務ヲ続行スヘシ
六、戦車第五大隊ハ城内ニ進入シ両翼隊ノ掃討ニ協力スヘシ
七、師団通信隊ハ前任務ヲ続行スヘシ
八、予備隊ハ箕家門（曾家門）ニ位置スヘシ
九、予ハ箕家門ニ至ル

師団長　末松中将

○歩第一二八旅命第六十六号

右翼隊命令

十二月十三日正午
於　南京東南部七〇〇米道路上無名部落

一、城内ノ敵ハ今尚頑強ニ抵抗シアリ
国崎支隊ハ既ニ浦口ニ達シ敵ノ退路ヲ遮断シアリ
師団ハ攻撃ヲ続行シ城内ノ敵ヲ掃蕩ス
二、右翼隊ハ城内ニ進入シ共和門、公園路、中正路ノ線（含ム）以南ノ地区ヲ掃蕩セントス
三、第一線両聯隊ハ全力ヲ以テ城内ニ進入シアラユル手段ヲ尽シテ敵ヲ殲滅スベシ　之カ為メ要スレバ城内ヲ焼却シ特ニ残敵ノ為メ偽騙行為ニ乗セサルヲ要ス
掃蕩区域ノ境界ハ故ノ如シ　之カ為メ砲兵隊、戦車隊ハ城内ノ戦闘ニ協力ス　工兵聯隊ノ協力区分故ノ如シ
四、歩兵両聯隊ノ各々一中隊及独立機関銃隊ハ予備トシ直チニ本道上ニ残置シ余ノ指揮下ニ入ラシムヘシ
五、余ハ暫ク現在地ニアリ後本道上ヲ城内ニ至ル

右翼隊長　奥少将

（『歩兵第百五十聯隊陣中日誌』）

その二　第六師団

○六師作命甲第八十一号

第六師団命令

十二月十日一一三〇
於　楊心橋西南方王家営

一、当面ノ敵ハ南京城南側台地ヲ占領シアリ
歩兵第三十六旅団正面ニアル敵ハ直系軍第八十八師ナリシモノノ如シ　第百十四師団ハ花神庙附近ヲ攻撃中、第九師団ハ南京城東南方四籽高橋門、第十六師団ハ南京城東北方六籽盆路口附近及南京城北方四籽幕府山ヲ攻撃中ナリ

二、師団ハ一挙南京城ヲ占領セントス

三、右翼隊ハ当面ノ敵ヲ駆逐シ南京城南門中華門及西南角ニ対シ攻撃スヘシ

四、左翼隊ハ逐次兵力ヲ面北方ニ移動シ水西門及漢西門ニ対シ攻撃スヘシ
騎兵第六聯隊ヲ配属ス　逐次迂回隊ヲ下関方面ニ出シ渡河妨害ニ任セシムヘシ

五、第百十四師団トノ作戦地境及左右両翼隊トノ戦闘地境左ノ如シ
第六師団、第百十四師団間　南京城南門—朱家営ノ線
右翼隊、左翼隊間　宋家王（安徳門西北五百米）—新開地—柏庄、水西門ト西南角トノ中間ノ線

六、砲兵隊ハ第一線ノ推進ニ伴ヒ安徳門東西ノ地区ニ陣地ヲ占領シ主力ヲ以テ右翼隊、一部ヲ以テ左翼隊ニ協力スヘシ

七、工兵隊ハ両翼隊ニ各々二小隊ヲ増加配属シ爾余ハ到着後予備隊ト共ニ位置スヘシ

師団長　谷中将

（以下略）

○六師作命甲第八十二号

第六師団命令

十二月十三日一一〇〇
於　安徳門南側六師山

一、師団ハ一部ヲ以テ城内及涼涼山附近ノ攻撃ヲ続行スルト共ニ主力ハ逐次南門外及西門外ニ集結セントス

二、前項部隊ノ集結地左ノ如シ
右翼隊　南門南側部落東部
左翼隊主力　西門外部落附近
砲兵隊（野砲兵第六聯隊及野戦重砲兵第十四聯隊第一大隊）
三里店救済院附近
師団司令部、師団通信隊、軍無線小隊、軍有線部隊、歩四五ノ第一、第四中隊　南門外
爾余ノ部隊ノ集結地及細部ニ関シテハ参謀ヲシテ指示セシム

三、諸隊ノ行動開始ハ一四〇〇トス

師団長　谷中将

○六師作命甲第八十四号

第六師団命令

十二月十四日一一三〇
於　南門外司令部

一、南京城内ハ其大部概ネ掃蕩セラレタルモノ、如シ

二、師団ハ南京西南部ノ警備ニ任セントス

三、諸隊ノ警備並宿営区域別紙要図ノ如シ
城内宿営部隊ノ城内進入ハ十四日一四〇〇トス

四、警備上特ニ留意スヘキ事項左ノ如シ
1　南京市内ニ位置セシムヘキ兵力ハ両警備区域内各々歩兵三大隊ヲ限度トシ其ノ各々大隊長ノ指揮スル二中隊ヲ以テ警備ニ任セシムルモノトス
2　歩兵第三十六旅団長ハ下関掃蕩後同地ニ所要ノ警備兵力ヲ残置スヘシ
3　対空監視哨並対空射撃部隊ヲ設クヘシ
4　宿営部隊ハ努メテ分散シ爆撃ヲ避クルト共ニ給養ヲ便ナラシムヘシ
5　南京城外宿営部隊ハ各々外方ニ対シ警備スルモノトス

〔以下略〕

師団長　谷中将

○六師作命甲第八十五号

南京入城式ニ関スル命令

十二月十四日一一〇〇
於　南京南門外司令部

十二月十七日南京入城式ヲ行ハル
依ツテ左ノ如ク心得ヘシ

一、参加部隊
師団司令部
師団通信隊
歩兵第十一旅団
歩兵第三十六旅団
野砲兵第六聯隊
工兵第六聯隊
輜重兵第六聯隊
独立機関銃第八大隊第三中隊
独立軽装甲第二及第六中隊
野戦重砲兵第十四聯隊第一大隊
独立山砲兵第二聯隊（第二大隊欠）
軍無線電信小隊

二、参加人員
前項部隊中ヨリ隊長ニ於テ選定スヘキ人員別紙附表ノ如シ
但シ軍旗ハ勿論大、中隊長ノ幹部ハ努メテ参加セシメルモノトス

三、整列位置
現場ニ於テ示スモ概ネ中山路上ニ於テ国民政府建物東方一八〇〇米明故宮南側中央附近ヲ右翼トシ中山路上

四、整列順序
師団司令部
歩兵第十一旅団
歩兵第三十六旅団
騎兵第六聯隊
野砲兵第六聯隊
工兵第六聯隊

師団通信隊
輜重兵第六聯隊
独立軽装甲第二、第六中隊
独立機関銃中隊
野戦重砲兵第十四聯隊第一大隊
独立山砲兵第二聯隊
軍無線電信小隊

五、整列隊形
二列横隊トシ徒歩編成トス

六、服装
軍装（鉄帽防毒面ヲ除ク）略綬佩用

七、整列時刻
一三〇〇

八、部隊ノ進入路及進入時刻
午前十一時ヨリ

九、標兵及連絡将校ノ派遣
各隊副官及両翼分隊長ハ中山路上ト中正路ノ交叉点ニ集合（米綱ヲ携行）

十、敬礼
司令官ニ対シ陸軍礼式所定ノ敬礼ヲ行フ

十一、師団長ノ行動
師団長ハ一三〇〇部隊ノ右翼ニ在リ
敬礼後中支那方面軍司令官ニ随行ス
幕僚及各部長ハ師団長ニ随行スルモノトス（乗馬）

十二、国民政府建物内ニ於ケル式ノ要領
イ、国旗掲揚、喇叭「君か代」吹奏　参列者敬礼
ロ、遥拝万歳三唱　堵列軍隊万歳ニ唱和ス
ハ、乾杯
ニ、参列者
司令官ニ随行セルモノ
独立部隊長及堵列ニ加ハラサル将校中参列シ得ルモノ（服装隊伍ニ列セサル軍装）

十三、警戒
中山路南側ハ第六師団ヨリ出ス
所要ノ補助憲兵ヲ以テス（集団憲兵隊長ノ指揮ヲ以テ）中山路北側ヲ派遣軍ノ任トス

十四、解散
部隊ノ解散ハ式場内ノ万歳ニ唱和シタル後トス

師団長　谷中将

下達法
命令受領者ヲ集メロ達筆記セシム

附表第一

師団司令部	五〇名
師団通信隊	三五名
歩兵旅団司令部	一〇名
歩兵聯隊	六〇〇名
騎兵聯隊	八〇名
野砲兵聯隊	三〇〇名
重砲兵大隊	一〇〇名

山砲兵聯隊	七〇名
工兵聯隊	八〇名
輜重兵聯隊	五〇名
独立機関銃中隊	四〇名
軽装甲車中隊	四〇名
軍無線小隊	五名

（以上『第六師団戦時旬報』）

通牒、訓示、作戦経過概要、戦時旬報、戦闘詳報、陣中日誌等の部

第一、中央（陸軍省・参謀本部）

○交戦法規の適用に関する陸軍次官通牒

交戦法規ノ適用ニ関スル件

陸支密第一九八号　昭和拾弐年八月五日

次官ヨリ駐屯軍参謀長宛（飛行便）

今次事変ニ関シ交戦法規等ノ問題ニ関シテハ左記ニ準拠スルモノトス

右依命通牒ス

左　記

一、現下ノ情勢ニ於テ帝国ハ対支全面戦争ヲ為シアラサルヲ以テ「陸戦ノ法規慣例ニ関スル条約其ノ他交戦法規ニ関スル諸条約」ノ具体的事項ヲ悉ク適用シテ行動スルコトハ適当ナラス

二、但シ左ノ件ヲ実施スルハ現下ノ状況ニ於テ当然ノ措置ナルヘシ

1、自衛上必要ノ限度ニ於テ敵性ヲ有スル支那側動産不動産ヲ押収没収破壊シ或ハ適宜処分（例ヘハ危険性アルモノ、長期ノ保存ニ堪ヘサルモノ押収後之カ保管ニ多大ノ経費、労力ヲ要スルモノ等ヲ換価又ハ棄却スル等）シ

「但シ土地建物等ノ不動産及私有財産（市、区、町、村ニ属スル財産ヲ含ム）ハ之ヲ軍ニ於テ没収スルコトハ適当ナラス」

2、自衛ノ為又ハ地方良民等ノ福祉ノ為緊急己ムヲ得サル場合ニ於テ前項ノ物件等ヲ利用スルコト

三、右述ノ外日支兵干戈ノ間ニ相見ユルノ急迫セル事態ニ直面シ全面戦争ヘノ移行転移必スシモ明確ニ判別シ難キ現状ニ於テ自衛上前記条約ノ精神ニ準拠シ実情ニ即シ機ヲ失セス所要ノ措置ヲ取ルニ遺漏ナキヲ期ス

四、軍ノ本件ニ関スル行動ノ準拠前述ノ如シト雖帝国カ常ニ人類ノ平和ヲ愛好シ戦闘ニ伴フ惨害ヲ極力減殺センコトヲ顧念シアルモノナルカ故ニ此等ノ目的ニ副フ如ク前述「陸戦ノ法規慣例ニ関スル条約其ノ他交戦法規ニ関スル諸条約」中害敵手段ノ選用等ニ関シ之カ規定ヲ努メテ尊重スヘク又帝国現下ノ国策ハ努メテ日支全面戦ニ陥ルヲ避ケントスルニ在ルヲ以テ日支全面戦ヲ相手側ニ先ンシテ決心セリト見ラルヽカ如キ言動（例ヘハ戦利品、俘虜等ノ名称ノ使用或ハ軍自ラ交戦法規ヲ其ノ儘適用セリト公称シ其ノ他必要己ムヲ得サルニ非サルニ諸外国ノ神経ヲ刺戟スルカ如キ言動）ハ努メテ之ヲ避ケ又現地ニ於ケル外国人ノ生命、財産ノ保護、駐屯外国軍隊ニ対スル応待等ニ関シテハ勉メテ適法的ニ処理シ特ニ其ノ財産等ノ保護ニ当リテハ努メテ外国人特ニ外交官憲等ノ申出ヲ待テ之ヲ行フ等要ラサル疑惑ヲ招カサルノ用意ヲ必要トスヘシ

五、地方ノ行政治安維持其ノ他官公署等ノ動産不動産ノ保護等ニ関

シテモ軍政ヲ布キ或ハ軍自ラ進ンテ之ニ関与スルヲ避ケ前述ノ趣旨ニ鑑ミ努メテ北支明朗化ニ害ナキ支那側人士ヲシテ自主的ニ之ニ当ラシメ軍ハ現地ニ於ケル唯一ノ治安維持ノ真ノ有能力者トシテ之ニ必要ナル内面的援助ヲ与ヘ其ノ実ヲ挙クルヲ可トス又支那側ノ神社仏閣等ノ保護ニ就テハ勉メテ注意アリ度

六、右諸件ノ実施ニ方リテハ機ヲ失セス之カ具体的報告ヲ提出スルモノトス

追テ右諸件堀内総領事ニモ伝ヘラレ度外務省諒解済

（『陸支密大日記』s13～1）

○日本兵の南京米国大使館侵入に関する陸軍次官電報

陸支密電七五三号

昭和拾弐年十二月廿八日

次官ヨリ松井集団参謀長及同特務部長宛電報（陸支密）

岡本総領事発外務大臣宛電報ニ依レハ南京一米国人宣教師ハ領事館宛左記申越セル趣ナリ

一、二十三日夜武装日本兵少クモ四回南京米国大使館構内ニ来リ自動車三、自転車四、石油ランプ二、懐中電灯数個ヲ掠奪セル外士官ノ引率セル一隊ハ使用人ヲ身体検査シ現金約二百五十弗、時計、金指輪、身廻品ヲ窃取シ又或兵ハ鍵ノ掛レル「パックストン」ノ事務室ヲコヂ開ケントシ銃剣ニテ扉ヲ突刺シ又他ノ二名ハ支那婦人二名ヲ強姦セントスルニ他ノ兵ノ制止ニ依リ未遂ニ終レリ

二、二十四日午前九時日本兵又々構内ニ入リ乗用車二、「トラック」一ヲ又巡警部屋ヨリ麦粉及米袋各一、懐中電灯、現金十一弗八十仙ヲ掠奪セリ

右ニ付日高参事官ノ談ニ依レハ強姦未遂以外ハ我警察ニテ確認セル由ナリ

本件事実トセハ折角解決セル「パネー」号事件ヲ逆転セシムル虞アルヲ以テ外務官憲トモ連絡ノ上至急適宜ノ処置ヲ採ラレ度尚右真相至急回示アリ度

（『陸支密大日記』s13～7）

○軍紀風紀に関する参謀総長要望

中方参第十九号

軍紀風紀ニ関スル件通牒

昭和十三年一月九日

中支方面軍参謀長　塚田攻

両軍参謀長
直轄部隊長　宛
中支監

一、首題ノ件ニ関シテハ各級団隊長ノ適切ナル統率指導ノ下ニ之カ振粛ニ邁往セラレアルヲ信スルモ今回参謀総長宮殿下ヨリ別紙写ノ如キ要望ヲ賜リタルニ就テハ此際軍紀風紀ノ維持振作ニ関シ最大ノ努力ヲ払ハレ度尚軍紀風紀並国際問題ニ関シテハ今後陸軍報告規定ニ準シ其緩急ニ従ヒ電話・電信又ハ文書ヲ以テ迅速ニ其概要ヲ報告シ更ニ詳細ナル報告ヲ呈出セラレ度

右依命通牒ス

（別紙）

顧ミレハ皇軍ノ奮闘ハ半歳ニ邇シ其行ク所常ニ必ス赫々タル戦果ヲ収メ我将兵ノ忠誠勇武ハ中外斎シク之ヲ絶讃シテ止マス　皇軍ノ真価愈々加ルヲ知ル然レ共一度深ク軍内部ノ実相ニ及ヘハ未タ瑕瑾ノ尠カラサルモノアルヲ認ム

就中軍紀風紀ニ於テ忌々シキ事態ノ発生近時漸ク繁ヲ見之ヲ信セサラント欲スルモ尚疑ハサルヘカラサルモノアリ

惟フニ一人ノ失態モ全隊ノ真価ヲ左右シ一隊ノ過誤モ遂ニ全軍ノ聖業ヲ傷ツクルニ至ラン

須ク各級指揮官ハ統率ノ本義ニ透徹シ率先垂範信賞必罰以テ軍紀ヲ厳正ニシ戦友相戒メテ克ク越軌粗暴ヲ防キ各人自ラ矯テ全隊放縦ヲ戒ムヘシ特ニ向後戦局ノ推移ト共ニ敵火ヲ遠サカリテ警備駐留等ノ任ニ著クノ団隊漸増スルノ情勢ニ処シテハ愈々心境ノ緊張ト自省克己トヲ欠キ易キ人情ヲ抑制シ以テ上下一貫左右密実聊モ皇軍ノ真価ヲ害セサランコトヲ期スヘシ

斯ノ如キハ啻ニ皇軍ノ名誉ト品位トヲ保続スルニ止マラスシテ実ニ敵軍及第三国ヲ威服スルト共ニ敵地民衆ノ信望敬仰ヲ繋持シテ以テ出師ノ真目的ヲ貫徹シ聖明ニ対ヘ奉ル所以ナリ

遡テ一般ノ情特ニ迅速ナル作戦ノ推移或ハ部隊ノ実情等ニ考ヘ及フ時ハ森厳ナル軍紀節制アル風紀ノ維持等ヲ困難ナラシムル幾多ノ素因ヲ認メ得ヘシ従テ露見スル主要ノ犯則不軌等ヲ挙ケテ直ニ之ヲ外征部隊ノ責ニ帰ス ヘカラサルハ克ク此ヲ知ル

然レ共実際ノ不利不便愈々大ナルニ従テ益々以テ之カ克服ノ努力ヲ望マサルヲ得ス或ハ冱寒ニ苦シミ或ハ櫛風沐雨ノ天苦ヲ嘗メテ日夜健闘シアル外征将士ノ心労ヲ深ク偲ヒツツモ断シテ事変ノ完美ナル成果ヲ期センカ為茲ニ改メテ軍紀風紀ノ振作ニ関シ切ニ要望ス

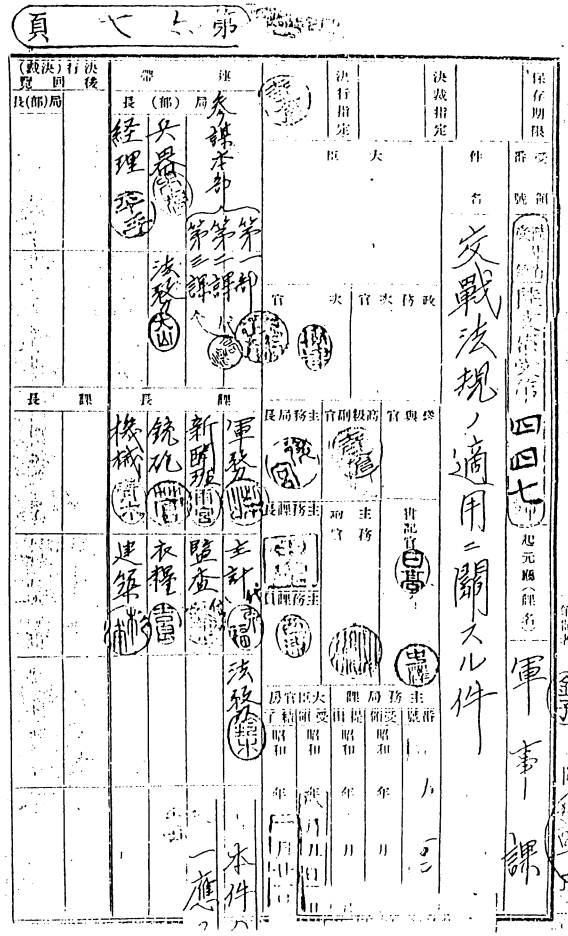
本職ノ真意ヲ諒セヨ

昭和十三年一月四日

大本営陸軍部幕僚長　載仁親王

中支那方面軍司令官宛

（『陸支密大日記』s13～1）



「交戰法規ノ適用ニ関スル件」陸軍次官通牒の主務課員は西浦進34期少佐、主務（軍事）課長は田中新一25期大佐、主務（軍務）局長は後宮淳17期中将である。捺印をご覧ありたい。

第二、中支那（派遣軍）方面軍

○上海方面に於ける報道、宣伝業務の現況

上海方面に於ける報道、宣伝業務は特務部に於て之を行ふ。其編成及業務分担別表の如し

宣伝実施の情況

1　宣伝の重点

対支支那軍の分裂内紛、抗戦意識の消耗反共産主義宣伝

2　宣伝状況

イ　支那軍の戦意消耗の為には

軍閥及上級幹部の不正暴露、督戦隊の暴虐、望郷心誘発、俘虜の優遇等を新聞にて宣伝す、伝単も各種のものを発行

ロ　軍閥の内訌、不正暴露のためには各地軍閥の蠢動を暴露し一般市民の軍閥反対の思想馴致

ハ　反共宣伝

新聞の社説を強化其他の記事及雑誌パンフレットに悉く記載而して共産党の宣伝が人民戦線を巧みに利用し人民戦線の仮面に隠れ其の辣腕を伸しつゝあるに鑑みその仮面を剝ぐに努めあり

ニ　蔣政権の崩壊を策する宣伝は

効果を収めあり、民衆をして真の中国民衆本位の新政権渇望の空気に導く如く論調を進む

新聞雑誌を以てする宣伝状況

イ　新申報

最初は陸軍自ら編輯に当りしが其後漸次人員を増加し目下一日数千部を発行し暮夜陰かに戸毎に配布し又支那全土に郵送し又戦線の後方に爆撃機を以て散布す

本紙は正確なるニュースを伝ふるを以て支那紙デマの反動として珍重せられ時に一部二十円にて取引せられしことすらあり、その正しき戦況報道は支那側の宣伝を破壊しあり

本紙は従来より陸軍のみの指導によるものにして海軍其他は関係せず将来の発展を計るには之れに人と資金とを注ぎ込むと共に分配に飛行機の協力を要す

ロ　救国週報

十月十日より創刊毎週日曜日に配布しあり、支那人の手に入り易く支那新聞の論調切崩しに有効なり

主筆は支那人を用ひ一回五千部を印刷左の如く配布しあり

三千部　海軍の遠距離爆撃機により奥地に

一千部　郵便により支那全土に

一千部　夜間配布

従来は秘密に発行しありしも今後は印刷、配布共に容易となりたり

若し資金と人員とを増加せば日報となすことを得べし

ハ　大陸報（雑誌）

半月刊　仏租界に事務所を置き殆んど全部支那人を用ひて編輯発行せしめあり

秘密裡に連絡指導す、主として知識階級を目標とし正確なるニュース報道にあり不知不識の間に彼等をして反省せしむる

如く指導しあり

ニ　文　友

仏租界に情報蒐集を兼ねて文友社を設置し週刊の小雑誌を発行す、記者は支那人八名を有し専ら軟文学的調子にて下層大衆に読み易くしその中に宣伝を加味す

ホ　蘇聯事情、パンフレット

高谷氏の蘇聯事情

斎藤治雄氏の共産主義と支那国民性

十一月上旬支那民衆に散布

別に現地にて二種以上のパンフレットを作製配布せり

支那新聞に対する対策

上海を完全に占領せざる時期に於ては強迫等の手段を用ひて抗日記事を圧迫せしが今日に於ては租界当局をして取締を行はしめ既に抗日紙十余を廃刊とせり

又之等の抗日紙を市外に出てさる様封殺せり

現在に於ては日本に対し「敵」といふ字を使用せざる様になり表面上は百八十度の旋回をなしたり

尚之等の支那紙を南京側の機関紙となさゞる如くし又不正外人に経営を依託せしめざる如くす、此の如き状況なるを以て今や抗日的論調は皆無とならん

伝単を以てする宣伝

一日平均五六万枚種類二三種を製造し散布しあり

当初専ら支那軍の抗日戦意の消磨に努め盛んに伝単を散布せしが既に九月二十五六日頃より其の効果表れ出したり即ち例へば此の伝単を携へて投降する者には金を与へ或は食を給する等と宣伝せしが投降せし者に之れを携行する者なきも之れを見て来たと云ふ者多きに至れり

今日迄に作製せる伝単の数は二百種に達す

其他東京反共聯盟よりの反共伝単

満洲より中国民に告ぐる声明書等も散布せり

此くして伝単の効果は益々顕はれ俘虜の数も逐次増加し而も従来伝単を拾ふ者は銃殺を恐れ破棄せしに拘らず最近は皆伝単を大切に携行し投降するの状況に達せり

写　真

同盟通信社の写真を利用す、報道部に於ても一定の方針に随ひ宣伝用写真を作製しあり

宣伝と写真に就きては具体的に機関を設け経験を得るを要すべし

映画は専ら同盟を利用しあり

芸術を以てする宣伝

伝単に用ふる絵画は太田天橋之れに任ず又清水洋画家を以て後世に遺すべき西洋絵の作製に任ぜしめあり

其他漫談家西村楽天、作曲家堀内等を派遣し現地を視察し其体験に基き対内宣伝に任ぜしめあり

放　送

1　大東放送局

昨年外国より譲り受けたるものにして五〇ワットの小規模のものにして役に立たざりしを以て目下五〇〇ワットに修正し更らに一キロ「ワット」に改築中なり、放送は主として日本居留民を対手とす、外務省側の出資なり

2　近く一キロの拡大工事進捗せば之れに技術家等を増加するを要す

短波一キロ無線電話

逓信省の管理に属し東京大阪方面への電信電話併用の有線通信、補助機関なり

要すれば之れを宣伝放送に利用するを得

3　上海十キロ放送局

目下新設中にして上海紡績会社の白楊幼稚園を建設地とし日本人クラブにスタヂオを設く概ね十二月一日頃より試験を開始同十日頃放送開始の予定なり

此の放送局は陸軍の出資により逓信省をして建築を担任せしめ海軍をして材料輸送に協力せしめ将来は陸軍が之を管理するものなるも使用に方りては陸軍及外務と協調するものとす

聴取可能地域は南京七五キロの存在する場合概ね蘇州迄にして南京局を破壊せば南京まで到達せしめ得べし

眉州路俘虜収容所の利用

俘虜の模範的取扱をなし外人に見学せしめ又新聞伝単に写真入りにて宣伝しあり

其他の宣伝用機関

報道のため上海合同新聞を利用しあり

同紙は上海日日、上海毎日、上海日報の三紙を合同せし邦字紙なり

然れども各種の原因より朝夕刊は夫々編輯発行の場所を異にし内容も一貫を欠くことあり

上海の新聞を統一する大新聞となさんとする要望あるも各社の負債の整理に約三十万円を要し且爾後の経営費をも補助するを要するの状況にして寧ろ新しきものを創設するを可とするとの意見あり

戦線の兵士に対する宣伝

右も亦甚だ重要なりと認識しあり、戦線よりも「つはもの」を増加支給せられ度旨申込により目下上海に於ては上海合同新聞二千部を専ら兵士用として交付しあり、其他兵に支給するもの左の如し

郷土新聞

第一線各師団衛戍地の新聞を取り寄せ郷里の師団に交付しあり、之れが輸送は軍に於て恤兵費を以て支出す

長江戦塵

戦線の兵士に読ましむる目的にして週刊とし軍自ら之を編輯す、発行部数一万各種の方法にして戦線に送りあり

又戦線兵士に就きて宣伝上留意しあるは戦線より後方への手紙にして之れを点検しあり

又兵士は上海の市中に来り買物をなしデマを飛ばす者あり之れにも注意しあり

内地よりの手紙、慰問袋にも注意を要す慰問袋中に共産党の宣伝ビラを入れることを警戒しあり

発　表

上海報道部の発表は「上海軍発表」を以てする外陸海外務協同して情報委員会の如きものを作り毎日定刻外人記者を集め発表しあり

検　閲

軍機取締に重点を置き従軍記者の通信文検閲に過誤なきを期し

松井集団特務部業務分担表

昭和一二、一一、一四

部長	班及長	担任業務	担任者	摘要
原田少将	総務班 楠本大佐	庶務 経理、給養、衛生 通信業務	谷村少佐 田中嘱託	
		対支政策、外交政治 対支謀略の計画実施 防諜及憲兵の一般的区署 経費の運用	楠本大佐 ケ佐方少佐 ケ岡田主計少佐	
		対蘇対共産党謀略の計画実施	ケ末藤大佐	
	諜報班 末藤大佐	対支諜報、軍事 政治、思想、外交 経済	中井中佐 佐方少佐 岡田主計少佐	
		対支宣伝	金子少佐	
		対蘇 対共産党 対猶太 対「ソ」共産党宣伝 } 諜報	末藤大佐	
	宣伝班 木村大佐	対欧米諜報 対欧米宣伝	木村大佐 永井中佐	
		対内宣伝	ケ金子少佐	

科学諜報班	田内少佐	科学諜報に関する業務	林少佐 中林大尉 井上大尉	
報道班	深堀中佐	班内業務の統制指導 報道機関を通して行ふ宣伝企画 報道業務と作戦諜報謀略の調製 部外殊に海軍、外務関係機関との連絡 邦字新聞の指導 内地新聞に及ぼす反響調査 庶務並軍機保護	深堀中佐 高橋少佐	
		戦況に関する情報蒐集 発表案の作製並発表 従軍記者の取締指導 方面軍並派遣軍司令部との連絡 長江戦陣潭の編輯	馬淵中佐 米花少佐	
		従軍記者通信文写真の検閲前線各兵団 司令部との連絡発表並記事資料の蒐集 戦線に於ける従軍記者写真班の指導	徳本中佐 竹原大尉	

備考

一、本業務担任区分は特務部員充実迄暫行的に定めたるものにして人員の充実後は更に編成及業務の分担を変更す
二、海軍及外務省関係方面との連絡は各班毎に其主任者之を行ふも政策外交等特に重要なるものは部長之を特定の部員に命ずるものとす
三、「ケ」は兼務とす
四、報道班稲葉少佐は負傷入院中

あるも之に任ずる将校不足し完璧を期するを得ざる憾あり

参　考

〔当時の状況を示す参考史料として海軍軍医大佐泰山弘道従軍日誌を掲げる〕

十月十四日

浦東ポイントの敵を砲撃中我が砲弾の破片は米国オーガスタの艦上に飛び散りて彼の一水兵足部に軽傷を負ひたりとて彼より旗艦に抗議し来れりと云ふ午後一時上陸し総領事館に赴き昨日に引続きワツテビル誘導班に加はる先づ陸軍病院船はるびん丸に案内して我が病院船が赤十字条約の規定に基き完全なる艤装を施せるを彼に示しそれより彼を日本人倶楽部に隣れる三元宮なる海軍の俘虜収容所に誘導す此度の戦に於て支那軍の抗日意識強きに加ふるに敵の我軍に投降する疑あるものはその督戦隊により処分せらるゝを以て我が連戦連勝の戦果に拘はらず支那の俘虜を捕ふること少くして今日迄に海軍の手に於て漸く二十六名の敵兵を捕へたるのみなり之を三元宮に収容し安田海軍中佐以下憲兵二名在郷軍人七名をして之を監視保護せしめ国際法の陸戦法規慣例規則中俘虜取扱に関する条項並に一九二六年俘虜待遇に関する条約の規定に遵ひ衣食住より日課医療に至る迄皇軍の寛仁を示し之を実行しつゝあり彼等俘虜は服装に於て態度に於て野卑にしてかゝる軍隊がよくも之迄我に抵抗し来りしものかなと驚かしむされど彼等はよく我が監視に慣れて少しも恐怖の状を見ず檻の如く柵を施せる室内に雑居せり若年兵の一捕虜は自由に柵外にありて嬉々として働き監視兵より菓子を貰ひ受け衆人監視の中に之を貪り食ふ等俘虜とも思はれざる呑気さなりそれより一行は自動車を東部地帯に駆りて田圃の中に孤立する眉州小学校なる陸軍俘虜収容所に赴く附近の田圃の畦道には支那兵の服を纏へる蔑人形多数を認む敵が我を欺く作戦に楠公の千早城に於ける奇智を学びたるかと可笑しくも感ぜらる此処の収容所には二十一名の支那兵を収容す佐藤陸軍中佐を主任としく主計科士官軍医科士官下士官二名憲兵一名衛兵十名をして国際公法上の待遇を行はしむ一行が此処に着くや俘虜一同は校庭に集合し支那下士官の号令にて徒手体操を行ひ我等に供覧す彼等の軍服は黒き羅紗服ありカーキー服あり綿襖の支那服あり実に整一を欠くこと甚し順次彼等の寝室食堂浴場等を巡視するに清潔にして設備も至れり尽せるの感あり病室に入れば室隅に支那軍少尉を収容す彼は赤痢の疑ありて隔離中なりとのことなるが我等を見て顔を顰め睨む容子を為す彼も敵の将校のことゝて敵愾心強きにやと感ぜらるかくて再び車を第一線に最も近くに進め先日漸く敵の撤退せるばかりの市政府附近なる上海市医院に設けられたる陸軍野戦病院を案内す本院は鉄筋混凝土五層楼の大建築なれど我が砲弾の為に壁には処々に大なる孔を穿たれ水道瓦斯の施設は破壊せられ崩れ残れる建物の中に藁を敷きて其の上に毛布を延べ戦傷者を収容せるなり此処にて感じたるは今しも巣立ちたる許りと思はるる数多の陸軍軍医少尉中尉が新しき軍服を纏ひ金筋の肩章も美しきが初陣に来り元気溌溂として指導官の命のままに忙しく治療に従事せることなり嗚呼此の青年軍医の中幾人内地に還るかと思へば感慨無量なり

○中支那方面軍軍律

極秘

中方軍令第一号

中支那方面軍軍律左記ノ通定ム

昭和十二年十二月一日

中支那方面軍司令官　松井石根

中支那方面軍軍律

第一条　本軍律ハ帝国軍作戦地域内ニ在ル帝国臣民以外ノ人民ニ之ヲ適用ス

第二条　左ニ掲クル行為ヲ為シタル者ハ軍罰ニ処ス

一、帝国軍ニ対スル叛逆行為

二、間諜行為

三、前二号ノ外帝国軍ノ安寧ヲ害シ又ハ其ノ軍事行動ヲ妨害スル行為

第三条　前条ノ行為ノ教唆若ハ幇助又ハ予備、陰謀若ハ未遂モ又之ヲ罰ス　但シ情状ニ因リ罰ヲ減軽又ハ免除スルコトヲ得

第四条　前二条ノ行為ヲ為シ未タ発覚セサル前自首シタル者ハ其ノ罰ヲ減軽又ハ免除ス

○中支那方面軍軍罰令

極秘

中方軍令第二号

中支那方面軍軍罰令左記ノ通定ム

昭和十二年十二月一日

中支那方面軍司令官　松井石根

中支那方面軍軍罰令

第一条　本令ハ中支那方面軍々律ヲ犯シタル者ニ之ヲ適用ス

第二条　軍罰ノ種類左ノ如シ

一、死

二、監禁

三、追放

四、過料

五、没取

軍罰ノ軽重ハ前項記載ノ順序ニ依ル

第三条　死ハ銃殺ス

第四条　監禁ハ一月以上トシ囚禁場ニ拘置シ定役ニ服ス　但シ情状ニ因リ定役ヲ免スルコトヲ得

第五条　追放ハ一年以上ノ期間一定地域外ニ放逐ス

第六条　監禁又ハ追放ヲ減軽スル場合ニ於テハ之ヲ一月以下又ハ一年以下ニ降スコトヲ得

第七条　過料ハ一円以上千円以下トス

過料ヲ完納スルコト能ハサル者ハ一日以上ノ監禁ニ付ス

過料ノ言渡ヲ為ストキハ其ノ言渡ト共ニ監禁ノ期間ヲ定メ之ヲ言渡スヘシ

第八条　左ニ記載シタル物ハ之ヲ没取ス

一、犯行ヲ組成シタル物

二、犯行ノ用ニ供シ又ハ供セントシタル物

三、犯行ヨリ生シ若ハ之ニ因リテ得タル物又ハ犯行ノ報酬トシテ得タル物

前項ノ没取ハ其ノ物犯人以外ノ者ニ属セサルトキニ限ル　但シ犯行後犯人以外ノ者情ヲ知リテ其ノ物ニ対スル権利ヲ取得シタル場合ハ此ノ限リニ在ラス

第九条　没取ハ他ノ軍罰ニ附加シテ之ヲ科ス

第十条　二箇以上ノ犯行アルトキハ其ノ軍罰ヲ併科シ又ハ一ノ重キ軍罰ノミヲ科スルコトヲ得

○中支那方面軍軍律審判規則

極秘

中方軍令第三号

中支那方面軍軍律審判規則左ノ通リ定ム

昭和十二年十二月一日

中支那方面軍司令官　松井石根

中支那方面軍軍律審判規則

第一条　軍律会議ハ軍律ヲ犯シタル者ニ対シ其ノ犯行ニ付之ヲ審判ス

第二条　軍律会議ハ上海派遣軍及第十軍ニ之ヲ設ク

第三条　軍律会議ハ之ヲ設置シタル軍ノ作戦地域内ニ在リ又ハ其地域内ニ於テ軍律ヲ犯シタル者ニ対スル事件ヲ管轄ス

前項ノ外上海派遣軍ニ設置シタル軍律会議ハ中支那方面軍ノ直轄管区内ニ在リ又ハ其ノ管区内ニ於テ軍律ヲ犯シタル者ニ対スル事件ヲ管轄ス

中支那方面軍司令官ハ前二項ノ規定ニ拘ラス特定ノ事件ニ付之ヲ管轄スヘキ軍律会議ヲ指定スルコトヲ得

第四条　軍律会議ハ軍司令官ヲ以テ長官トス

第五条　軍律会議ハ審判官三名ヲ以テ之ヲ構成ス

審判官ハ陸軍ノ将校二名及法務官一名ヲ以テ充テ長官之ヲ命ス

第六条　中華民国人以外ノ外国人ヲ審判ニ付セントスルトキハ方面軍司令官ノ認可ヲ受クヘシ

第七条　軍律会議ハ審判官、検察官及録事列席シテ之ヲ開ク

第八条　軍律会議ニ於テ死ヲ宣告セントスルトキハ長官ノ認可ヲ受クヘシ

第九条　軍罰ノ執行ハ検察官ノ指揮ニ依リ憲兵ヲシテ之ヲ為サシム

第十条　本令ニ別段ノ定メナキ事項ハ陸軍軍法会議中特設軍法会議ニ関スル規定ニ依ル

○布　告（案）

我軍ノ作戦地域内ニ於テ左ニ掲クル行為ヲ為シタル者ハ軍律ニ照シ死又ハ重罰ニ処ス

但シ発覚前自首シタル者ハ其ノ罰ヲ減軽又ハ免除セラルヘシ

一、日本軍ニ対スル叛逆行為

二、間諜行為

三、日本軍所属者ニ対シ危害ヲ加フル行為

四、日本軍ノ利用スル鉄道，電信、電話、道路、橋梁、水路等ヲ破壊シ其ノ他交通通信ヲ妨害スル行為

五、日本軍ノ兵器弾薬其ノ他軍用ニ供スル物ヲ盗奪又ハ損壊スル行為

六、日本軍ヲ害スル目的ヲ以テ毒物、細菌ヲ撒布スル行為

七、其ノ他日本軍ノ安寧ヲ害シ又ハ軍事行動ヲ妨害スル行為

八、以上ノ行為ヲ企図シ又ハ教唆若ハ幇助スル行為

○軍律審判規則の改正

極秘

中方軍令第四号

中支那方面軍軍律審判規則中左ノ通改正ス

昭和十三年一月十日

中支那方面軍司令官　松井石根

第二条　軍律会議ハ中支那方面軍、上海派遣軍及第十軍ニ之ヲ設ク

第三条　中支那方面軍軍律会議ハ上海憲兵隊管区内ニ在リ又ハ其ノ管区内ニ於テ軍律ヲ犯シタル者ニ対スル事件ヲ管轄ス

上海派遣軍軍律会議ハ南京憲兵隊管区内ニ在リ又ハ其ノ管区内ニ於テ軍律ヲ犯シタ者ニ対スル事件ヲ管轄ス

第十軍軍律会議ハ杭州憲兵隊管区内ニ在リ又ハ其ノ管区内ニ於テ軍律ヲ犯シタル者ニ対スル事件ヲ管轄ス

中支那方面軍司令官ハ前三項ノ規定ニ拘ラス特定ノ事件ニ付之ヲ管轄スヘキ軍律会議ヲ指定スルコトヲ得

第六条　上海派遣軍軍律会議及第十軍軍律会議ニ於テ中華民国人以外ノ外国人ヲ審判ニ付セムトスルトキハ中支那方面軍司令官ノ認可ヲ受クヘシ

（以上「中支那方面軍軍法会議陣中日誌」『続・現代史資料』6軍事警察所収）

○中支那方面軍司令官訓示

極秘

訓　示

湖東会戦ニ引続キ勇猛果敢ナル追撃ニ依リ一挙首都南京ヲ攻略シ茲ニ歴史的壮挙ヲ完成シタルニ方リ重ネテ優渥ナル　聖旨ヲ辱ウシ感激措ク所ヲ知ラス

不肖石根乏ヲ以テ克ク任務ヲ達成シ上　聖明ニ対ヘ奉ルヲ得タルハ実ニ参加将士ノ力戦奮闘ニ俟ツモノニシテ深ク其労ヲ多トスルモノナリ

然リト雖時局ノ前途ハ遼遠ニシテ軍ノ任務ハ愈々重ク秋毫ノ倦怠ヲ許サス将兵相戒メテ一層奉公ノ誠ヲ竭サンコトヲ期スヘキナリ

全軍須ク統率ノ真義ヲ確認シ一層軍紀風紀ヲ振粛シ経験ニ基ク教育訓練ニ力メ戦力ノ充実ヲ図リ以テ次期作戦準備ニ遺憾ナキヲ期スルト共ニ警備ヲ厳ニシ軍機保護ヲ密ニシ治安維持ヲ全クシ以テ不逞ノ徒ニ蠢動ノ余地ナカラシムヘシ

若夫レ所在民衆ニ対シテハ東亜百年ノ計ニ稽ヘ皇軍ノ伝統ニ則リ悪政ニ呻吟セル彼等ニ寧ロ憐愍ノ情ヲ加ヘ克ク指導啓蒙スル等宣撫宜シキニ協フヲ要ス

抑々皇軍ノ操守ハ戦事ノ繁閑ニ依リ差異アルノ理ナシ全軍将兵相戒飭シ戦果ノ維持拡大ニ最善ノ努力ヲ傾到シ以テ皇軍ノ威信ヲ顕揚スヘキナリ

右訓示ス

昭和十二年十二月十八日

中支那方面軍司令官　松井石根

第三、上海派遣軍

その一　第十六師団

○第十六師団「状況報告」

状況報告　　昭和十二年十二月二十四日

一、師団ノ現況

師団ハ白茆口附近上陸以来悪路ト上陸遅延ノ為久シク後方部隊ノ到着ヲ見サリシカ南京入城ノ後十二月十七日野砲兵第二十二聯隊聯隊段列ノ到着ヲ以テ一先ツ師団全力ヲ南京附近ニ集結シ得タリ

目下軍命令ニ基キ夫々新配置ニ移動中ニシテ二十五日迄ニハ概ネ其配置ニ就キ得ル見込ナリ

其配置ノ概要次ノ如シ

南京地区東部警備隊（歩兵第十九旅団（一大隊欠）、独立軽装甲車第八中隊、騎兵第二十聯隊）ハ其主力ヲ湯水鎮附近ニ其一部ヲ句容天王寺、淳化鎮、土橋鎮、湖熟鎮、青竜山附近ニ配置シ概シテ憤頭附近南北ノ山系以東地区ノ又

南京地区西部警備隊（歩兵第三十旅団、独立機関銃第二大隊）ハ主力ヲ南京ニ、一部ヲ江寧鎮、秣陵関、麒麟門、堯化門、竜潭鎮附近ニ配置シ憤頭南北山系以西地区ノ警備並安定確保ニ任セシメ爾余ノ主力ハ南京及其附近兵営学校ニ集結シ爾後ノ作戦ヲ準備中ナリ上陸以来各部隊ノ戦死傷者総数合計二、一九四（内将校八八名）名ナルモ予メ補充シアリタル補充員ヲ以テ之カ欠員ヲ補フトキハ兵ニ於テ尚若干ノ過剰員ヲ有スル現況ニシテ幹部ノ欠員補充射耗弾薬ノ充実ヲ見ルトキハ概ネ現在ノ態勢ヲ以テ作戦行動ヲ執ルニ何等ノ支障ヲ認メス

二、軍紀風紀

概シテ良好ナルモ戦闘直後トテ一般ニ粗放ナルモノ少カラス更ニ一段ノ緊縮ヲ期セントス

二、教　育

本集結間特ニ教育訓練ニ意ヲ用ヒ戦闘間ノ不備ヲ補ヒ次期作戦ニ遺憾ナカラシメンコトヲ期ス

四、兵　器

上陸以来数次ノ戦闘及困難ナル地形ニ遭遇セシ為目下相当数ノ損傷兵器アルモ直後ノ戦闘遂行ニハ大ナル支障ナキモノト認ム可及的速ニ戦力ヲ回復シ爾後ノ作戦ニ支障ナカラシムルヲ主眼トシ着々之カ整備中ニシテ一月中旬迄ニハ全兵器ノ整備ヲ完了スル見込ナリ

五、経　理

今次作戦間兵馬ノ給養ハ現地物資ヲ以テ之ニ充ツルノ主義ヲ採リ以テ迅速ナル機動ニ応セント企図セシカ幸ニ富裕ナル資源ニ依リ概ネ良好ナル給養ヲ実施シ得タリ

南京入城ト共ニ諸給與漸次常態ニ復シツヽアリ

六、衛　生

出動以来北支ニ引続キ中支ニ転戦シ機動劇シク而モ非衛生的環境ニ於テ給与休養ヲ顧慮スル暇ナカリシモ将兵一同志気愈々旺盛ニシテ衛生一般ノ成績ハ概ネ良好ニ保持シ得タリ

中支上陸以来戦死五〇五名（内将校三〇名）戦傷一、六八九名（内将校五八名）平病七一三名ナリ

各病院入院患者ハ総計一、七九八名（他師団ノモノヲ含ム）ニシテ内戦傷一、三一一名（内将校三一名）平病四八七名（内将校五名）トス

七、馬　衛　生

北支出発以来長途ノ鉄道船舶輸送並揚陸遅延ノ為馬匹ノ疲労著シク加フルニ上陸直後降雨打続キ泥濘ノ悪路ニ於テ激動ニ服セル為栄養衰微シ過労馬多発セリ

然レ共爾後天候回復シ且幹部以下馬ノ保育ニ努メタル結果馬匹衛生成績ハ漸次向上シツヽアリ

而シテ大連出発以来ノ損耗馬ハ戦死百十三頭平病ニ依ル廃斃馬約三百三十頭計約四百四十余頭ニ達スルモ現地徴発支那馬ニ依ル補充及師団内ノ彼此融通ニ依リ馬匹総能力ハ著シキ減退ヲ見ルコトナク各部隊ノ行動ニハ支障無キ状態ニアリ

之ヲ要スルニ将兵一同志気愈々旺盛ニシテ新任務ニ向ヒ邁進シツヽアリ

将来益々志気ヲ緊張シ警備ノ重任ヲ完フスルト共ニ今次集結ノ好機ヲ利用シ資材ヲ整備シ教育訓練ヲ精到ニシ以テ次期作戦ニ万遺算ナキヲ期セントス

○第十六師団「作戦経過ノ概要」

昭和十三年一月十日

作戦経過ノ概要

第十六師団ハ第二軍ニ属シ北支那ニ於ケル平地方面ノ作戦一段落ヲ告クルヤ石家荘ヨリ大連ニ出テ乗船ト共ニ上海派遣軍ニ転属セラル十一月九日ヨリ数船隊トナリ逐次大連港ヲ出帆シ十一月十二日呉淞沖ニ達ス師団ハ十三日払暁白茆口附近ニ上陸シ一部ヲ以テ白茆口附近ヲ占領シ主力ヲ以テ支塘鎮ニ向ヒ前進スヘキ軍命令ヲ受領ス

当時嘉定及南翔附近ノ敵ハ退却ヲ開始セルモノヽ如ク我第十六師団主力ハ十一日夕既ニ太倉南方蘇州河ノ線ヲ越ヘ花家橋鎮ニ達シ崑山附近ニハ西方ニ潰走中ナル大縦隊ヲ見ル

師団ハ重藤支隊ニ引続キ十三日第一船隊タル歩兵第三十旅団（第三十八聯隊欠）ヲ基幹トセルモノヲ以テ佐々木支隊トシ徐六涇口附近揚子江岸ニ上陸シ一部ヲ以テ白茆口附近ノ敵ヲ駆逐シ其主力ハ速ニ支塘鎮ー常熟道ニ進出シテ敵ノ退路ヲ遮断セシム

斯クテ佐々木支隊ハ十四日支塘鎮北方張家喬附近ニ進出シ退却掩護ニ任スル四、五千ノ敵ヲ撃破シ夜間追撃ヲ続行シテ多大ノ損害ヲ与ヘツツ十五日常熟東方約四粁附近ニ進出シ石墩湯庄附近「トーチカ」ヲ有スル既設陣地ニ拠レル敵ト相対ス

十一月十五日師団ハ速ニ常熟ヲ攻略シ爾後常熟ー楊尖鎮ー無錫道ニ沿フ地区ヲ無錫方向ニ敵ヲ追撃スヘキ軍命令ニ接シ十八日ヨリ佐々木支隊ヲシテ本道正面ヨリ敵ヲ攻撃セシムルト共ニ上隊ヲ完了セル部隊ヲ逐次戦場ニ推進ス

上陸地点ヨリ戦場ニ至ル間車輛ヲ通スル道路ナク加フルニ連日ノ

降雨ノ為泥濘ノ悪路ト化シ部隊ノ進出意ノ如クナラス

此頃師団砲兵全ク参加ノ見込ナク第十一師団及軍砲兵ノ協力ヲ得テ本攻撃ヲ実行セリ

僅ニ戦場ニ進出セル歩兵一大隊ヲシテ右翼ヨリ敵ヲ包囲セシムルト共ニ他ノ一大隊ヲ以テ水路ヲ利用シ敵ノ退路ヲ遮断セシム

十九日夜半ヨリ師団当面ノ敵ハ退却ヲ開始ス第一線各隊ハ夜間敵ニ尾シテ之ヲ急追シ他方水路ニヨリ敵ノ退路ニ迫ラシメシカ敵ハ混乱状態トナリ潰走セリ

我追撃隊ハ安鎮附近並吼口山附近ヲ占領セル新鋭ナル敵ヲ駆逐シ二十二日夕東亭鎮ノ前方約三百米ニ進出ス

当時師団ハ歩兵部隊ハ之ヲ集結シ得タルモ師団砲兵ハ僅ニ四門到着シタルニ過キス後方補充機関ハ未タ上陸ヲ完了セス

東亭鎮附近ハ鉄条網ヲ以テ囲ラサレタル軽易ナル「トーチカ」ヲ有スル既設陣地ニシテ「クリーク」縦横ニ流レ我部隊ノ行動ヲ妨害スルコト大ナリシヲ以テ二十三日ヨリ一部ヲ以テ本道方面ノ敵ヲ攻撃セシムルト共ニ主力ハ遠ク其右翼ヲ包囲迂回セシム然ルニ包囲ニ任セシ部隊モ又到ル処ニ於テ掩蓋機関銃座ヲ有スル数線ノ既設陣地ト「クリーク」ノ障碍ニ遭遇シ攻撃ノ進捗意ノ如クナラサリシカ右翼方面ノ部隊ハ二十三日夕来昼夜連続猛進ヲ敢行シ無錫ー江蔭街道ニ近ク進出シ又左方第十一師団ノ歩兵ノ突進ニ依リテ二十五日夕ニハ本道ノ敵ハ三面包囲ニ陥ル斯クテ本道方面ノ大隊ハ砲、工、軽戦車等ノ協力ノ下ニ昼間突撃ヲ敢行シ或ハ夜襲ヲ決行シテ逐次敵陣地ヲ蚕食シ二十六日早朝本道ノ敵ノ退却ニ尾シ第一線ノ各隊ハ敵ノ小抵抗ヲ排除シツツ追撃ニ移リ午後二時三十分完全ニ無錫ヲ占領セリ

師団ハ直チニ草場少将ノ指揮スル歩兵三大隊、軽戦車隊、野砲兵一大隊ヲ追撃隊トシ京滬鉄道ニ沿フ地区ヲ常州ニ向ヒ敵ヲ追撃セシム

追撃隊ハ第十一、第九師団方面ヨリ退却シ退路ヲ失ヒテ無錫市内ニ充満セル敵ヲ掃蕩シ或ハ潰走中ノ敵ニ多大ノ損害ヲ与ヘツヽ追撃シ途中横林鎮及常州東方四粁附近ニ於ケル敵ノ抵抗ヲ排除シ二十九日午前十一時四十分常州ヲ占領セリ

当時師団ハ一部ヲ以テ丹陽ヲ占領セシメ主力ハ常州附近ニ集結シ爾後ノ作戦ヲ準備スヘキ軍命令ヲ受領シアリタルモ軍全般ノ態勢ハ師団全力ヲ以テ丹陽附近ニ進出スルノ必要ヲ認メ追撃隊ヲシテ丹陽ニ師団主力ハ其後方ヲ前進ス追撃隊ハ奔牛鎮、呂城鎮ニ於ケル敵ノ抵抗ヲ排除シ十二月二日丹陽附近ニ拠レル敵ヲ完全ニ包囲、殲滅セリ

之ヨリ曩師団ハ一部ヲ以テ白兎鎮附近ヲ占領シ主力ハ丹陽附近ニ兵力ヲ集結シ南京攻撃ヲ準備スヘキ軍命令ヲ受領セシカ時恰モ南京ノ敵兵南方ニ退却シツツアルノ情報ニ接シ一挙南京ニ向ヒ追撃スヘキヲ命セラル

師団ハ直ニ追撃隊ヲ以ツテ追撃ヲ継続セシムルト共ニ主力ヲ以テ五日丹陽出発南京ニ向ヒ追撃ス

斯クテ師団ハ句容東方及同地西北方ニ於ケル敵ノ抵抗ヲ排除シツツ七日湯水鎮南方地区ニ進出ス敵ハ湯水鎮南方ヨリ其西南方高地一帯ニ陣地ヲ構築シ執拗ナル抵抗ヲ試ミタルモ佐々木少将ノ指揮スル一支隊ヲ遠ク北方山地ヨリ敵ノ背後ニ迂回セシメ一方草場少将ノ指揮スル追撃隊ハ其主力ヲ以テ梅塘附近敵陣地ニ白昼突入シ壮烈ナル白兵戦ノ後之ヲ奪取ス

此間師団主力ハ句容ー湯水鎮ー南京道ニ沿フ湯水鎮湯山憤頭等ノ陣地ニ拠ル敵ヲ逐次駆逐シツヽ九日夕下麒麟門附近ニ進出シ南京東

側陣地ニ触接セリ

師団ハ十日ヨリ右翼隊（歩兵第三十三聯隊）ヲ以テ紫金山ヲ左翼隊（歩兵第十九旅団主力）ヲ以テ下麒麟門―中山門道ニ沿フ地区ヲ攻撃セシメ更ニ佐々木少将ノ指揮スル右側支隊ヲ以テ紫金山北方地区ヨリ下関方向ニ前進シ敵ノ退路ヲ遮断セシム

十二月十日右翼隊ハ紫金山▲二二七高地ヲ奪取シ続テ其戦果ヲ拡張シツ、▲三三六・〇東側高地ヲ奪取ス左翼隊ハ同日中央運動場附近ニ進出シ続イテ翌十一日歩兵第二十聯隊ハ紫金山南方地区ニ於ケル重要支撐点タル西山ニ突入シ敵ノ執拗ナル抵抗ト逆襲トヲ排除シテ同地ヲ占領セリ翌十二日右翼隊ハ勇戦奮闘ノ後敵ノ堅塁紫金山第一峯ヲ抜キテ南京ニ於ケル敵ノ死命ヲ制シ左翼隊タル歩兵第二十聯隊ハ同夜遺族学校附近敵陣地ニ夜襲ヲ敢行シ之ヲ奪取スルヤ一挙敵ノ牙城南京城ニ迫リ十三日午前三時十分中山門ヲ占頭セリ

斯クテ師団各隊又各当面ノ敵ヲ駆逐シ南京城ハ全ク我手ニ落ツルニ至レリ右側支隊ハ堯化門岔路口等ニ於テ優勢ナル敵ヲ撃破シツ、十三日下関ニ進出シ敵ノ退路ヲ遮断シ我主力ト相俟チテ之ヲ捕捉シ殲滅的戦果ヲ収メタリ

上陸以来各部隊戦死傷者ノ総数合計二、一九四（内将校八八）名ニシテ戦死総数五〇五（内将校三〇）名ナリ

我師団ノ敵ニ与ヘタル損害ノ主ナルモノ戦死ノミニテ五万ニ及ヒ鹵獲兵器ノ主ナルモノ重砲一二、野山砲一三、迫撃砲六〇、高射砲二四、機関銃三九〇、軽機関銃二五〇、小銃四、五〇〇、戦車三ニシテ其他小銃弾薬等ニ至リテハ枚挙ニ遑アラス

○（申継書）

南京ニ於ケル申送リ要点

第十六師団参謀長中沢三夫

其一　警備

一、地区ノ区分及配備並南京市内ノ配備ハ一六師作命甲一八八号ノ如シ

一、軍内ノ軍紀風紀ヲ厳正ニセンカ為ニハ警備司令官ノ区処権ヲ厳格ニ行使シ方面軍各軍直轄部隊ノ優越感ヲ打破スルト共ニ通過軍隊ノ行動ヲ監視スルコト必要ナリ

一、地区内一般ノ状況ハ平穏ナルモ十日許リ前江寧鎮東方ニ於テ百名近ク敗残兵我連絡兵ヲ襲撃シタル事件アリ

概シテ秣陵関、漂水方面我配備ノ尖端地方ニ注意ノ要アリ

一、南京市内ハ漸ク兵民ヲ分離シ概シテ（後説ノ如ク全部トハ云ヒ得ス）民ノミトナレリ

将来更ニ戸口調査ヲ完了シ武器ノ捜索押収ト共ニ出入者ノ監視ヲ厳格ナラシムレハ心配無キニ至ルヘシ―此件逐次実行ヲ望ム

一、首都ヲ占領シタルヲ以テ重要文書ヲ押収スルコトニ著意シ目ニ付ク様ノ箇所ニ在リシモノハ既ニ軍ニ提出済ナルモ将来ハ要人私宅ヲ更ニ捜索スル要アルヘシ　但シ之レハ捜索ノ意ヲ小時間テハ駄目ナルヲ以テ将校等居住シ暇々ニ探出スルヲ可トセン―逐次実施セラレンコトヲ希望ス

要人宅調査別冊ノ如シ（詳細ハ師団ノ従来使用セル詹栄光承知）

其二　敗残兵ノ掃蕩

一、各守備隊ハ数回ニ亘リ担任地区内ノ掃蕩ヲ実施シ殆ント其影ヲ見サルモ時々三・五ノ敗残兵ヲ捕獲シツ、アリ

示威、徴発、行軍等ノ目的ヲ兼ネ不断実行セラル、ヲ可トス

一、南京市内ノ敗残兵ハ避難民中ニ混淆シ占領当初大イニ手ヲ尽シテ分離ヲ行ヒ概ネ之ヲ終リタルモ尚完全ト謂ヒ難シ

今後ハ密偵ヲ使用シテ摘出スルヲ可トス

先日モ八十八師ノ大隊長ヲ捕縛セリ

一、特ニ注意スヘキハ各国外交機関内ニ隠匿シアル相当階級ノ人物アルコトナリトス　右八十八師ノ大隊長ノ自白ニヨレハ米大使館内ニ団長及営長尚隠レアリ　連レ出シノ上逮捕ヲ要ス

其三　隠匿武器及軍需資材ノ蒐集

一、武器一切ハ没収シツ、アリ　南京市外ハ殆トナシ

然シ南京市内ニハ家宅捜索セハ尚出テ来ルモノト判断ス　時々敗残兵等ヲ捕獲シ自告ヲ迫ルト隠匿箇所ヲ云フモノアリ

市内ノ戸口調査ト同時ニ更ニ実施スルノ要アルヘシ

一、軍需資材ハ南京市内ノ目星シキモノハ全部押収倉庫等ニ収メタリ

大街道ヨリ離レタル側方ニ尚弾薬、鉄条網材料遺棄セラレアリ

逐次蒐集セラレアリ

其四　戦場掃除

一、目ノ付ク限リニ於テハ殆ト完了ノ域ニ在リ

然レトモ早々ノ間ニ行ヒタルヲ以テ夏期ニナルト或ハ汚穢ニ至ルニ非スヤト思ハル　尤モ是等ハ戦場トナリシ附近ノミナルヲ以テ処置ニ大ナル困難ナカルヘシ

一、危険物ノ除去ハ努メタルモ紫金山周囲ノ道路ニ地雷多ク道路ハ路面以外ニ出テサル様注意アリ度

又明ノ孝陵附近ハ尤モ地雷多キ地区ナリ進入セサル様標識シ置キタル筈ナリ

一、中山陵ハ悪戯ヲスルモノ多ク恥辱ニ付見物者ヲ制限シツ、アリ

将来ニ必要ナカラン

其五　宣武工作

一、系統ヲ警備系統、統帥系統内ニ入ル、ヲ可トス

師団ニ於テハ警備司令官ニ全部区処セシメタリ

一、難民処理ニ付テハ一六師作命乙第一号ノ要領ニヨレリ

目下兵民ノ分離ヲ漸ク終リタル程度ノ所ナリ

一月一日成立セル自治会ヲ利用シ之ヨリ逐次本工作ニ入ラントス

其六　其他

一、支那人医師詹栄光ハ師団ノ密偵トシテ功績アリ　爾後引続キ使用セラレ度　保護モ願度

（『中沢三夫大佐関係資料』第三）

○歩兵第三十八聯隊『戦闘詳報』第十一号

自　昭和十二年十二月十二日　至　同十二月十三日

十字街及興衛和平門及下関戦闘詳報

㈠、戦闘前ニ於ケル彼我形勢ノ概要

1、敵ハ堯化門附近ノ陣地ヲ固守シタモ前日来ノ猛攻撃ニ対シ該地附近一帯ノ陣地ヲ捨テ、主力ハ南京方向ニ敗走シ又一部ハ

東北方ニ於テ我ヲ牽制スル為カ陣地ヲ増築シアルモノヽ如シ

2、佐々木支隊ハ依然右側支隊ニシテ堯化門ニ進出シ爾後敵ヲ南京北方地区ニ急追セン事ヲ企図シツヽアリ

3、聯隊主力ハ右側支隊命令ニ基キ玄武湖北側地区ニ転進シ敵ヲ殲滅セントス第二大隊ハ支隊ノ左側衛トナリ盆路口北側高地ヲ占領シアリ　又第三大隊ハ支隊ノ後衛トナリ堯化門北方地区ノ敵ヲ撃滅掃蕩ヲ実施シツヽアリ

(二)、戦闘ニ影響ヲ及シタル気象地形等ノ状態

1、日出時刻ハ概ネ午前六時五十分ニシテ連日好天候ニシテ戦闘行動ニ多大ノ好況ヲ与ヘタリ

日没時刻ハ午後六時頃ニシテ夜間ハ星明アリテ目視困難ナラサルモ四周ニ山ヲ巡ラシテ稍透視困難ナリ

2、地形及住民

興衛及十字街附近ハ敵ノ平素ニ於ケル演習地帯ニシテ巧妙ナル既設陣地アリ地形大波状ヲナシ防禦ニ適ス又小部落ノ點在ヲ見ルモ全ク住民ハ居住シアラス敵ハ之等ノ家屋ヲ殆ト焼却シ退却セリ又道路ハ殆ント阻絶シアリテ車馬ノ通過不能ナリ

(三)、彼我ノ兵力其ノ状況

1、敵ノ兵力明瞭ナラサルモ興衛附近約五、六百名ニシテ十字街附近ノモノハ更ニ有力ナルモノヽ如シ

野砲及迫撃砲数門ヲ有ス

2、交戦セシ敵ノ団隊号ハ第三十六師及第四十八師ニ属スルモノ並ニ一部ハ教導総隊ナルカ如シ

(四)、各時機ニ於ケル戦闘経過

1、戦闘経過ノ概要別紙要図ノ如クニシテ堯化門附近ノ戦闘ニテ敵ノ陣地ヲ奪取シタル後十二月十二日午後〇時堯化門西北方高地ニ於テ左ノ右側支隊命令ヲ受ケ聯隊主力ハ前衛トナリ直ニ前衛命令ヲ下シ午後一時三十分堯化門出発岡下ヲ経テ馬営—興衛ニ向ヒ前進ス

岡下—興衛間ノ道路ハ野砲ノ通過稍々困難ナル為メ歩兵ハ補修ヲ実施シツヽ前進シ午後六時前衛本隊ハ興衛村ニ達ス

此ノ間敵ノ砲兵熾ニ我ヲ射撃シ其ノ行動ニ妨碍ヲ与ヘタリ

〔右側支隊命令は五四三頁に掲載〕

前衛命令

十二月十二日午後一時〇五分
於　堯化門北方四〇〇高地

一、前衛ハ右側支隊命令ニ基キ堯化門—岡下—馬営十字街道ヲ十字街ニ向ヒ前進セントス

二、第一大隊（第二第三中隊欠）工兵一小隊ハ前兵トナリ午後一時二十分現在地ヲ出発支隊ノ進路ヲ十字街ニ向ヒ前進スヘシ前衛本隊トノ距離五〇〇米

三、本隊ハ左記行軍序列ニ徒ヒ前兵進路ヲ前進スヘシ

左　記

歩兵聯隊本部　第二中隊　聯隊砲中隊　速射砲中隊

軽装甲車　第八中隊

四、通信班ハ一部ヲ残置シ既設線撤収ノ後追及スヘシ

五、聯隊小行李ハ弾薬補充ノ後速射砲ノ後方ニ入ルモノトス

六、余ハ前衛本隊ノ先頭ヲ行進ス

前衛司令官　助川大佐

2、午後六時右側支隊ハ興衛ニ達シ先遣大隊ハ正午頃ヨリ何家凹附近ニ於テ敵ヲ攻撃中ナルコトヲ知ル

午後六時四十分ニ至リ支隊長ハ左ノ命令ヲ下セリ　依テ前衛司令官ハ右支隊命令ニ基キテ該地附近ニ兵力ヲ集結シ明日ノ攻撃準備ヲナサンカ為メ次ノ命令ヲ与ヘタリ

〔右側支隊命令は五四四頁に掲載〕

前衛命令

十二月十二日午後六時三十分
於　興衛村

一、敵ハ十字街東西ノ高地ヲ南北ニ亘リ二線ニ陣地ヲ設備シ迫撃砲数門並ニ野砲ヲ有スルモノヽ如シ

其ノ第一線陣地ノ右翼ハ十字街東南方約千米ノ森林附近ニ其ノ左翼ハ詳ナラサルモ姜比庄附近ニ在ルモノヽ如シ先遣大隊タリシ歩兵第三十三聯隊第一大隊（第二中隊欠）何家凹ヨリ標高五七・四高地ニ亘ル線ニ展開シ正午以来敵ヲ攻撃中ナリ支隊ハ先遣大隊ノ後方ニ兵力ヲ集結シ明十三日ニ於ケル攻撃ノ準備ヲス

二、前衛（工兵小隊ヲ欠キ歩兵第三中隊ヲ加ヘ先遣大隊ヲ併セ指揮ス）ハ明十三日敵ヲ攻撃スル目的ヲ以テ兵力ヲ王家碾興衛附近ノ地区ニ集結シ前面ノ敵情地形特ニ我カ右翼正面ノ敵情地形ヲ捜索セントス

敵退却スル場合ニ於テハ機ヲ失セス追撃ニ移ルノ企図ヲ有ス

三、前衛ハ王家碾附近ニ兵力ヲ集結シ何家凹方面ヨリ前面ノ敵情地形ヲ捜索スヘシ

又敵陣地ノ右翼方面ヲモ捜索スルヲ要ス

四、先遣大隊タリシ歩兵第三十三聯隊第一大隊ハ現ニ進出セル線ヲ確保シ攻撃ノ目的ヲ以テ前面ノ敵情地形ヲ捜索スヘシ

本夜敵ノ退却ニ当ツテハ之ニ尾シテ追撃スル事肝要ナリ

五、前衛本隊ハ興衛附近ニ露営ス

露営司令官荘司大尉トス

聯隊砲中隊砲中隊ハ明十三日払暁後ニ於ケル射撃諸準備ヲナスヘシ通信班ハ旧先遣大隊前衛及旅団聯隊本部間ニ電話連絡スヘシ

六、本夜ノ給与ハ携帯セルモノヲ使用ス

七、大行李ハ迫撃砲隊ニ続行シ其ノ先頭ヲ以テ李家庄附近ニ待機スヘシ

八、左側衛大隊ハ日没後転進シ興衛村東北地区ニ兵力ヲ集結スル筈

九、野砲兵大隊（一中隊及迫撃砲小隊）ハ明十三日払暁迄ニ興衛村ニ到着スル筈

十、支隊司令部ハ馬営ニ在リ

十一、余ハ興衛村三叉路ニ在リ午後十時命令者ヲ差出スヘシ

前衛司令官　助川大佐

3　支隊当面ノ敵ハ尚頑強ニ抵抗シツヽアリ右翼隊ハ昨夕以来紫金山ヲ攻略シ又各兵団ハ何レモ南京城ニ肉迫シツアルノ情報ヲ受ク当聯隊ハ明日ノ払暁攻撃ノ為メ左記支隊命令ヲ受ケ十三日午前三時三十分聯隊ノ攻撃命令ヲ下シ午前五時行動ヲ開始セリ

〔支隊命令は五四四頁に掲載〕

歩兵第三十八聯隊命令

十二月十三日午前三時三十分
於　興衛村

一、支隊当面ノ敵ハ尚頑強ニ抵抗シツヽアリ

其ノ一部ノ斥候ハ興家村附近ニ出没セリ我カ師団ノ右翼隊ハ昨十二日夕刻紫金山第一峰ヲ攻略シ続テ天文台高地ヲ攻撃中荻洲兵団ノ一支隊ハ鎮江方面ヨリ西進シ烏竜山砲台ヲ又柳川兵団ニ属スル一支隊ハ蕪湖ニ於テ揚子江ヲ渡河シ南京対岸浦口ニ向ヒ近迫シツヽアリ吉住兵団ハ南京城東南角ニ又藤田兵団ハ南門角ニ夫々肉迫シ敵ヲ攻撃中ナリ支隊ハ今十三日重点ヲ左方ニ保持シツヽ、敵ノ中央ヲ突破シ下関方面ニ進出ス盆路口西方約一粁標高一四七・一高地ハ我歩兵約一中兵ヲ以テ確実ニ之ヲ占領シ在リ

一、聯隊（旧前衛ノ兵力ニ迫撃砲小隊ヲ配属セラル）ハ払暁ニ攻撃ヲ準備天明後攻撃ヲ開始シ一部ヲ以テ「クリーク」北側地区ヨリ主力ヲ以テ十字街東側高地ヲ攻略セントス聯隊ノ進出線ハ紅山西方約七百米ノ高地線トス

三、歩兵第三十三聯隊第一大隊ハ（欠如部隊旧ノ如シ）標高五七・七高地庄家碾南端高地標高一〇三・九高地和平門西北方社家正北端ヲ連ヌル線以北ニ展開シ概ネ現在占有セル地線ニ展開シ午前七時迄ニ攻撃ヲ準備スヘシ但シ一部ヲ「クリーク」北方地区ニ派遣シ敵ノ左側背ヲ攻撃セシムヘシ

四、軽装甲車第八中隊ハ天明迄ニ出発ノ準備ヲ整ヘ現在地点ニ待機スヘシ

五、歩兵第三十八聯隊第一大隊（第三中隊欠）ハ左第一線トナリ前項記載ノ戦闘地境以南ノ地区ニ於テ概ネ歩兵第三十三聯隊ノ現ニ進出シアル地線ニ午前七時迄ニ展開シ攻撃ヲ準備スヘシ

第一線両大隊ノ攻撃前進ノ時機ハ午前八時ト予定スルモ別命ス歩兵第三十三聯隊ノ左第一線部隊ノ地域ニアルモノハ午前八時迄ニ其ノ所属ニ復帰セシムヘシ

六、聯隊砲中隊ハ竜家王附近ニ午前七時迄ニ陣地ヲ占領シ払暁以後射撃ヲ開始シ得ル如ク準備スヘシ

七、速射砲中隊ハ両大隊ニ分属セラル、場合ヲ顧慮シ標高四七・四附近及単家庄東方高地附近ニ午前八時迄ニ陣地ヲ偵察スヘシ

八、迫撃砲小隊ハ単家庄東方地区ニ陣地ヲ占領シ聯隊ノ攻撃ニ協力シ得ル如ク午前八時迄ニ諸準備ヲ完了スルヲ要ス

九、通信班ハ両大隊ト聯隊本部旅団ト聯隊本部間ヲ午前七時三十分迄ニ電話連絡スヘシ

十、歩兵第三中隊、速射砲中隊ハ予備隊トス午前七時マテニ竜家王東側ニ至ルヘシ

十一、後衛ハ前任務ヲ続行スル筈

十二、野砲兵大隊（第三中隊欠）ハ明十三日払暁頃興衛村附近ニ陣地ヲ占領スル筈

十三、旅団予備隊ハ午前九時竜家王東側谷地ニ至ル筈

十四、衛生隊ハ興衛村ニ開設セラルル筈

十五、又第一野戦病院（半部欠）ハ堯化門ニ開設セラル

歩兵弾薬補給所ハ仙鶴門鎮トス

十六、余ハ午前七時竜家王北方高地ニ在リ

聯隊長　助川大佐

4

然ルニ敵ハ既ニ退却ヲ開始セルモノヽ如ク聯隊ハ処々ニ残敵ヲ殲滅シツヽ後方ニ激烈ナル銃砲声ヲ聞キツヽ前進シ午前九

時二十五分左記追撃命令ヲ下達シ追撃ニ移レリ此ノ間旅団予備隊タリシ第十一中隊ハ野砲兵大隊ノ掩護中岡下ニ於テ有力ナル敵ト遭遇戦闘ヲ実施セリ

歩兵第三十八聯隊命令　十二月十三日午前九時二十五分　於　十字街東方五〇〇高地

一、聯隊前面ノ敵ハ退却セリ盆路口方面ヨリ退却セル敵ノ大部隊ニ対シ旅団予備隊及野砲兵隊ハ午前八時頃ヨリ殲滅戦ヲ行ヒ目下掃蕩中ナリ

二、聯隊ハ前記作命三ノ八六号ニ於テ示シタル進出線ニ追撃セントス

三、第一線部隊ハ速ニ該線ニ向ヒ敵ヲ追撃シ随所ニ敵ヲ殲滅スルヲ要ス殲滅戦ノ為ニハ一部隊ハ前記ノ線ヲ超エテ進出セシムヘシ追撃砲隊、聯隊砲中隊ハ速ニ第一線ニ追及スヘシ

四、軽装甲車隊ハ直ニ敵ヲ追撃スヘシ

五、余ハ予備隊ト共ニ前進シ和平門東側高地ニ至ル

六、紫金山方向ノ敵ハ潰走中ナルヲ以テ聯隊ノ左側方面随所ニ現出スル場合ヲ顧慮シ各部隊ハ随所ニ之ヲ殲滅スルヲ要ス

従テ各隊ハ相当ノ縦長ニ在ル事肝要ナリ

又小行李其ノ他後方機関ヲ敗残兵ニ曝露セサルヲ要ス

前衛司令官　助川大佐

5

正午頃十字街及紅山附近ノ旅団命令ニ基キ先ツ其ノ地点ヲ確保シタル後午後二時左ノ命令ヲ下達ス

前衛命令　十二月十三日午後二時　於　紅山西側高地

一、前面ノ敵ハ各方面ニ退却セリ

二、前衛ハ別命アル迄現在ノ地点ヲ確保シ一部ヲ以テ下関ニ向ヒ敵ヲ追撃セントス

三、歩兵第三十三聯隊第一大隊ハ現在ノ地点ヲ確保スヘシ

四、歩兵第三十八聯隊第一大隊（第一第三中隊欠）ハ下関方向ニ敵ヲ追撃スヘシ

五、第一中隊ハ和平門及中央門ヲ占領スヘシ

六、第三中隊（一小隊欠）ハ玄武湖北側高地ヲ確保スヘシ

七、軽装甲車隊ハ下関方向ニ敵ヲ追撃スヘシ

八、迫撃砲大隊ハ現在地ニ集結ス

九、聯隊砲中隊ハ現在地ニ兵力ヲ集結スヘシ

十、其ノ他ノ部隊ハ予備隊トス

紅山西方高地ニ兵力ヲ集結スヘシ

十一、各隊ハ何時ニテモ出発シ得シ得ル如ク準備シアルヲ要ス

十二、余ハ予備隊ト共ニ紅山西側高地ニ在リ

聯隊長　助川大佐

6

南京城ヲ固守セシ有力ナル敵兵団ハ光華門其ノ他ニ於テ頑強ニ抵抗セシモ各部隊ノ猛撃ニ依リ著シク戦意ヲ失ヒ続々主トシテ下関方向ニ退却ヲ関始セシモ前衛ハ先ツ独立軽装甲車第八中隊ヲシテ迅速果敢ナル進撃ヲ行ヒ午前一時四十分頃渡江中ノ敵五六千ニ徹底的大損害ヲ与ヘテ之ヲ江岸及江中ニ殲滅セシメ次テ主力ヲ以テ午後三時頃ヨリ下関ニ進入シ同日夕マテニ少クモ五百名ヲ掃蕩シ竭セリ

次テ左記城内外掃蕩ニ関スル支隊命令ヲ受領ス

〔支隊命令は五四五頁に掲載〕

7

午後七時左記前衛命令ヲ下達シテ該地附近ニ兵力ヲ集結シテ

厳ニ附近ヲ警備ス

前衛命令

十二月十三日午後七時
於 下関

一、敗残ノ敵ハ尚附近ニ徘徊ス
二、前衛ハ概ネ掃蕩ヲ修了セハ兵力ヲ下関南端附近ニ集結セントス
三、前兵（第一、第四中隊）下関丁字路附近ニ集結スヘシ
四、歩兵第三十八聯隊第一大隊（速射砲中隊配属ヲ解ク其ノ他如故）既ニ獲得セル点ヲ厳ニ守備スヘシ
五、前衛本隊ハ停車場南方地区ニ兵力ヲ集結シ露営スヘシ
六、露営地域ハ現地ニ於テ指示セシム
七、速射砲中隊ノ各配属ヲ解ク前衛本隊ニ復帰スヘシ
八、第一中隊ハ和平門及中央門、金川門ヲ占領シ該地附近ニ露営スヘシ
九、第一大隊小行李ヨリ小銃弾薬約四連匣ヲ軽装甲車隊ニ交附スヘシ
十、聯隊本部ヨリ小銃弾五〇〇発ヲ交附スヘシ
十一、本夜ノ給与ハ携帯セルモノヲ使用スヘシ
十二、露営間附近ノ民家等ニ立入不法行為ヲ実施セシメサル様幹部ハ注意スヘシ
十三、各国ノ権益内ニハ武装シタルモノヲ立入レサル様教育スヘシ
十四、余ハ露営地ノ中央部ニ在リ

前衛司令官　助川大佐

(五)、戦闘後ニ於ケル彼我形勢ノ概要

敵ノ敗残兵ノ一部ハ南京城内ニ在ルモノヽ如ク大部ハ下関ニ圧迫シタル敵ハ其ノ退路ヲ失シ我ニ殲滅セラレタルモ極少数ノ敵ハ揚子江ヲ甫口ニ渡河シテ敗走セルカ如シ下関ニ圧迫セシ敵ハ少クモ二万ヲ下ラサルカ如シ

(六)、各人各隊ノ武功ニシテ特ニ抜群ナルモノ

(1) 各人武功特ニ抜群ナルモノ

第一大隊長	陸軍歩兵中佐	竹内　正
聯隊副官	陸軍歩兵少佐	児玉　義雄
第一中隊長	陸軍歩兵大尉	奥藤悟一郎
聯隊旗手	陸軍歩兵少尉	蛭沢　憲一
聯隊通信班長代理	陸軍歩兵准尉	西峯　義雄
聯隊本部要員	陸軍歩兵伍長	久保　実
軍旗歩哨	陸軍歩兵上等兵	上田　正夫
同	同	増田　善祐
同	同	奥西二三四
同	同	奥田　信造
同	同	宮本源三郎
独立軽装甲車第八中隊長陸軍歩兵大尉		福田林治

(2) 各隊武功特ニ抜群ナルモノ

第一大隊
第一中隊
独立軽装甲車第八中隊

附表第一　戦闘詳報第一一号附表

昭和十二年十二月十二日～十三日　十字街及興衛附近戦闘詳報死傷表

区分	戦闘参加人馬			死			傷			生死不明		
隊号	将校	准士官下士官兵	馬匹	将校	准士官下士官兵	馬匹	将校	准士官下士官兵	馬匹	将校	准士官下士官兵	馬匹
聯隊本部	四	二六〇	九八									
第一大隊	一二	九〇八	一一〇	一	四			七				
第三大隊	一二	九三九	一一二		三			一〇				
歩兵砲中隊	二	一六〇	五三									
速射砲中隊	二	九〇	二〇									
総計	三二	三、三五七	三九三	一	七			一七				

備考

附表第二　戦闘詳報第一一号附表

昭和十二年十二月十二日～十三日　十字街及興衛附近戦闘詳報武器弾薬損耗表

種類	区分	隊号	聯隊本部	第一大隊	第三大隊	歩兵砲中隊	速射砲中隊	計	備考
消費	砲弾	榴弾		62		10		72	
		榴霰弾							
	銃弾	小銃	500	18,700	6,500			25,700	
		機関銃		9,040	5,400			14,440	
		拳銃	67					67	
		擲弾筒		34				34	
		手榴弾							
損失	武器	弾薬車							
		予備品車							
		機関銃							
		歩兵銃							
		騎銃							
	弾薬	榴弾							
		榴霰弾							
		小銃							
		機関銃							
	其他武器								

附表第三　戦闘詳報第一一号附表

昭和十二年十二月十二～十三日　十字街及興衛附近戦闘詳報鹵獲表

種類	区分	隊号	聯隊本部	第一大隊	第三大隊	歩兵砲中隊	速射砲中隊	計	備考
俘虜	将校								自動車ハ下関碼頭ニ敗走セシ敵カ揚子江岸浦口ニ渡河ノ際捨テタルモノ及運転逃走中タリシモノヲ示ス
	准士官 下士官兵								
	馬匹		七	一〇	八			二五	
戦利	銃		四三	二五〇	一七〇			四六三	
	砲								
	銃弾			一五、〇〇〇	一〇、〇〇〇			二五、〇〇〇	
	砲弾								
	器具								
	糧秣								
	自動車		二	三	三	一		九	

○歩兵第三十八聯隊『戦闘詳報』第十二号

（昭和十二年十二月十四日）

南京城内戦闘詳報

㈠、戦闘前ニ於ケル彼我形勢ノ概要

敵ハ南京西北部下関ヨリ揚子江北岸ニ敗走セシモ我ノ進出急ナリシ為メ全ク退路ヲ扼止セラレ殆ト殲滅セラレタルモ城内ニハ尚抵抗ノ意志ヲ有スル敵相当多数潜在シアルモノヽ如シ十二月十四日旅団ハ南京城中央門以西ニ位置シ南京城内外ノ掃蕩ヲ徹底的ニ実施センコトヲ企図シ左記命令ヲ下達セラル

当時旅団司令部ハ中央門外ニ在リテ聯隊ハ下関ニ在リ連絡稍々不便ナリ〔命令は五四五頁に掲載〕

㈡、戦闘ニ影響ヲ及シタル気象及地形等ノ状態

1 日出時刻ハ概ネ午前七時ニシテ快晴気温ハ日中温暖夜間モ又星明アリ

2 地形及住民

南京城内ニハ避難民相当多数有リタルモ之等ハ一地区ニ集合避難シアリテ掃蕩地区内ニハ住民殆ト無シ

㈢、彼我ノ兵力其ノ他ノ状況

1 敵ハ統制ノ許ニ我ト交戦ノ意図ヲ有スルカ如キモノ無キカ敗残潜在スル数ハ少クモ五、六千名ヲ下ラス

2 我ノ兵力ハ第二大隊及聯隊砲中隊速射砲中隊

3 交戦セシ敵ノ団隊号ハ第三十六師ノ一部並ニ教導総隊及清涼山砲台守備隊ノ敗残兵ナルカ如シ

㈣、各時機ニ於ケル戦闘経過

1 掃蕩経過ノ概要別紙要図ノ如シ

2 聯隊ハ午前九時掃蕩命令ヲ下シ午前十時展開線ニ就カントセシモ途中金川門其ノ他ニ障碍物多ク行進渋滞シ午前十一時ニ至リ予定ノ線ニ展開ス

歩兵第三十八聯隊命令

十二月十四日午前九時
於 下関

一、敵ハ全面的ニ敗北セルモ尚抵抗ノ意志ヲ有スル者散在ス

旅団ハ本十四日南京北部城内及城外ヲ徹底的ニ掃蕩ス

歩兵第三十三聯隊ハ獅子山砲台中山路中央三叉路以西地区及下関ヲ掃蕩ス

二、歩兵第三十八聯隊（第二大隊欠）ハ和平門―金川門―中山路（含マス）ト中央門トノ大通交叉点ノ水関ノ地区内ヲ掃蕩シ支那兵ヲ撃滅セントス第二大隊ハ玄武湖以東紫金山ニ至ル間ヲ掃蕩スル筈

三、第一大隊ハ右掃蕩隊第三大隊ハ左掃蕩隊トス

両大隊掃蕩区域ノ境界模範馬路中央門南北ノ大道ヲ連ヌル線トス線上ハ左大隊ニ属ス

四、両掃蕩隊ハ午前十時中山路ノ線ニ準備スヘシ

午前十時マデニ第一中隊ヨリ鐘阜門（中央門西方一粁）玄武門―水関―北極閣及中央門通リ中山路トノ三叉点附近ノ要点ヲ一部ヲ以テ占領スルヲ要ス

掃蕩経過ノ概要次ノ如シ

(1) 中山路通リ出発ハ午前十時三十分トス其ノ東方鉄道線路（南京鉄路）百年亭（北極閣ノ東方約八粁）ノ線ニテ概ネ午前十一時三十分鐘阜門―玄武門西連ヌル線午後零時三十分

(2) 中央門西南方高地ヲ東北ニ亘ル線概ネ午後一時三十分

(3) 其ノ以北和平門ニ至ル午後二時

(4) 午後三時掃蕩終レハ第一大隊ハ和平門附近ニ第二大隊ハ中央門附近ニ兵力ヲ集結スヘシ

(5) 歩兵砲中隊ハ中央門北側高地ニ午前十時三十分迄ニ陣地ヲ占領シ城外ニ脱出スル敵ヲ殲滅スヘシ

(6) 通信班ハ第一大隊第三大隊聯隊本部間ニ電話連絡午前十時三十分ニ完了スヘシ

(7) 其ノ他（速射砲中隊及各隊小行李車輛ヲシテ市内ニ持入リ出来ナイモノ）ハ速射砲中隊長ノ区署ヲ以テ中央門外ニ至リ待機スヘシ

第三大隊ヨリ歩兵二分隊ヲ援護部隊トシテ派遣スヘシ

(8) 第四中隊ノ一小隊ハ予備隊トス金川門外ニ位置スヘシ

(9) 余ハ先ツ金川門ニ至ル

聯隊長 助川大佐

3 概ネ予定ノ如ク掃蕩ヲ実施中左ノ旅団命令ヲ受ケタルヲ以テ直ニ通信班ヲシテ旅団司令部―下関間ノ電話連絡ニ任セシメタリ

左側支隊命令

十二月十四日午後一時〇分
於 南京中央門外司令部

一、軍（師団）ト海軍トノ連絡ノ為メ本日午後五時迄ニ次ノ如ク電話ヲ架設スヘシ

旅団☒―☒〔有線通信☒は電話機〕歩兵第三十八聯（隊作夜ノ位置） 歩兵第三十八聯隊

歩兵第三十八聯隊☒―☒軍艦「勢多」歩兵第三十三聯隊但シ軍艦「勢多」ハ錨地京滬桟橋

4 午後五時三十分掃蕩ヲ完了ス其ノ結果附表第二ノ如シ

聯隊ハ一部ヲ以テ和平門中央門ヲ守備シ主力ヲ以テ宿営地ニ露営スル為メ左ノ命令ヲ下達ス

歩兵第三十八聯隊命令

十二月十四日午後九時三十分
於 下関

一、敗走セル敵ハ尚残留シアリ

二、聯隊（第二大隊欠）ハ一部ヲ以テ要点ヲ確保シ主力ヲ以テ下関ニ兵力ヲ集結シ村落露営セントス

三、第一中隊ハ和平門及中央門ノ守備ニ任スヘシ特ニ支那人ヲ一切出入セシムヘカラス

四、各隊ハ該設営者ノ指示セル処ニ従ヒ村落露営スヘシ

五、露営司令官竹内中佐トス

六、本夜ノ給与ハ携帯セルモノヲ使用スヘシ

七、第三大隊ハ聯隊砲ノ給与ヲ担任スルモノトス

衛生隊ハ中央門外ニ繃帯所ヲ開設シアリ又第三野戦病院ハ城内中央医院ニ在ル筈

八、余ハ露営地ノ略々中央ニ在リ午後十一時三十分命令受領者ヲ差出スヘシ

聯隊長 助川大佐

㈤、戦闘後ニ於ケル彼我形勢ノ概要

敵ハ全ク殲滅セシヲ以テ我ハ掃蕩後再ヒ下関ニ至リ露営セリ

㈥、齟齬過失其ノ他将来ノ参考ト成ヘキ事項

附表第一　戦闘詳報第一二号附表

昭和十二年十二月十四日　南京城内戦闘詳報死傷表

区分 / 隊号	戦闘参加人馬			死			傷			生死不明			備考
	将校	准士官下士官兵	馬匹	将校	准士官下士官兵	馬匹	将校	准士官下士官兵	馬匹	将校	准士官下士官兵	馬匹	
聯隊本部	四	二六〇	九八										
第一大隊	一一	八九七	一一〇					一					
第三大隊	一二	九二六	一一二					一					
歩兵砲中隊	二	一六〇	五三										
速射砲中隊	二	九〇	二〇										
計	三一	二、三三三	三九三					二					

附表第二　戦闘詳報第一二号附表

昭和十二年十二月十四日　南京城内戦闘詳報武器弾薬損失耗表

種類	区分	隊号	聯隊本部	第一大隊	第三大隊	歩兵砲中隊	速射砲中隊	計	備考
消費	砲弾	榴弾							
		榴霰弾							
	銃弾	小銃	250	1,260	958			2,468	
		機関銃		300	200			500	
		拳銃	15	49	65			129	
		擲弾筒							
		手榴弾			2			2	
損失	武器	弾薬車							
		予備品車							
		機関銃							
		歩兵銃							
		騎銃							
	弾薬	榴弾							
		榴霰							
		小銃							
		機関銃							
	其他武器								

昭和十二年十二月十四日　南京城内戦闘詳報鹵獲表

種類	区分	俘虜			戦利								
隊号		将校	准士官下士官兵	馬匹	銃	迫砲	銃弾	砲弾	器具	糧秣	拳銃	敵ノ秘密書類
聯隊本部					五〇	一五	五、〇〇〇				五〇	一包
第一大隊					五〇〇	五	二五、〇〇〇	五〇〇				
第三大隊		七〇	七、一三〇		七〇〇	三	三〇、〇〇〇	三〇〇				
歩兵砲中隊												一包
速射砲中隊												
計		七〇	七、一三〇		一、二五〇	二三	六〇、〇〇〇	八〇〇			五〇	二包

備考

一、俘虜七、二〇〇名ハ第十中隊堯化門附近ヲ守備スヘキ命ヲ受ケ同地ニ在リシガ十四日午前八時三十分頃数千名ノ敵白旗ヲ掲ゲテ前進シ来リ午後一時武装ヲ解除シ南京ニ護送セシモノヲ示ス

二、敵ノ秘密書類一包ハ地図其他ノ秘密ニ属スルモノナリ

旅団命令ニ依ル掃蕩区域内ノ掃蕩ヲ実施セシニ既ニ歩兵第二十聯隊ノ一部ヲ以テ掃蕩ヲ終レル区域アリタリ

本掃蕩間功績顕著ナル者ナシ

(七)、本掃蕩ニ於テ南京鉄道部内ニ在リシ敵ノ第五十二師参謀長「孟化一」ノ作戦室ニ於テ押収セシ敵ノ防禦陣地配備要図（五万分ノ一）地図ヲ縮少復製シタルモノヲ別紙ノ通リ添付ス

○歩兵第三十三聯隊『南京附近戦闘詳報』

紫金山附近ノ戦闘

其一、戦闘ニ影響ヲ及ホシタル天候気象及戦闘地ノ状態

(1) 紫金山ハ南京城ノ東北側ニ位シ山形馬背ヲナシテ東西ニ走リ其東南端ニ鞍部ヲ隔テ、▲二二七・五高地アリ西端ニ近ク▲四八八・五（第一峰）高地屹立シ其西南又鞍部ヲ隔テ、天文台高地ト相対ス而シテ東方稜線ノ巔頂ハ北側ニ面シ懸崖ヲナシ其大部ハ攀登ヲ許サス南麓ハ斜面稍々緩ニシテ通過困難ナル樹林ヲ除キ概シテ歩兵ノ攀登至難ナラス

第一峰ハ紫金山ノ最高峰ニシテ四周ヲ瞰下シ是ヨリ東北方ニ面シ急ニ低下シタル立阜岔路口方向ニ起伏シテ相連ル

(2) 敵ハ紫金山一帯ノ高地ヲ重要視シ相当堅固ニ陣地ヲ構築シ敵軍中最モ優秀ナル教導総隊一旅ヲ骨幹トスル部隊ヲ重畳ニ配備シ頑強ニ我ニ抵抗セリ

▲二二七・五高地ニハ東方及東北方ニ面シ其麓中腹山頂附近ニ一部「トーチカ」ヲ配シタル掩蓋機関銃座ヲ構築シ同高地ノ西方ニ連ナル▲三八二・五高地ノ東西一帯ノ稜線ニハ主トシテ北方及南方ニ面シテ既設陣地アリ又稜線上東方ニ面シテハ軽易ナル鉄条網ヲ有スル急造セル数線ノ陣地ヲ構築スルモ配備上ノ弱点ヲ形成セリ

第一峰ノ東麓及東側閉鎖曲線高地第一峰南麓附近ニハ堅固ナル「トーチカ」及ビ掩蓋機関銃座ヲ配シ数線ノ散兵壕アリテ鉄条網ヲ囲ラシ又第一峰北麓及岔路口ニ連ナル高地ニハ数線ノ陣地ヲ堅固ニ構築シアリ而シテ我カ第一峰附近ノ攻撃ニ際シテハ後方及側方ヨリ陸続トシテ敵兵増援シ来レリ

天文台高地ニハ独立シテ堅固ニ防禦工事ヲ施シ紫金山攻略セラルヽモ尚抵抗シ得ル如ク著意セラレアルモ第一峰奪取後ハ殆ント抵抗スルコトナク退却セリ

(3) 十二月十日乃至十三日ニ亘ル我攻撃間天候極メテ良好ニシテ夜半ニ至ル迄月明アリ我カ行動為ニ便ナリ然レ共夜間山頂西南風アリテ寒冷肌ヲ刺シ将兵ハ露天ニ夜ヲ徹シ又給水ハ全ク欠乏シ各部隊ハ炊爨ノ為一部ヲ下山セシメテ遠ク黄馬又ハ上五旗ニ於テ飯盒炊爨ヲ行ヒ水ト共ニ之ヲ山上ニ搬送ス臂力ヲ以テ山上ニ運搬スル弾薬ノ補給又多大ノ困難ヲ感セリ然レトモ将兵ハ不撓不屈是等ノ不利ヲ克服シ一意戦闘ニ邁進スルヲ得タリ

其二、兵力編組

聯隊ハ第一大隊（一中隊欠）及第八中隊ヲ欠キ工兵一小隊並野砲兵第八中隊ヲ属セラル而シテ第一線部隊ハ輜重監視其他各種任務ニ服シ兵力充実セサルモノ多ク（最初ノ聯隊予備二ケ中隊ノ如キモ合計四小隊弱ナリキ）且戦闘間ニ於テモ傷者

ノ運搬弾薬補充等地形至難ナル為相当多数ノ兵力ヲ要シ戦闘実施上遺憾ノ点尠ナカラサリキ

其三、十二月十日ノ行動

一、攻撃部署及其重ナル理由

(1) 聯隊ハ十二月九日夜師団命令『歩兵第三十三聯隊（第一大隊及第五第八中隊欠）ハ右翼隊トナリ本道（含マス）北側地区ヨリ攻撃前進スヘシ右側支隊トノ戦闘地境ハ五旗蔣王廟玄武湖東方五百米南京城東北角ヲ連ル線（線上ハ右ニ含ム）トス』ニ依リ紫金山一帯ノ高地ヲ攻略スヘキ重大任務ニ服スルノ光栄ニ浴シ将兵ノ志気愈々揚ル

(2) 聯隊ハ右命令ニ基キ十二月十日午前七時（天明稍々前）下麒麟門出発第三大隊（二中隊欠）ヲ前衛トシ上麒麟門西方約四百米附近ヨリ獅子垻ヲ経テ青塘東北側地区ニ前進シ該地附近ヲ占領シ攻撃ノ目的ヲ以テ◬二二七高地及紫金山方向ノ敵情地形ヲ偵察セシメ爾余ノ聯隊主力ハ聯隊本部第九第十中隊第二大隊聯隊砲及速射砲中隊聯隊小行李第二大隊ノ一小隊ノ順序ヲ以テ前衛ニ続行シ午前八時三十分黄家庄附近ニ集結ス聯隊長ハ青馬東方高地ニ至リ敵情地形ヲ偵察セリ

(3) 聯隊長ハ全般ノ地形及敵配備ノ概要ヲ判断シテ先ツ主力ヲ以テ◬二二七・五高地ヲ攻略シ続イテ戦果ヲ紫金山稜線ニ沿ヒ西方ニ拡張スルニ決シ午前九時前衛タル第三大隊ヲシテ既ニ占位シアル青馬村東北側稜線上ニ展開シ攻撃セシムルト共ニ特ニ聯隊砲速射砲中隊ヲシテ密ニ第三大隊ニ協力セシム又本隊ニ在リシ第二大隊（二中ト一小隊欠）ハ第三大隊ノ右黄馬北側方向ヨリ◬三八二・五（二万五千地図）東側ノ比較的攀登容易ナル地区ヨリ先ツ紫金山ノ東北部ニ向ヒ攻撃シテ第三大隊ニ協力セシメ第九中隊ヲ黄馬南側附近両第一線大隊ノ中間ヨリ紫金山東北角ニ向ヒ攻撃セシム又第十中隊ヲ聯隊予備トシ第三大隊ノ後方ニ控置セリ

聯隊重点指向選定ノ理由

紫金山一帯ノ稜線ハ前述ノ如ク地形上北方ヨリスル攻撃ハ最モ困難トスル所ニシテ又南方ヨリスル攻撃ハ先ツ本道方面ノ堅固ナル敵陣地ヲ突破後ニ非サレハ不可能ナルト左翼隊攻撃期待シ得ス故ニ寧ロ兵力使用地域狭小ナルモ稜線上ヲ西方ニ向ヒ攻撃ヲ進捗セシムルヲ適当ト思考セリ而シテ之カ為ニハ速ニ◬二二七・五ヲ奪取スルコト必要ナルヲ以テ先ツ重点ヲ◬二二七・五ニ指向シ爾後同高地西北側鞍部ヲ経テ紫金山ノ稜線ニ進出シ尚重点方向ノ攻撃ニ協力シ且ツ◬二二七・五高地ヨリ紫金山ノ稜線ニ進出ヲ容易ナラシムル為第二大隊ノ主力ヲ◬三八二・五高地ノ東北部ニ向ヒ攻撃セシメ又両大隊ノ間隔著シク大ナルヲ以テ中間ニ第九中隊ヲ挿入シ連繋ヲ保持セシメタリ

二、戦闘経過ノ概要

(1) 両第一線大隊ハ所命ノ如ク攻撃準備ノ位置ニツキ第三大隊ハ午前九時過攻撃前進ヲ行ハシム此間聯隊砲速射砲中隊ノ「トーチカ」掩蓋銃座ノ有効ナル銃眼射撃ニ依リ第三大隊ノ戦闘ハ着々進捗シ第一線ハ麓及中腹ノ敵陣地ヲ攻略シテ漸次山頂ニ攀登ス此ノ時敵ハ後方部隊ノ増援ニヨリ逆襲セシモ我ガ第一線ハ鋭意突撃ヲ実行シテ午前十時三十分◬二二七・五高地

ヲ確実ニ占領シ爾後予定ノ如ク鞍部ヲ経テ西方ニ戦果ヲ拡張セリ第二大隊ノ第一線ハ此ノ頃紫金山東北部斜面ヲ攀登中ニシテ第九中隊ハ稜線上ニ進出シ第三大隊長ノ指揮下ニ入レリ

(2) 両第一線大隊ハ爾後紫金山ノ東部附近ヨリ第二大隊ヲ第一線第三大隊ヲ第二線トシテ西方ニ向ヒ攻撃ヲ続行シ殊ニ第二大隊正面ハ敵兵増援シ加フルニ地形断崖ニシテ攻撃困難ナリシモ極力第一線ヲ推進シ午後四時◬三八二・五高地東側瘤続テ午後六時其次キノ瘤ヲ奪取スルヲ得タリ

此日午後四時頃第五中隊ハ聯隊ニ復帰シ上五旗附近ニ於テ第二大隊長ノ指揮下ニ入レリ

本攻撃ニ於テ聯隊砲及速射砲中隊ハ下麒麟門附近ヨリ青馬ニ進出スル道路嶮難ナリシタメ分解搬送ニテ各二門並ニ豊富ナル弾薬ヲ以テ戦闘ニ参加シ青馬東北方附近ニ陣地ヲ占領シテ密接ニ第三大隊ニ協力シ爾後黄馬附近ニ陣地ヲ変換シテ第九中隊及第二大隊ノ戦闘ニ有効ニ協力スルヲ得タリ

(3) 第一線大隊攻撃進捗ニ伴ヒ聯隊砲ハ◬二二七・五北側鞍部ヨリ紫金山南麓附近ニ進出シテ主トシテ第三大隊ニ協力シ速射砲ハ第三大隊ニ追随シテ山頂ニ陣地ヲ占領シ爾後第二大隊ノ戦闘ニ協力セリ

此ノ日第一大隊ハ師団予備ヨリ聯隊ニ復帰ヲ命令セラレ午後二時頃青馬東北側ニ於テ聯隊長ノ手裡ニ入レリ是レヨリ先聯隊長ハ敵ノ大部隊右側支隊ニ圧迫セラレ鎮江—南京道ニ沿ヒ岔路口方面ニ退却中ナルノ報ニ接シ第一大隊ノ主力ヲ以テ先ツ之レヲ殲滅シテ聯隊ノ右側背ヲ安全ナラシムヘキ企図ヲ以テ第一大隊到着ト共ニ之ヲ率イテ上五旗ニ到リ有力ナル一部ヲ下五旗北側地区ニ出シテ偵察ヲ命セリ然ルニ既ニ敵兵ヲ認メサルヲ以テ下五旗ニ一ケ中隊ヲ残置シ岔路口方向ニ対シ聯隊ノ右側背ヲ援護セシメ午後七時其主力及予備隊ヲ黄馬及青馬北端附近ニ集結シテ夜ヲ徹シ明早朝ニ於ケル紫金山稜線ヘノ進出ヲ準備セリ

(4) 聯隊長ハ第一線ノ紫金山東方稜線ヲ奪取セル戦果ヲ拡張シ速ニ◬四四八・五高地（第一峰）ヲ奪取スルニ決シ十日午後六時二十五分「歩三三作命甲第一二八号）ヲ下達シ極力前面ノ敵ヲ攻撃セシム

両第一線大隊ハ聯隊命令ニ基キ夜間尚攻撃ヲ続行セルモ敵兵頑強ニ抵抗シ且地形ノ嶮難ト戦場地域ノ狭隘トハ我戦闘意ノ如ク進捗セサリキ

(5) 十日ニ於ケル戦闘経過ノ概要要図第一ノ如シ

三、関連セル隣接部隊

(1) 聯隊ハ紫金山攻撃ノ第一日（十日）ハ隣接部隊トノ連繋及砲兵ノ協力ハ之ヲ期待スルヲ得サリキ配属セラレタル野砲兵第八中隊モ未タ来着スルニ至ラス全ク聯隊独力ノ攻撃ナリシヲ以テ特ニ聯隊砲其他重火器ノ効果ヲ発揮スルニ努メタリ

(2) 聯隊ニ復帰セシ第一大隊ノ主力ヲ更ニ右側支隊ニ転属スヘク本日夜木佐木参謀ヨリ電話ニテ交渉アリ其要旨ハ『右側支隊兵力寡少ナルハ軍司令官宮殿下御懸念アラセラレツヽアリ然レ共紫金山ノ攻略ハ師団トシテモ最モ重要視スル所ニシテ万難ヲ排シテ奪取セサルヘカラス今聯隊ノ状況ハ第一大隊主力ヲ右側支隊ニ転属可能ノ状況ニアリヤ意見承リ度』ト此ノ木佐木参謀ノ電話ハ言々熱ヲ含ミ且聯隊長ノ立場ヲ切々忖度ス

ル所アリ聯隊長ハ同官ノ意ノアル所ヲ感謝スルト共ニ即座ニ第二第三大隊（各大隊共欠数アリ）ヲ以テ必ス紫金山ヲ攻略スヘシ第一大隊ノ右側支隊ニ転属何等差支ナシ唯目下予備隊ハ一中隊（一小隊欠）ナルヲ以テ小銃一中隊ヲ残置セラレナハ幸甚ナラント回答セリ即チ本夜ノ師団命令ニ於テ実施セラレタリ

其四、十二月十一日行動

一、攻撃部署

聯隊ハ十日午後十時（受領午前一時半頃）ノ師団命令ニ基キ依然攻撃ヲ続行シ紫金山第一峰ヲ占領シ続イテ大平門富貴山附近ヨリ南京城ニ突入セントス而シテ師団命令ニ於テ左翼隊トノ戦闘地境ハ◬二二七・五明孝陵北端明故宮東北端ヲ連ヌル線ニ変更セラレ我カ使用地域ハ南麓ニ於テ著シク削減セラレタリ

聯隊ハ十一日午前二時三十五分命令ヲ下達（歩三三作命甲第一二九号）シ第二大隊（第八中隊、第七中隊ノ欠キ工兵一小隊ヲ属ス）ヲシテ依然攻撃ヲ続行シ一小隊◬四八八・五高地ヲ攻略シ爾後該線附近ヲ占領シテ隊伍ノ整頓ヲ行ヒ第三大隊（第十中隊欠）ハ現在地附近ニ於テ攻撃ヲ準備シ明払暁先ツ第一線ヲ以テ概ネ孫総理陵墓南北ノ線ニ進出シ爾後両第一線大隊ハ天文台高地ヲ攻略シテ大平門富貴山ニ向ヒ前進ヲ準備シ聯隊砲及速射砲中隊ハ天明後主トシテ第二大隊ノ攻撃ニ一部ヲ以テ第三大隊ノ戦闘ニ協力セシム

二、戦闘経過ノ概要

(1) 第二大隊ハ日没後攻撃ヲ続行スルモ成果意ノ如クナラサルヲ以テ聯隊長ハ明十一日未明迄ニ先ツ◬三八五・四高地附近ヲ完全ニ占領セシムヘキヲ命ス乃チ大隊長ハ一部（第六中隊）ヲ以テ十一日未明◬三八五・四ノ瘤ヲ夜襲スルニ決シ其準備ヲ完了シテ予定ノ如ク之ヲ断行ス（地域狭隘ナル為一中隊ヲ使用スルヲ適当トセリ）然ルニ懸崖ニ依レル敵ハ手榴弾等ヲ以テ頑強ニ抵抗シ且左側背ヨリ約二百名ノ敵逆襲ヲ受ケ死傷続出シ（中隊ノ死傷約七十名）一時攻撃頓挫セシモ中隊長ハ更ニ勇ヲ鼓シテ終ニ陣地ノ一角ヲ占領シ天明ニ至ル玆ニ於テ大隊長ハ天明後第七中隊ヲ増援シテ午前八時五十分完全ニ本瘤ヲ占領シ爾後第五中隊（機関銃一小隊配属）ヲ以テ戦果ヲ拡張セリ

(2) 第三大隊ハ左第一線トシテ嶺頂ヨリ南方山腹附近ニ位置シアリシカ地形上敵ノ瞰制ヲ受ケ且迫撃砲ノ射撃ヲ蒙リ戦闘進捗セス第二大隊正面ノ進捗ニ伴ヒ其稍々左翼後ノ山腹ニ進出スルヲ得タリ

(3) 聯隊長ハ全般ノ為極力◬四八八・五高地ヲ速ニ攻略スルノ必要ヲ痛感シ更ニ第一線ノ状態ヲ実視スルニ戦力発揮ノ為第三大隊ヲ第二大隊ノ左翼ニ連繋シテ略同線ニ進出スル如ク統制スルノ必要ヲ認メ午後四時三十分命令「歩三三作命甲第百三十号」ヲ以テ第二大隊ヲ稜線（含ム）ヨリ北側地区第三大隊ヲ同南側地区ヨリ彼線（指示ス）ニ進出シ前面ノ敵陣地ヲ攻撃シ速射砲ヲシテ特ニ第二大隊ニ協力セシメ自ラ◬三八二・五高地ニ位置シテ所要ノ指示ヲ行ヒ両第一線ヲ督励ス

両第一線大隊ハ鋭意攻撃ヲ続行シ爾後更ニ第一峰ニ対スル攻撃ヲ準備中ナリ

(4) 重火器配属砲兵等ノ行動

㋑ 本日ノ行動ニ於テ各大隊ノ機関銃及大隊砲ハ多大ノ幸苦ヲ冒シテ紫金山上第一線ニ追随シテ陣地ヲ占領シ能ク其任務ヲ完フセリ

㋺ 特ニ速射砲中隊長中島中尉ハ部下ヲ叱咤激励シ名状スヘカラサル地形ノ障碍ヲ排除克服シ其一門ヲ紫金山上第二大隊第一線ノ直後ニ陣地ヲ占領シ「トーチカ」及掩蓋銃座ヲ破壊シテ最モ有効ニ第二大隊ノ攻撃ニ協力シ偉功アリ其部下小隊長岡村少尉ハ紫金山上ニ於テ終ニ壮烈ナル戦死ヲ遂ク

㋩ 又聯隊砲中隊ハ十一日天明後◬二二七・五高地西側附近ヨリ第一線ニ協力シ爾後戦闘ノ進捗ト共ニ紫金山東南麓紀念館附近ニ陣地ヲ占領シテ第一線ニ協力セリ而シテ同夜敵ノ夜襲ヲ受クルモ自ラ克ク防衛シテ無事ナルヲ得タリ

㋥ 聯隊ニ配属セラレタル野砲兵第八中隊ハ本十一日夜漸ク聯隊長ノ手裡ニ入リシヲ以テ上五旗附近ニ陣地ヲ占領シテ右第一線タル第二大隊ニ協力セシム

㋭ 昨十日来通信班ノ功績偉大ナルモノアリ即聯隊長ハ攻撃開始ニ際シテ青馬東北方高地ニ位置シ爾後第一大隊ト共ニ上五旗ニ移動シ更ニ黄馬ニ至リ翌早朝紫金山ニ登ル即チ通信班ハ此ノ間聯隊長ト紫金山上ニ在ル第一線両大隊トノ間嶮峻ナル山岳深谷ヲ通シ終始絶大ナル艱苦ヲ排除シテ完全ニ連絡ヲ保持シ戦闘指揮ニ些モ遺憾ナキヲ得タリ

師団通信隊ヨリ派遣セラレタル箕田准尉又聯隊ト師団司令部トノ間ノ連絡ニ遺憾ナキヲ得タリ

三、聯隊ニ関連セル隣接部隊ノ動作

(1) 聯隊ノ紫金山攻撃ハ意ノ如ク迅速ニ進捗セサリシト雖モ而モ左右隣接部隊ニ比スレハ著シク西方ニ突進シアルノ態勢ニアリキ之カ為両隣接部隊前面ノ敵ノ側背ヲ脅威スルト共ニ自ヲ又側背ニ対シ射撃ヲ蒙リシコトアリ特ニ十一日未明第六中隊ノ夜襲時ニ於テハ左側背ヨリ敵ノ逆襲ヲ受ケ又十一日夜左後方第九聯隊第一線附近ニ位置セル聯隊砲ハ敵ノ夜襲ヲ受ケ聯隊ノ右側方ハ岔路口西南方高地ノ敵ヨリ重火器ノ遠距離射撃ヲ受ケタリ然レ共第一線大隊ハ之等ニ躍躍スルコトナク一意専念前面ノ敵陣地攻略スヘク努力セリ

(2) 師団砲兵及軍砲兵ノ一部ハ師団幕僚ノ配慮ニ依リ本日ノ攻撃ニ協力スル所アリシモ連絡将校来ラス且聯隊ト師団司令部ヲ介スル砲兵トノ連絡意ノ如クナラス而モ地形ノ関係観測ノ困難等ハ聯隊前面ノ敵ニ対シ其射撃効果ヲ発揮スルヲ得ス本日ノ攻撃実施又聯隊独力ヲ以テ実行セリ

(3) 本日師団参謀ヨリ電話ヲ以テ左ノ意味ノ連絡アリ

軍司令官宮殿下ニ於カセラレテハ紫金山攻略ニ関シ御懸念アラセラレ「其占領ノ速カナランコトヲ御希望アラセラレル」ト聯隊ハ既ニ紫金山攻撃ニ任スルヲ光栄トシテ努力奮闘シアルカ上ニ今又殿下ノ御意図ヲ拝シ将兵ハ感激措ク所ヲ知ラス志気益々揚リ愈々死力ヲ尽シテ万難ヲ排シ速カニ奪取スヘク覚悟セリ

其五、十二月十二日ノ行動

一、攻撃部署

師団ハ十二日朝ヨリ砲兵射撃ノ成果ヲ待チテ第一線歩兵ノ攻撃ヲ開始シ紫金山第一峰ヨリ農林場ヲ経テ遺族学校高地ニ亘ル敵